

都市計画道路木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1冊

西ハゼ土居遺跡

2005年3月

高松市教育委員会



西ハゼ土居遺跡遠景（東から）

例 言

- 1 本報告書は、都市計画道路木太鬼無線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第1冊で、西ハゼ土居（にしはぜどい）遺跡の報告を収録した。
- 2 発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。

調査地	高松市西ハゼ町179-5ほか	
調査期間	試掘調査	平成8年8月5日～12日
		平成9年6月6日～9月17日
		平成10年5月22日～8月3日
	防火水槽埋設工事立会	平成9年9月18日
	下水管理設工事立会	平成10年4月7日、5月6日
- 3 発掘調査から整理作業、報告書執筆・編集まで高松市教育委員会文化部文化振興課文化財専門員大嶋和則が担当した。
- 4 本調査に関して、以下の業務を業者委託発注により実施した。

発掘調査掘削工事	河西建設株式会社（平成9年度）、大一工業株式会社（平成10年度）
航空写真測量業務	アジア航測株式会社
遺物写真撮影業務	西大寺フォト
- 5 発掘調査及び遺物整理・本報告書刊行にあたって、下記の関係諸機関ならびに方々から貴重なご教示・ご指導を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順、敬称略）
香川県教育委員会、（財）香川県埋蔵文化財調査センター、勝賀城跡保存会、鶴尾地区老人会、秋山忠、片桐孝浩、寒川旭、外山秀一、丹羽佑一、松本和彦
- 6 発掘調査及び遺物整理・本報告書刊行にあたって、下記の方々の協力を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順、敬称略）
末光甲正・中西克也（讃岐文化遺産研究会）、山内康郎（徳島文理大学大学院）、坂東祐介（徳島文理大学）、十河佐千子・松原敬太・吉本和哉（香川大学）、今西康代（佛教大学）、鍋坂佑紀子（京都橘女子大学）
- 7 挿図として、国土地理院発行の1/25,000地形図「高松南部」を一部改変して使用した。
- 8 本報告の高度値は海拔高を表し、方位は国土座標第IV系（日本測地系）の北を示す。
- 9 本書で用いる遺構の略号は次の通りである。

SA……欄列	SB……掘立柱建物	SD……溝	SE……井戸	SK……土坑
SP……柱穴	NR……自然河道			
- 10 調査は複数年次、複数調査区、複数遺構面になることから、遺構番号は調査区番号、遺構面番号、3桁の遺構番号の順で、合計5桁の数字で記載した。（例 IV区・第2遺構面・土坑109 = SK42109）
なお、自然河道については調査区をまたがるものも有的时候から、2桁の番号で記載した。
- 11 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

本文目次

巻頭図版

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	3
第3節 整理作業の経過	3
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	
第1節 I区の調査	7
第2節 II区の調査	19
第3節 III区の調査	22
第4節 IV区の調査	45
第5節 V区の調査	46
第6節 VI区の調査	58
第7節 VII区の調査	82
第4章 まとめ	
第1節 遺構の変遷について	85
第2節 屋敷地の居住者について	101
観察表	113
写真図版	121
報告書抄録	135

挿図目次

第 1 図	西ハゼ土層遺跡位置図	1	第 49 図	V 区南壁土層断面図	47
第 2 図	試掘トレンチ及び調査区位置図	2	第 50 図	NR09 出土遺物実測図	48
第 3 図	周辺の遺跡分布図 (S-I/25, 000)	5	第 51 図	SE51001 平・断面図及び出土遺物実測図①	49
第 4 図	I 区南壁上層断面図及び包含層出土遺物実測図	8	第 52 図	SE51001 出土遺物実測図②	50
第 5 図	I 区平面図①	9	第 53 図	SD51001 平・断面図及び出土遺物実測図	52
第 6 図	I 区平面図②	10	第 54 図	SD51006 平・断面図及び出土遺物実測図	52
第 7 図	I 区検出集砂平・断面図	11	第 55 図	SD51018 平・断面図及び出土遺物実測図	53
第 8 図	NR02 平・断面図及び遺物実測図	13	第 56 図	SK51001 平・断面図及び出土遺物実測図	54
第 9 図	SK12001 平・断面図	14	第 57 図	SK51010 平・断面図及び出土遺物実測図	55
第 10 図	SK12002 平・断面図	14	第 58 図	SK51017 平・断面図及び出土遺物実測図	55
第 11 図	SO12001 平・断面図	14	第 59 図	SK51020 平・断面図及び出土遺物実測図	56
第 12 図	SB12001 ~ SB12006 平・断面図	15	第 60 図	SK51025 平・断面図及び出土遺物実測図	56
第 13 図	SB12001・SB12002 平・断面図	16	第 61 図	SK51030 平・断面図及び出土遺物実測図	57
第 14 図	SB12003・SB12004 平・断面図	17	第 62 図	SK51031 平・断面図及び出土遺物実測図	57
第 15 図	SB12005・SB12006 平・断面図	18	第 63 図	VI 区平面図①	58
第 16 図	II 区南壁土層断面図及び包含層出土遺物実測図	20	第 64 図	VI 区平面図②	59
第 17 図	II 区平面図及び NR03・NR04 出土遺物実測図	21	第 65 図	SB61002 平・断面図	60
第 18 図	II 区包含層出土遺物実測図	22	第 66 図	SB61012 平・断面図及び出土遺物実測図①	61
第 19 図	II 区南壁土層断面図	23	第 67 図	SB61012 出土遺物実測図②	62
第 20 図	III 区第 1 遺構面平面図①	24	第 68 図	SB61020 平面図	63
第 21 図	III 区第 1 遺構面平面図②	25	第 69 図	SB61020 断面図及び出土遺物実測図①	64
第 22 図	III 区第 1 遺構面平面図③	26	第 70 図	SB61020 出土遺物実測図②	65
第 23 図	III 区第 2 遺構面平面図①	27	第 71 図	SB61020 出土遺物実測図③	66
第 24 図	III 区第 2 遺構面平面図②	28	第 72 図	SB61021 断面図及び出土遺物実測図	67
第 25 図	III 区第 2 遺構面平面図③	29	第 73 図	SB61022 断面図及び出土遺物実測図	67
第 26 図	III 区集砂平・断面図	30	第 74 図	SD61023 平・断面図	68
第 27 図	NR06 平・断面図	31	第 75 図	SB61023 出土遺物実測図	69
第 28 図	NR06 出土遺物実測図	32	第 76 図	SE61001 平・断面図及び出土遺物実測図	70
第 29 図	SK32001 平・断面図及び出土遺物実測図	33	第 77 図	SE61002 平・断面図及び出土遺物実測図	71
第 30 図	SK32002 平・断面図及び出土遺物実測図	34	第 78 図	SK61005 平・断面図及び出土遺物実測図	72
第 31 図	NR04 出土遺物実測図①	36	第 79 図	SK61011 平・断面図及び出土遺物実測図	72
第 32 図	NR04 出土遺物実測図②	37	第 80 図	SK61012 平・断面図及び出土遺物実測図①	73
第 33 図	NR07 出土遺物実測図	37	第 81 図	SK61012 出土遺物実測図②	74
第 34 図	SK31001 平・断面図及び出土遺物実測図	38	第 82 図	SK61020 平・断面図及び出土遺物実測図	75
第 35 図	SA31001・SA31002 平・断面図	38	第 83 図	SK61021 平・断面図及び出土遺物実測図	75
第 36 図	SB31001 平・断面図	38	第 84 図	SK61033 平・断面図及び出土遺物実測図	76
第 37 図	SB31002 平・断面図	40	第 85 図	SK61035 平・断面図及び出土遺物実測図	77
第 38 図	SB31003 平・断面図	40	第 86 図	SK61079 平・断面図及び出土遺物実測図	78
第 39 図	SB31004 平・断面図	40	第 87 図	SK61081 平・断面図及び出土遺物実測図	78
第 40 図	SB31005 平・断面図及び出土遺物実測図	41	第 88 図	SK61085 平・断面図	79
第 41 図	SB31006 平・断面図	41	第 89 図	SK61086 平・断面図	80
第 42 図	SB31007 平・断面図	42	第 90 図	SK61094 平・断面図及び出土遺物実測図	81
第 43 図	SB31008 平・断面図	42	第 91 図	SK61122 平・断面図及び出土遺物実測図	81
第 44 図	SB31009 平・断面図	44	第 92 図	VII 区平面図	82
第 45 図	SB31010 平・断面図	44	第 93 図	SB71001 平・断面図	83
第 46 図	SB31011 平・断面図	44	第 94 図	SB71002 平・断面図	83
第 47 図	IV 区平面図及び南壁土層断面図	45	第 95 図	弥生時代前期の主要遺構	89
第 48 図	V 区平面図	46	第 96 図	弥生時代中期後半～後期初頭の主要遺構	89

第 97 図	弥生時代終末期～古墳時代初頭の主要遺構	91
第 98 図	古墳時代末～古代の主要遺構	93
第 99 図	古代末～中世初頭の主要遺構	95
第 100 図	中世末～近世初頭の主要遺構	97

第 101 図	近世の主要遺構	99
第 102 図	屋敷地復元図（地籍図と合成）	102
第 103 図	宝山城跡縄張り図	103
第 104 図	周辺城跡分布図	105

挿表目次

第 1 表	整理作業工程表	3
第 2 表	水田一覽表	12

第 3 表	古記録に見る坂田郷内城主一覽	104
-------	----------------	-----

写真図版目次

写真 1	I・Ⅱ区全景（南から）	122
写真 2	I～Ⅲ区全景（南から）	122
写真 3	Ⅳ・Ⅴ区全景（南から）	123
写真 4	Ⅵ・Ⅶ区全景（南から）	123
写真 5	作業風景（Ⅲ区東から）	124
写真 6	I区南壁上層（東から）	124
写真 7	I区南壁上層（北から）	124
写真 8	I区第 2 遺構面完掘状況（西から）	124
写真 9	I区小区面水田（南から）	124
写真 10	I区検出噴砂（西から）	124
写真 11	I区検出噴砂（北から）	124
写真 12	I区検出噴砂（西から）	124
写真 13	Ⅱ区第 1 遺構面完掘状況（東から）	125
写真 14	Ⅱ区第 2 遺構面完掘状況（南から）	125
写真 15	Ⅱ区 NR04 及び獨立柱建物群（西から）	125
写真 16	Ⅲ区 NR06 西側（北から）	125
写真 17	Ⅲ区 NR05 西側（南から）	125
写真 18	Ⅲ区 SK32004（東から）	125
写真 19	Ⅲ区 SK32002（東から）	125
写真 20	Ⅲ区検出噴砂（西から）	125
写真 21	Ⅲ区 NR06 完掘状況（南から）	126
写真 22	Ⅲ区 NR06 木器出土状況（北から）	126
写真 23	Ⅲ区 NR06 木器出土状況（北から）	126
写真 24	美瀬風景（南から）	126
写真 25	V区完掘状況（南から）	126
写真 26	V区 SE51001 上面（東から）	126
写真 27	V区 SE51001 断面（西から）	126
写真 28	V区 SE51001 完掘状況（南から）	126
写真 29	VI区完掘状況（西から）	127
写真 30	VI区 SD61020（西から）	127

写真 31	VI区 SD61020 遺物出土状況（北から）	127
写真 32	VI区 SD61020 遺物出土状況（南から）	127
写真 33	VI区 SD61020（西から）	127
写真 34	VI区 SD61023（西から）	127
写真 35	VI区 SD61023 断面（北から）	127
写真 36	VI区 SD61023 内ビット群（西から）	127
写真 37	VI区屋敷地 A・B（西から）	128
写真 38	VI区屋敷地 C（南から）	128
写真 39	VI区 SE61002 上面（南から）	128
写真 40	VI区 SE61002 完掘（西から）	128
写真 41	VI区 SE61001 断面（北から）	128
写真 42	井戸掘削状況（西から）	128
写真 43	VI区 SE61001 完掘（南から）	128
写真 44	VI区 SK61051 土器出土状況（南から）	128
写真 45	VI区 SD61012 土器出土状況（東から）	129
写真 46	VI区 SD61012 土器出土状況（東から）	129
写真 47	VI区 SK61086 土器出土状況（南から）	129
写真 48	VI区 SK61033 遺物出土状況（北から）	129
写真 49	VI区 SK61011 断面（南から）	129
写真 50	VI区 SK61011 遺物出土状況（南から）	129
写真 51	VI区 SB7101・SB71002（西から）	129
写真 52	VI区から宝山城跡を望む（南から）	129
写真 53	西八七土居遺跡出土遺物①	130
写真 54	西八七土居遺跡出土遺物②	131
写真 55	西八七土居遺跡出土遺物③	132
写真 56	西八七土居遺跡出土遺物④	133
写真 57	西八七土居遺跡出土遺物⑤	134

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

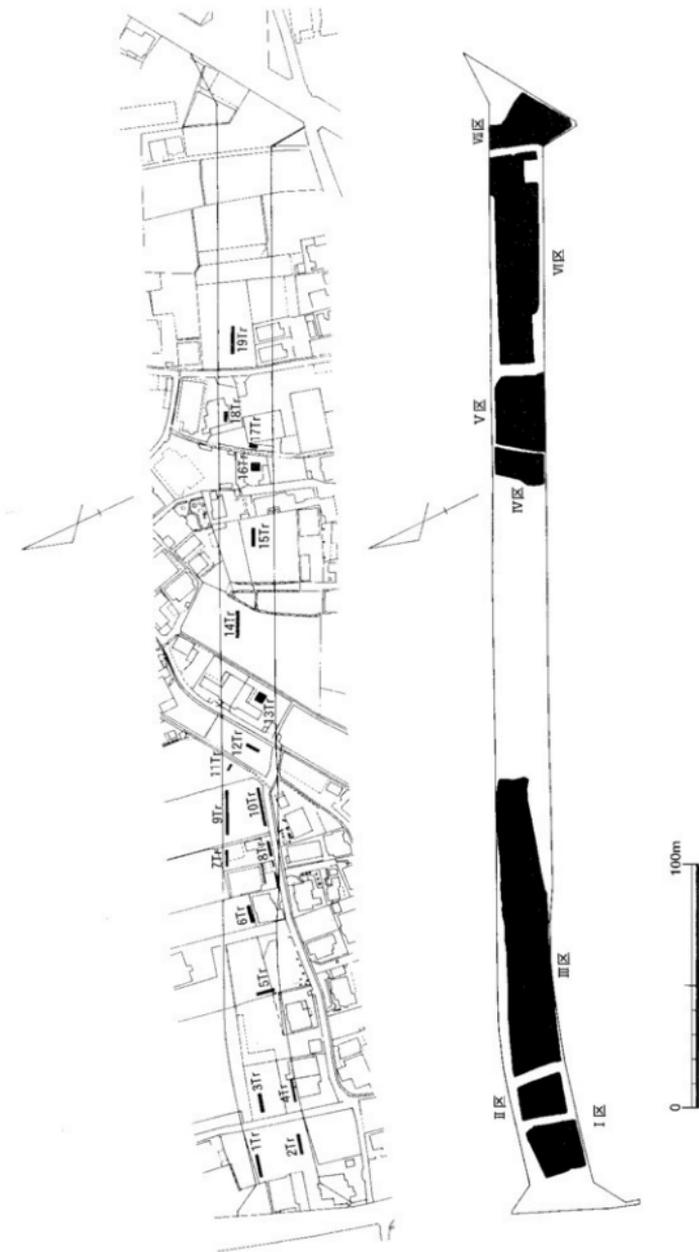
高松市では市内木太町と鬼無町を東西に結ぶ都市計画道路木太鬼無線が計画された。特に県道川東高松線～県道勸使室新線区間は、高松自動車道建設工事の際の迂回道路として使用する目的から、早期の完成が望まれていた。平成8年4月、事業者である高松市都市開発部都市計画課より高松市教育委員会に対して道路建設予定地における埋蔵文化財の有無の照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったが、周辺には国史跡である石沼尾山古墳群をはじめ多数の遺跡が存在し、建設予定面積が約10,000㎡と広大であることから、事前に道路建設予定地内について試掘調査を実施することで合意した。

これを受け、高松市教育委員会では平成8年8月5日～12日に道路建設予定地内の用地買収完了地について試掘調査を実施した。第2図に掲載したとおり、19箇所のトレンチ調査を行った。このうち調査対象地の中央部分にあたる第12～15トレンチについては遺物を含まない自然河道が見られたものの、その他のトレンチにおいては弥生時代～江戸時代にかけての遺構・遺物を確認することができた。第19トレンチ以東については未買収で調査ができなかったため、平成8年度時点では、約5,500㎡が埋蔵文化財包蔵地と考えられた。

この試掘調査結果をもとに都市計画課と協議を行った結果、第19トレンチ以東の状況が不明であるが、道路建設前に遺跡の所在する部分については発掘調査を実施し、記録保存を行うことで合意した。平成9年度下半期から工事が開始されるため、当該5,500㎡については9年度上半期で発掘調査を実施することとし、第19トレンチ以東については後日の試掘調査を待ち、改めて協議を行うこととした。その後、平成9年9月18日に約20㎡の防火水槽埋設工事に伴い立会調査を実施し、中世～江戸時代の遺構・遺物を検出したことから、第19トレンチ以東の約2,500㎡についても遺跡であることが判明した。そこで、再度都市計画課と協議を行い、第19トレンチ以東の2,500㎡については平成10年度上半期に調査を実施することで合意した。



第1図 西ハゼ土居遺跡位置図



第2図 試験トレンチ及び調査区位置図

第2節 調査の経過

前節で記した協議結果のとおり、発掘調査は、平成9・10年度の2ヵ年に分けて実施することとなった。

平成9年度調査については埋蔵文化財包蔵地約5,500㎡のうち、現有道路や水路の保全、住宅への進入路や安全確保上調査が不能な部分を除く約3,700㎡について6月6日から9月17日の間で実施した。調査地には市道、私道、水路等保全しなければならない構造物があったため、これらを境として5区分し、調査区の西端のⅠ区から東進しながら、順次Ⅴ区まで調査を進めた。

平成10年度調査地についても、前段と同様の理由から、2,500㎡の埋蔵文化財包蔵地に対し、約2,300㎡の調査を予定していたところ、調査に先立つ4月7日と5月6日の両日、下水道管理設工事（約180㎡）が実施されることが判明した。そこで、事業者の高松市土木部下水道建設課と協議をし、当該掘削地については工事立会調査対応としたため、10年度調査面積は2,100㎡となり、水路を境にⅥ・Ⅶ区に分け、5月22日から8月3日の間で発掘調査を実施した。

なお、調査成果の公開のため、調査終了直前の8月2日に、約170名の参加を得て遺跡現地説明会を開催した。

第3節 整理事業の経過

本報告書の整理事業は、整理事業員1名で行ったため、長期間に及んだ。平成11・12年度に土器洗浄、注記作業、接合等の基礎整理を行い、13・14年度において実測、15年度にトレース、16年度には報告書の執筆を行った。工程表は以下のとおりである。

第1表 整理事業工程表

	平成11年度		平成12年度		平成13年度		平成14年度		平成15年度		平成16年度	
	上半期	下半期										
土器洗浄												
注記												
接合・復元												
実測												
遺物写真撮影												
トレース												
レイアウト												
報告書執筆												

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

高松市は香川県の中央やや東寄りに位置し、市域の大部分は讃岐平野の一部を形成する高松平野が広がっている。気候が温暖なこともあって、讃岐三白（綿・塩・砂糖）の産出が有名であった。南部に讃岐山脈の北縁がかかり、東西に日笠山、上佐山、実相寺山、由良山が続く。東部に屋島、立石山塊、西部に石清尾山、浄願寺山、白峰、堂山の山系が連なる。いずれも讃岐山脈の基盤である洪積台地と同じ地層からなるメサ、あるいはピュート型の溶岩台地で、塩江町との境（標高532.9m）、白峰山塊の青峰（449.3m）以外は20～300mの低い山地である。北方はひらけ、瀬戸内海に面し、男木島、女木島、大槌島、小槌島などの島をも市域に含み、備讃瀬戸を挟んで岡山県と対峙する。

高松平野は、讃岐山脈より流れ出た諸河川が運んだ土砂によって形成された沖積平野である。高松平野には、西から本津川、香東川、御坊川、詰田川、春日川、新川といった河川が北流しているが、なかでも香東川が平野の形成に最も大きな影響を及ぼしており、現存の春日川以西が香東川による沖積平野といわれている。現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は17世紀初めの河川改修によるもので、それ以前には現在の香川町大野付近から東へ分岐した後、石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地域及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ヶ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。林から木太地区にかけての流路はしだいに機能停止し平準化し、西側へ流路が移っていったと考えられる。なお、17世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残りをとどめている。

西ハゼ土居遺跡は高松平野の中央部に位置し、ピュート地形の典型例である石清尾山塊の南麓に位置する。鶴尾神社へ伸びる尾根と室山の尾根の先端に位置し、遺跡北側にはこれら尾根を結んで貯水した奥の池が所在する。また、平野の形成に大きな役割を果たした香東川の旧流路帯の西端に位置しており、遺跡の東半は旧香東川氾濫原内に位置する。現標高は遺跡の西端で約13.7m、東端で約11.9mである。

第2節 歴史的環境

高松平野では、ここ10数年間の大規模な開発事業（高松東道路建設事業、空港跡地開発事業等）の事前調査により、遺跡数が飛躍的に増大しつつある。

旧石器時代では、高松平野及び周辺丘陵部で、表採や混入で発見された久米池南遺跡、両山南遺跡と、A7火山灰上層からナイフ型石器等を出した中間西井坪遺跡が知られている。また、石清尾山塊の南西に所在する中森遺跡において原位置をとどめた石器ブロックの存在が4箇所確認されている。

次に、縄文時代では、大池遺跡で草創期の有舌尖頭器2点の採集が報告されている。また、井手東Ⅰ遺跡では現地表下約70cmでアカホヤ火山灰の堆積層があり、縄文中期における平野の形成過程をうかがうことができる。草創期から後期にかけての遺跡は少ないが、晩期になると、近年の平野部の発掘調査により発見例が相次ぎ、林・坊城遺跡、浴・松ノ木遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡、居石遺跡、上天神遺跡、東中筋遺跡から新たな資料が提示されている。

弥生時代前期になると、天満・宮西遺跡、空港跡地遺跡、大池遺跡、松裡下所遺跡等が新たに登場してくる。このうち、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡ではこの時期から小区画の水田が営まれており、早い時期から稲作文化が受け入れられていたことがうかがえる。また、汲仏遺跡、鬼無藤井遺跡等の調査では多重環濠を持つことが分かった。なお、隣接する松並・中所遺跡においても環濠の可能性のある溝が検出されている。

これに続く弥生時代中期では、多肥松林遺跡、日暮・松林遺跡、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、井手東Ⅰ遺跡が見られる。いずれの遺跡も環濠を持たず、中期には環濠が廃絶してしまう傾向が見られる。隣接する松並・中所遺跡においても中期後半の堅穴住居が多数検出されている。なお、松並・中所遺跡の西方には、近年の試掘調査によって北山浦遺跡が確認されており、松並・中所遺跡より先行する集落の可能性が考えられる。また、中期後半になると久米池南遺跡に代表されるように丘陵上に集落を営む例が多い。

石清尾山塊においても頂部から緩斜面にかけて中期後半～末を中心とした時期の遺物が出土した摺鉢谷遺跡が知られているほか、近年の試掘調査によって御殿貯水池南遺跡の存在も確認された。

弥生時代後期になると遺跡数は増大する。平野部では、上天神遺跡、天満・宮西遺跡、凹原遺跡、空港跡地遺跡のように十数棟の住居跡と多量の廃棄土器を伴う集落の他に太田下・須川遺跡、蛙股遺跡、日暮・松林遺跡、井手東1遺跡などの集落遺跡がある。

古墳時代の集落遺跡は前期段階では確認できていない。中期以降についても少なく、中期の竪穴住居を検出し、韓式系土器が出土した六条・上所遺跡と中期～後期の竪穴住居や掘立柱建物を検出した太田下・



- | | | | | |
|------------|-------------|------------|-----------|------------|
| 1 西ハゼ土居遺跡 | 2 松並・中所遺跡 | 3 北山前遺跡 | 4 東中筋遺跡 | 5 大田下・須川遺跡 |
| 6 上天神遺跡 | 7 稲荷山北古墳群 | 8 稲荷山壙塚古墳 | 9 室山城跡 | 10 奥ノ池遺跡 |
| 11 奥ノ池古墳群 | 12 鶴尾神社4号墳 | 13 北山前古墳群 | 14 北大塚西古墳 | 15 北大塚古墳 |
| 16 北大塚東古墳 | 17 石船塚古墳 | 18 鯉塚古墳 | 19 小塚古墳 | 20 壙塚古墳 |
| 21 摺鉢谷遺跡 | 22 摺鉢谷9号墳 | 23 霧塚古墳 | 24 片山城跡 | 25 野山古墳群 |
| 26 淨願寺山古墳群 | 27 南山前古墳群 | 28 片山池1号家跡 | 29 坂田鹿寺 | 30 南山前1号家跡 |
| 31 がめ塚古墳 | 32 御殿貯水池南遺跡 | | | |

第3図 周辺の遺跡分布図（国土地理院発行S=1/25,000地形図「高松南部」を使用）

須川遺跡が知られているに過ぎない。集落遺跡の稀少性に比して古墳の築造は顕著なものがある。前方後円墳出現期の鶴尾神社4号墳をはじめ、双方中円墳の雛塚、舟形石棺をもつ石船塚等、前期の積石塚の古墳群として著名な石清尾山古墳群が遺跡の背後の石清尾山頂部尾根に見られる。中期古墳としては平野西部に今岡古墳が築かれ、その土製棺の製作地とされる中間西坪塚遺跡との関係が注目される。これに後続する中期古墳は皆無に等しい。後期になると、浄願寺山古墳群や南山浦古墳群に代表されるように、石清尾山塊に数多くの横穴式石室を持つ小円墳が築造されている。

古代では、糸里遺構と寺院関連遺跡が注目される。浴・長池遺跡、浴・松ノ木遺跡、井手東I遺跡、蛙股遺跡、上天神遺跡、凹原遺跡、松縄下所遺跡等で糸里坪界線と考えられる遺構を検出している。遺構の多くは平安時代から鎌倉時代の遺物を含み、一般に糸里の施行期とされる奈良時代とはかなりの時間の隔りがあるが、蛙股遺跡、松縄下所遺跡のように奈良時代を中心とした遺物の出土を見た遺跡もあり、糸里地割の施行時期と存続期間を解明できるデータが揃いつつある。また、石清尾山塊と御坊川に挟まれた西八ヶ町、松並町、西春日町、峰山町を含む一帯は、『和名抄』の香川郡坂田郷の郷名を継ぐ中世郷に比定されている。この坂田郷では浄願寺山の東麓において坂田廃寺が調査され、基壇や礎石とともに白鳳期に遡る瓦も出土している。その背後の片山池北岸に位置する片山池瓦窯は6基以上の瓦窯が並列しており、1号窯は平安時代中期の半地下式有床式平窯で、5条のロストルが作り付けられている。出土瓦のうち坂田廃寺出土瓦と同范のものが見られる。今回の調査でもこれと同范の瓦が出土している。なお、空海への大師号賜運動を展開した親賢は坂田郷出身の僧である。

坂田郷は平安時代末期から鎌倉前期に白河上皇の勅旨田が設けられ、その一部は立荘されて野原庄となり、次いで坂田庄が成立したが、これ以外の部分は公領として存続したと考えられる。なお、室町時代に現れる坂田郷はその後身にあたる。遺跡としては、隣接する松並・中所遺跡において12世紀後半～13世紀中葉にかけて集落が営まれており、中には屋敷地を区画する溝を有するものも見られる。今回の調査でも同時期の独立柱建物が検出されている。また、空跡跡地遺跡には溝に区画された建物跡が中世を通じて確認されており、当時の村落のあり方が判明している。なお、城館の伝承を持つ神内城跡(木太町)や佐藤城跡(キモンド一遺跡)等の調査も実施されている。調査地周辺には太田氏の坂田城跡、片山氏の片山城跡などが知られているが、その具体的な比定地は諸説があり不確定である。また、背後の室山頂部には土塁をもつ山城の室山城跡がある。今回の調査でも堀で囲まれた屋敷跡を検出しており、これらの城館との関連が注目される。

近世では、近年高松城跡の発掘調査が相次ぎ、絵図等との比較により徐々にではあるが屋敷地の変遷過程が判明しつつある。また、石清尾山塊の東側に高松藩土松平頼重によって別荘である栗林荘が整備されている。なお、同時期の町家としては紺屋町遺跡、農村としては川南・東遺跡、川南・西遺跡、東山崎・水田遺跡等が知られている。今回の調査においても、陶磁器類が多量に出土している。

《西八ヶ七土居遺跡関連既刊報告書》

- 山元敏裕 1997『西八ヶ七土居遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報 平成8年度』香川県教育委員会
大嶋和則 1999『西八ヶ七土居遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報 平成9年度』香川県教育委員会
大嶋和則 2000『西八ヶ七土居遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報 平成10年度』香川県教育委員会
堀崎誠司 1995『川東高松線(都市計画道路路町回分寺線)』『埋蔵文化財調査報告Ⅻ』香川県教育委員会
堀崎誠司 1996『松並・中所遺跡』『香川県埋蔵文化財調査年報 平成7年度』香川県教育委員会
松本和彦ほか 1995『都市計画道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成9年度 松並・中所遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
松本和彦ほか 1999『都市計画道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度 松並・中所遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
松本和彦 2000『都市計画道路路町回分寺線南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 松並・中所遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

《主要参考文献》

- 秋山忠 1982『古城跡を訪ねて』高松市歴史民俗協会ほか
梅原未治 1933『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都帝国大学
大嶋和則 2002『北山浦遺跡』『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成13年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
小川賢 2004『御城野水池溝遺跡』『高松市内遺跡発掘調査概報 一平成15年度国庫補助事業一』高松市教育委員会
川畑暲 1996『讃岐の古瓦』高松市歴史資料館
藤井雄三ほか 1983『鶴尾神社4号墳調査報告書』高松市教育委員会
香川県教育委員会 2003『香川県中世城跡詳細分布調査報告』

第3章 調査の成果

第1節 I区の調査

調査区の概要と基本層序（第4～6図）

I区は調査地の西端にあたり、(財)香川県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施した松並・中所遺跡(松本2000)に隣接する。調査区の南壁において断面図を作成し、第4図に掲載した。層序は12層に分層できた。第1層は花崗土で現代の客土層である。第2層は現代の耕作土、第3層は床土である。第4層は灰白色のシルト層である。第5層以下第11層までは全体がシルト質粘土の堆積層である。このうち遺構埋土である第6・7層以外は旧河道ないしその後背湿地状の堆積と考えられる。第12層はオリブ灰色のシルト～細砂層で、遺物を含まないことから地山とした。

各層序の出土遺物は第4図に掲載した。1～9は第4層出土遺物で古代～中世のものが混在している。1は土師器の甕で、口縁部外面にタテハケが認められる。2は白磁碗で、高台無軸となっている。3は須恵器坏である。4は須恵器坏蓋で、内面にヘラ記号が認められる。5は須恵器坏である。6は須恵器壺の底部である。7は須恵器高杯脚柱部である。8は須恵器坏蓋である。9は須恵器坏である。10・11は第5層出土遺物である。10は須恵質の平瓦で、布目が認められ、中世のものと考えられる。11は弥生後期の器台の口縁部である。口縁部を上下に拡張し、外面には凹線3条を巡らし、棒状浮文を施し、内面には波状文を施している。12は第6層出土遺物で、弥生後期の甕で、外面タテハケ、内面指頭圧である。13及びS1・S2は第8層出土遺物である。13は弥生中期末～後期初頭の高杯脚部である。脚柱部に沈線3条、脚唇部に沈線4条を巡らし、脚唇部には鋸齒文も施している。S1・S2は挟りを持つ石庖丁である。14～16は第10層出土遺物である。14は弥生前期末～中期前半の甕口縁部で、体部外面に柳指直線文、口縁部に刻目を施している。15は弥生土器の底部で、外面ナデ、内面指頭圧である。16は弥生土器の底部で、底部外面指頭圧である。

遺構面は4面検出した。第4層上面において、淡黄色シルト層の溝1条と土坑1基が掘り込まれており、第1遺構面とした。第4層は中世の遺物までを含み、土坑埋土中から陶磁器片が出土したことから、概ね近世の遺構面と考えられる。

第4面以下の層序は旧河道または後背湿地状の堆積層であるが、第8層上面において掘立柱建物独立柱建物跡1棟と旧河道1条、土坑、柱穴を多数検出し、第2遺構面とした。弥生終末期～古代の遺物が出土したNR02以外の遺構については、遺物が出土していないため、同時期の遺構面と考えた。しかしながら、第2遺構面の下層では13の弥生中期末～後期初頭の高杯が出土し、上層では中世の遺物を含んでいることから、もう少し長期にわたる弥生後期～中世の遺構面とも考えられる。いずれにせよ、後背湿地状の地形ながらも比較的地盤が安定した時期であったことがうかがえる。

また、第9層上面では畦畔を検出し、第3遺構面とした。出土遺物は無いが、第3遺構面直上から13の高杯が出土しており、概ね弥生中期中後半～末の遺構面と考えられる。

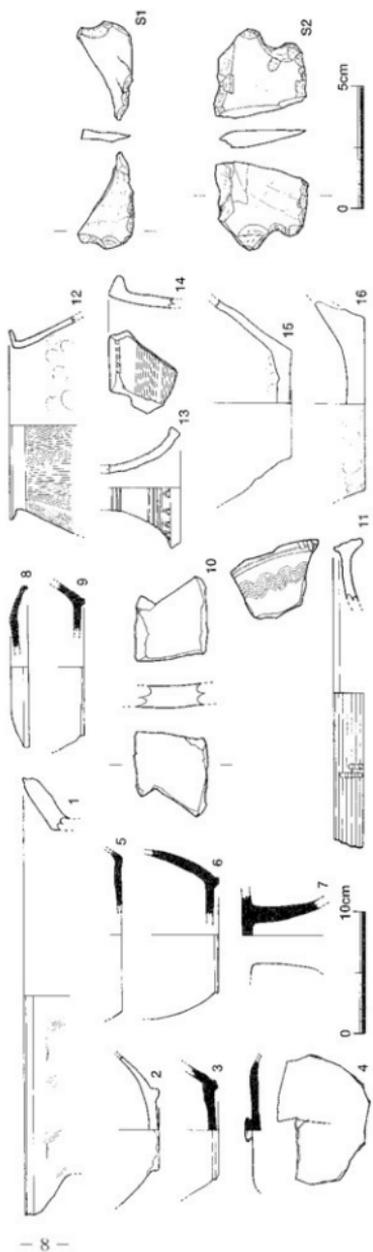
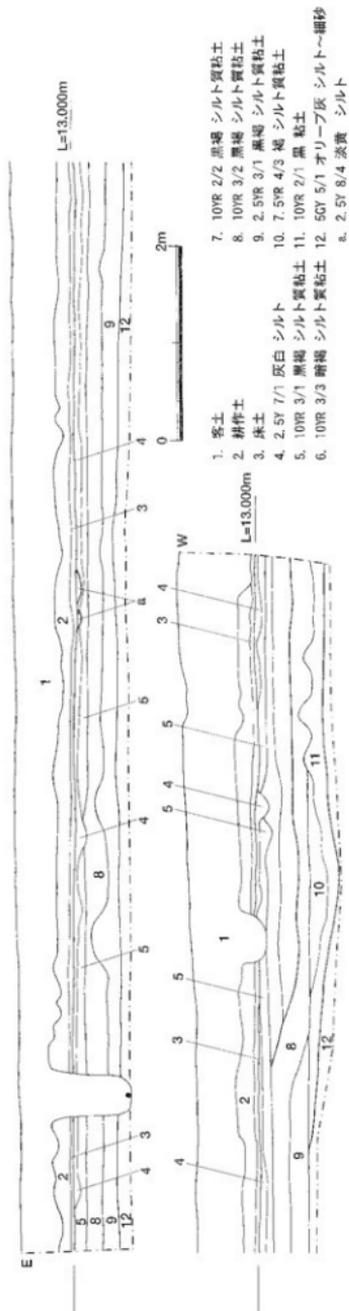
遺物を含まない第12層の上面においても、旧河道を検出しており、第4遺構面とした。旧河道埋土から14の弥生前期末～中期初頭の甕口縁部が出土しており、同時期の遺構面と考えられる。

第4遺構面の遺構

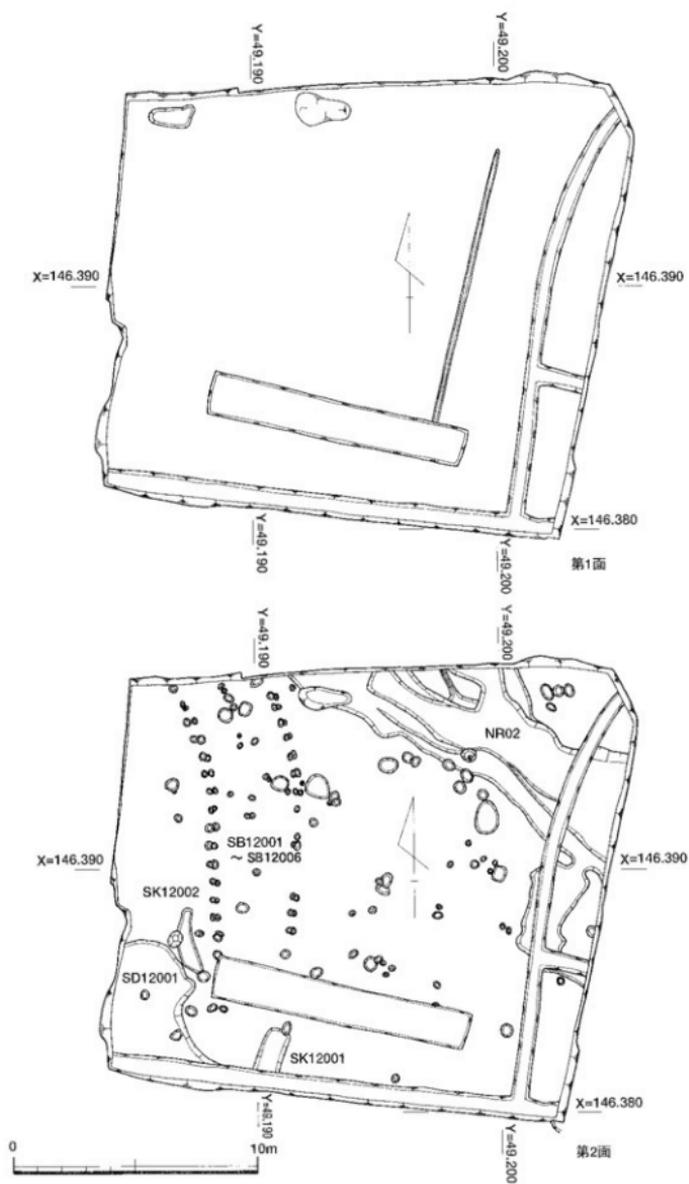
NR01（第6図）

第4遺構面で検出した南北方向の旧河道である。明瞭な落ち込みが無く、西に向かって緩やかに落ち込んでいる。幅は不明であるが、検出できた部分での最深部は約40cmを測る。隣接する松並・中所遺跡VII区ASR01につながると考えられる。検出した部分の埋土は2層に分層でき、基本層序の10・11層にあたる。基本層序で示した第4図14～16が出土遺物で、弥生時代前期～中期初頭の埋没時期が考えられる。

なお、松並・中所遺跡VII区ASR01は弥生時代前期前半と中期後葉の2時期の河川としてとらえられている(松本2000)。I区の基本層序は、第5層以下が旧河道埋土または後背湿地状の堆積層であり、このうち第8層において弥生前期末～後期初頭の遺物を含んでおり、第10・11層の間にある第9層が概ね弥生中期に堆積していることがうかがえる。松並・中所遺跡の調査成果と合わせて考えると、第10・11層が弥生前期前半～中期初頭、第9層が弥生中期後葉の旧河道埋土になる可能性が考えられる。中期後葉の



第4図 I区南壁土層断面図及び包含層出土遺物実測図 (1～9=第4層 10,11=第5層 12=第6層 13=第8層 14～16=第10層 S1,S2=第8層)



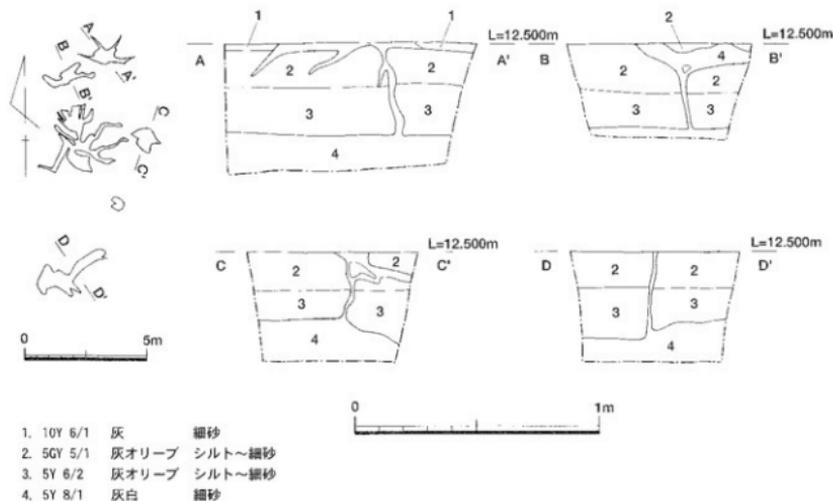


第6图 I区平面图②

旧河道である第9層はI区全域に見られる層序で、旧河道幅が広がっていることがうかがえる。

噴砂（第7図）

第4遺構面を確認した地震痕跡である。調査区の中央部から南西部にかけて9箇所で見出された。平面形態は線状になるものは少なく、点的に認められるものや、放射状に伸びるものが多い。砂脈は地山のシルト～細砂層より2層下の灰白色細砂層から噴き上がっている。砂脈は幅2～5cm、高さ25～40cmを測る。弥生前期前半末～中期初頭に埋没したNR01に切られていることから、埋没以前の地震痕跡であり、弥生時代前期以前の地震によって形成されたものと考えられる。



第7図 I区検出噴砂平・断面図

第3遺構面の遺構

小区画水田（第6図）

NR01の最終埋没層である第9層上面で見出された小区画水田である。断面観察で9層上面において多数の畦畔が観察できたが、平面的には調査区の中央付近のみで21筆の水田を検出したに過ぎない。NR01の流路とほぼ同じカーブに沿って水田を検出しており、旧河道の流路を利用して水田が形成されたことがうかがえる。畦畔は、南北方向については連続しているが、東西方向は2～3筆ごとに食い違っている。水田の平面形態は南北に長い長方形のものが基本であるが、一部方形のものも見られる。一筆の面積は大きいもので4.44㎡、小さいものでは1.35㎡を測る。規模については、第2表に一覧表として掲載した。

出土遺物は無く、時期は不明であるが、水田面上層の第8層で第4図13の高杯が出土していることから、弥生中期末～後期初頭までには埋没した水田と考えられる。

なお、先述のとおり、第9層は松並・中所遺跡のSR01の弥生中期後葉の流路と同じと考えられる。松並・中所遺跡IV区CSR01最上層において稲作跡を推定する際の基準値である5,000個/gを上回る5,800個/gのプラントオパールが検出されており（松本2000）、湿地状を呈した旧河道上面全域において稲作を行っていたことが考えられる。

第2表 水田一覧表

	南北(m)	東西(m)	面積(m ²)		南北(m)	東西(m)	面積(m ²)		南北(m)	東西(m)	面積(m ²)
1	0.40	1.30	0.52~	8	0.80	2.00	1.48	15	2.40	1.44	3.46~
2	0.60	1.80	1.08~	9	2.30	1.20	2.76~	16	2.10	1.50	2.42
3	1.40	0.80	1.12~	10	2.50	1.76	3.70	17	1.08	1.40	1.35
4	1.10	1.30	1.45~	11	3.06	2.00	4.44	18	1.20	1.30	1.56
5	1.30	1.30	1.69~	12	2.06	1.70	3.50	19	0.80	1.60	1.28~
6	1.30	2.00	2.60	13	2.66	1.40	3.72	20	0.80	0.90	0.72~
7	1.78	1.10	1.96	14	1.60	1.20	1.92~	21	0.80	1.16	0.93~
								合計			43.66~

第2遺構面の遺構

NR02 (第8図)

調査区北東隅で検出した自然河道で、北東から南西方向にむけて流れており、最大幅約5mを測る。川の兩岸とも2段落ちになっており、最深部では約30cmを測る。隣接する松並・中所遺跡VII区BSR03から続くものと考えられ、埋土の観察からII区のNR04につながるものと考えられる。埋土は5層に分層できる。第1層は黒褐色粘土層、第2層は黒色粘土層、第3層は拳大の礫が混じる褐色粘土層、第4層は黒褐色粘土層、第5層は灰褐色砂混粘土層である。遺物は第3層が最も多く、第5層からも多く出土したが、その他の層ではほとんど出土しなかった。

出土遺物は第8図に掲載した。17~19は第1・2層出土遺物で、17は土師器甕の口縁部である。古代の遺物と考えられる。18は弥生土器の底部で、底部外面に指頭圧が見られる。19は弥生土器の底部で、外面タテハラミガキ、内面指頭圧である。20~37は第3層出土遺物である。20は弥生中期の広口壺で、頸部に押圧突起が施されている。21は弥生土器の甕で、球形の体部に短い口縁部がつく。内面はケズリ後指頭圧である。22・23は弥生土器の甕である。24・25は土師器の甕で、外方に直線的に開く口縁部を持つ。26~32は弥生土器の底部である。33~40は下層出土遺物である。33は弥生終末期の大型鉢である。34は弥生中期後半の高杯で、口縁部外面に凹線2条をめぐらせている。36~37は弥生終末期の高杯で、35の外面にはヨコハラケズリが認められる。38~42は5層出土遺物である。38は弥生土器の甕で、口縁部を上部に拡張し、凹線2条が施されている。39は弥生中期の高杯で、口縁部上面に2条、外面に3条の凹線が施されている。40は弥生終末期の高杯である。41は弥生土器の細頸壺の口縁部で、外面に凹線2条が施されている。42は弥生土器の広口壺である。

松並・中所遺跡VII区BSR03は弥生中期末の遺物が中心であるが、各層出土の最も新しい遺物から、第5層が弥生終末期、第3層が古墳時代前期、上層が古代に埋没したことがうかがえる。

SK12001 (第9図)

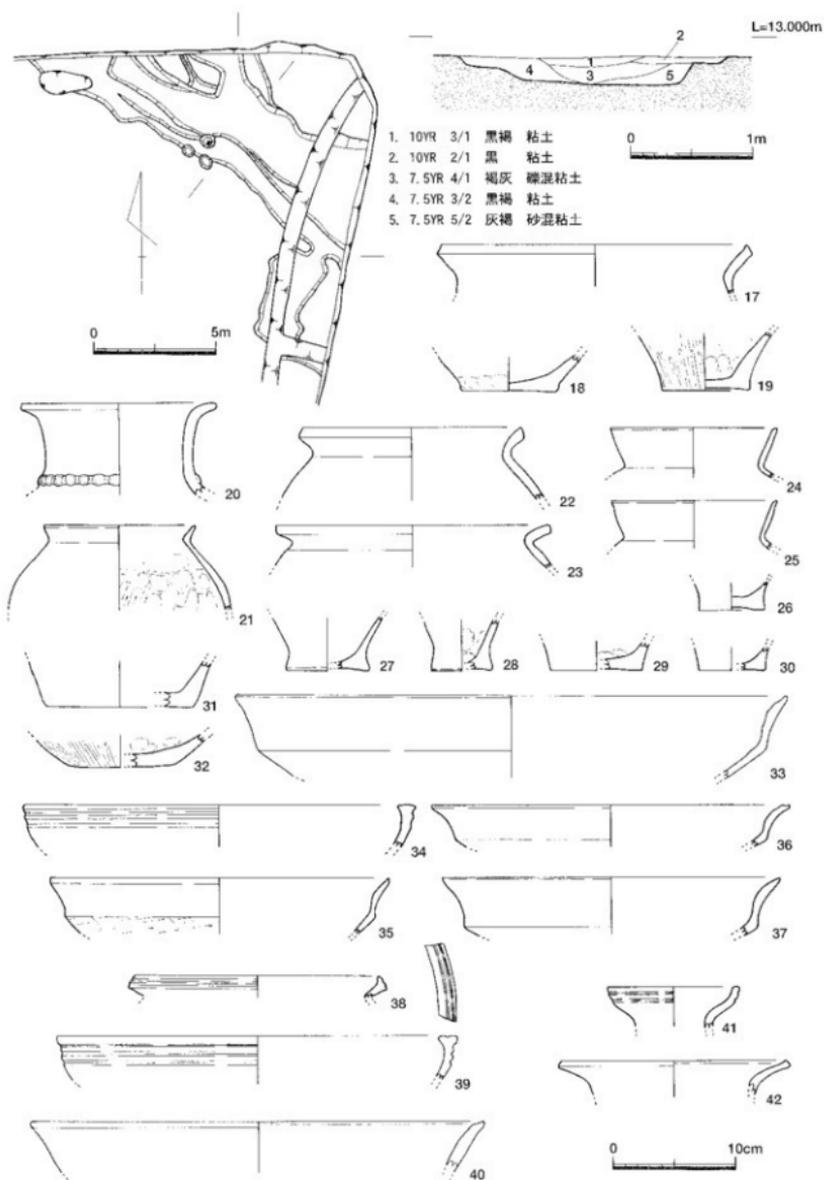
調査区南部で検出した土坑である。南側はサブトレランチ掘削のため、検出できなかったが、長辺1.9m以上、短辺1.05m、深さ15cmを測り、平面形態は長方形と考えられる。埋土は黒褐色のシルト質極細砂層の単層で、断面形態は浅いレンズ状の堆積である。遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

SK12002 (第10図)

調査区南西部で検出した土坑である。長辺2.7m以上、短辺0.7m、深さ7cmを測り、平面形態は溝状を呈する。埋土は黒褐色のシルト質極細砂層の単層で、断面形態は浅い逆台形である。遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。

S012001 (第11図)

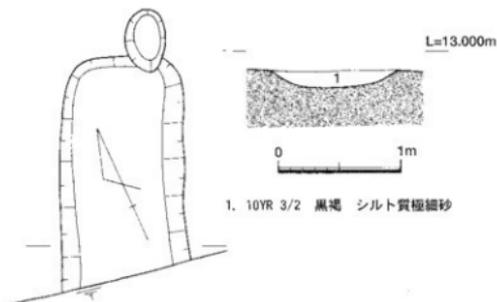
調査区南西端で検出した落ち込みである。遺構は調査区外に伸びるが、検出部分の規模は東西5.6m以上、南北5.6m以上、深さ30cmを測る。断面形態は浅い逆台形で、埋土は4層に分層できる。第1・2層は黒褐色の粘質シルト層、第3層は褐色の粘質シルト層、第4層は黒褐色の粘質シルト層である。遺物は出土しておらず、遺構の時期は不明である。



第8図 NR02平・断面図及び遺物実測図 (17~19=1・2層 20~37=3層 38~42=5層)

SB12001 (第12・13図)

調査区の西部で検出した掘立柱建物である。第12図に掲載したように柱穴が切り合いを持ちながら南北方向に2列に並んでいる状態で検出した。全体がややカーブした2列の欄列とも考えられたが、柱穴の切り合いから考えると、柱芯が通らず全体が1つの構築物とは考えがたいことから、SB12001～SB12006の6棟の掘立柱建物に復元した。このうちSB12001は柱穴列の北部にあたる。建物の主軸方位はN-17°-Wで、東西1間(3.5m)×南北2間(1.7m)以上を測り、床面積は5.95㎡以上である。建物の西辺は2間で柱間は85cm、東辺は3間で柱間は50～65cmである。なお、西辺の北側延長部分には等間隔で柱穴が続き、建物が北に伸びる可能性が考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

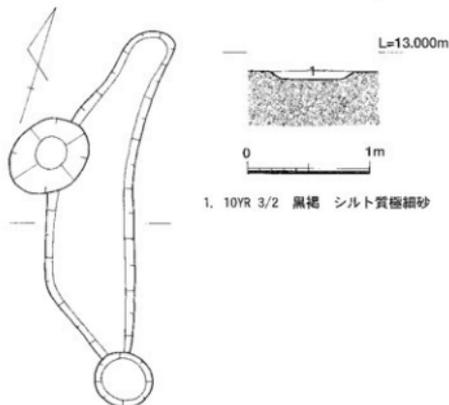


第9図 SK12001 平・断面図

1. 10YR 3/2 黒褐 シルト質極細砂

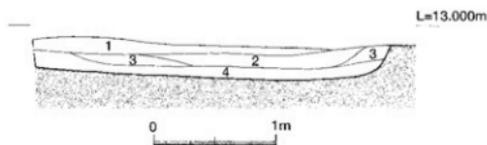
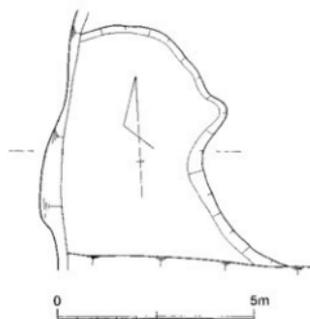
SB12002 (第12・13図)

SB12002は検出した柱穴列の北部あたり、SB12001を切り、ほぼ同じ位置で検出していることから、SB12001の建て直しと考えられる。建物の主軸方位はN-15°-Wで、東西1間(3.4m)×南北2間(1.85m)を測り、床面積は6.29㎡である。SB12001同様、建物の西辺は2間で柱間は80cm、東辺は3間で柱間は50～65cmである。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



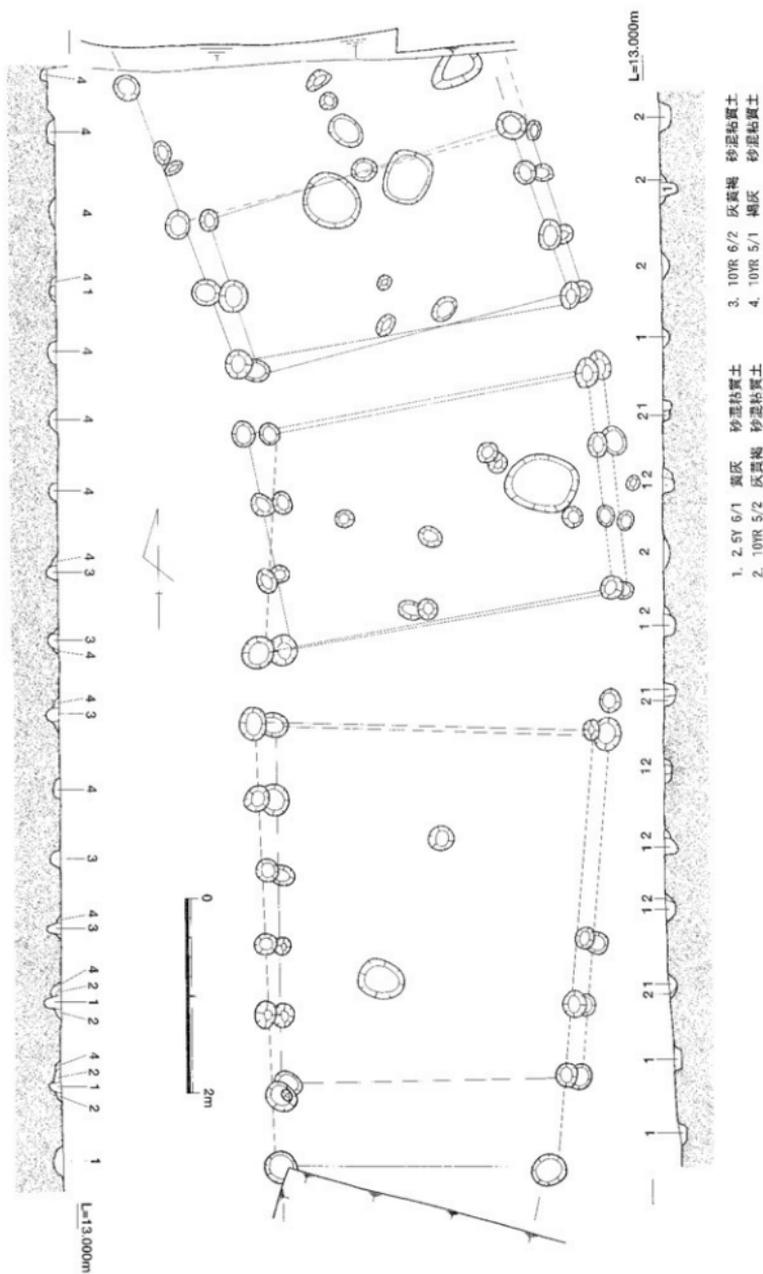
1. 10YR 3/2 黒褐 シルト質極細砂

第10図 SK12002 平・断面図

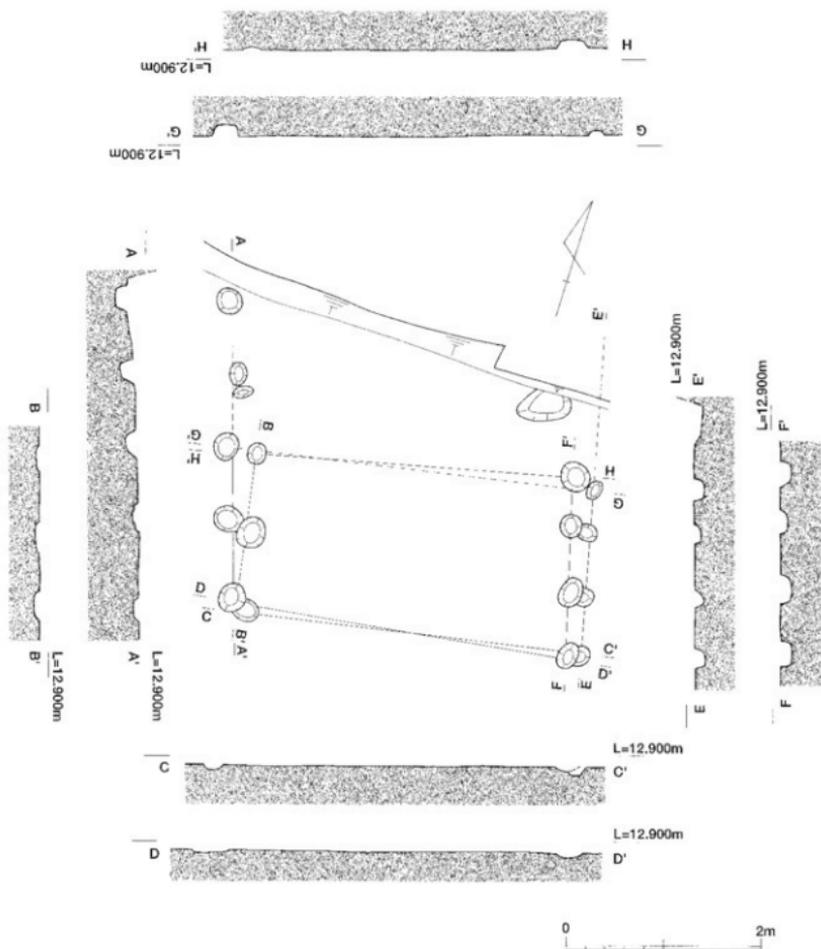


1. 10YR 3/1 黒褐 粘質シルト
2. 7.5YR 3/2 黒褐 粘質シルト
3. 10YR 4/4 褐 粘質シルト
4. 10YR 3/2 黒褐 粘質シルト

第11図 S012001 平・断面図



第12圖 SB12001 ~ SB12006 平・断面図



第13図 SB12001・SB12002 平・断面図

SB12003 (第12・14図)

SB12003は柱穴列の中央部にあたる。主軸方位は $N-9^{\circ}-W$ で、東西1間(3.65m)×南北2間(2.1m)を測り、床面積は8.76 m^2 である。南北の柱間はほぼ均一で、75～80cmである。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SB12004 (第12・14図)

SB12004は柱穴列の中央部にあたり、SB12003を切り、ほぼ同じ位置で検出していることから、SB12003の建て直しと考えられる。建物の主軸方位は $N-3^{\circ}-W$ で、東西1間(3.6m)×南北2間(2.2m)を測り、

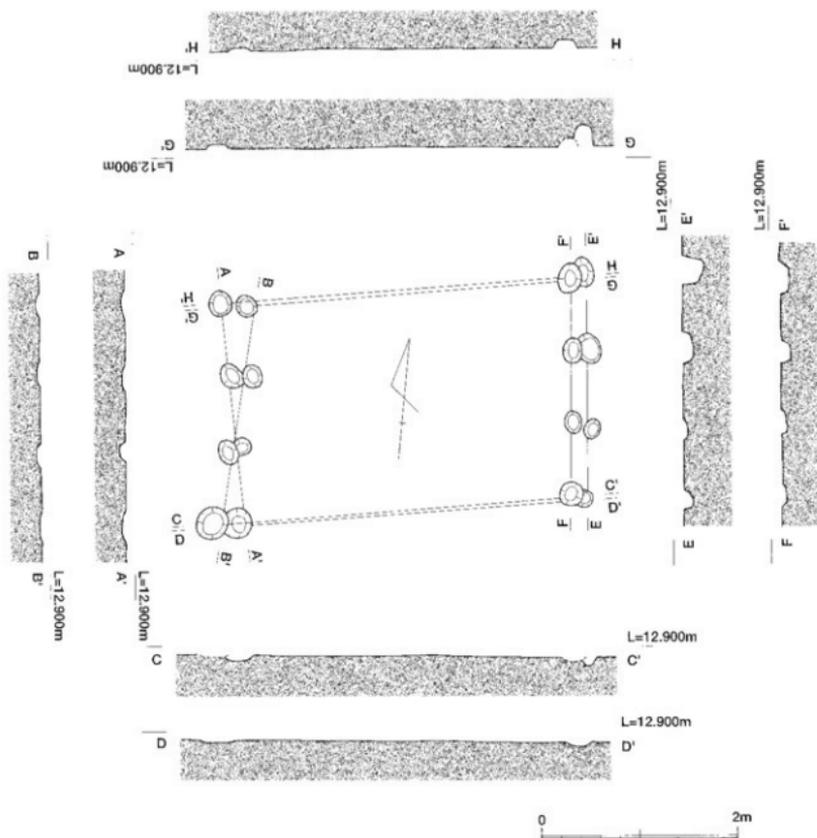
床面積は 7.92 m²である。南北の柱間はほぼ均一で、70～75cmである。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SB12005 (第12・15図)

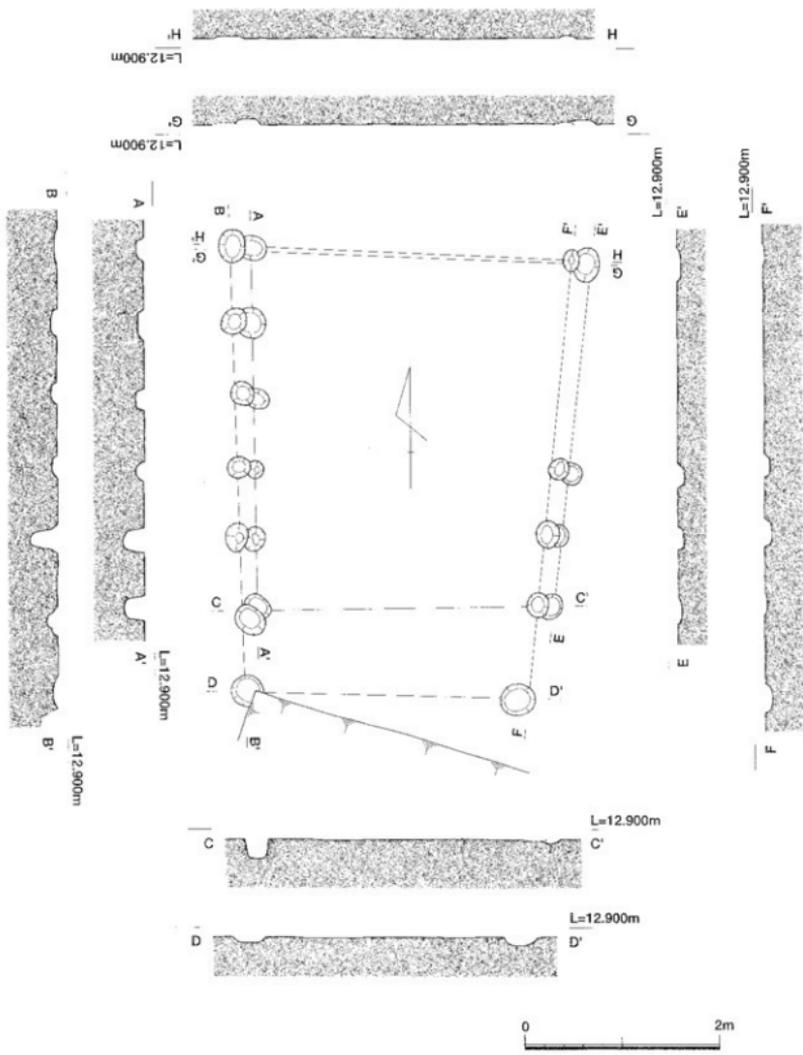
SB12005は柱穴列の中央部にあたり。主軸方位はほぼ北で、東西1間(3.4m)×南北5間(3.7m)を測り、床面積は12.03 m²である。西辺の柱穴2基が検出されなかったが、南北の柱間はほぼ均一で、70～75cmである。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SB12006 (第12・15図)

SB12006は柱穴列の中央部にあたり、SB12005を切り、ほぼ同じ位置で検出していることから、SB12005の建て直しと考えられる。建物の主軸方位はほぼ北で、東西1間(3.6m)×南北6間(4.65m)以上を測り、床面積は14.88 m²である。SB12005同様、西辺の柱穴2基が検出されなかったが、南北の柱間はほぼ均一で、75～80cmである。遺物は出土しておらず、時期は不明である。



第14図 SB12003・SB12004平・断面図



第 15 图 SB12005 · SB12006 平 · 断面图

第2節 II区の調査

調査区の概要と基本層序 (第16・17図)

II区は調査地の西部にあたる。調査区の南端において断面図を作成し、第16図に掲載した。層序は11層に分層できた。第1層は花崗土で現代の客土層である。第2層は現代の耕作土、第3層は床土である。第4層は黒褐色のシルト質粘土層である。第5層以下第8層までは全体が粘質シルト～シルト質粘土の堆積層で、旧河道ないしその後背湿地状の堆積と考えられる。第9層の暗灰色シルト層、第10層の褐灰色シルト～細砂層、第11層の黄灰色シルト～細砂層は遺物を含まないことから地山とした。

各層序の出土遺物は第16図に掲載した。43の龍泉窯系青磁碗は第4層出土遺物で、中世頃の堆積と考えられる。44・45は第5層出土遺物である。44は弥生終末期の広口壺で、内面指頭圧である。45は弥生土器の底部で、内外面に指頭圧が見られる。第5層は弥生終末期の遺物しか含まないが、後述する遺構出土遺物との比較から、第5層は古代以降の堆積と考えられる。

遺構面は第7層上面と第9層上面の2面で検出した。第7層上面では、旧河道1条、土坑4基を検出し、第1遺構面とした。旧河道の最終埋没は古代で、土坑出土遺物は近世のものであり、古代～近世の遺構面と考えられる。

また、第9層上面では旧河道1条と溝1条を検出し、第2遺構面とした。旧河道出土遺物から概ね弥生終末期の遺構面と考えられる。

第2遺構面の遺構

NR03 (第17図)

調査区の西半を南から北へ向かって流れる旧河道である。南半は削平が著しいことから、検出した川幅は北側ほど広く、最大幅12mを測り、深さは40cmを測る。川の肩は全体になだらかに落ち込んでいる。埋土は基本層序の第8層が該当し、黒褐色シルト質粘土層である。

出土遺物は第17図に掲載した。S3は刃部の端部に挟りをもつサヌカイト製の石匙である。52・53は弥生土器の高杯の杯部である。52の外面にはヨコヘラケズリが見られる。54～58は弥生土器の底部である。54・55・57には内面指頭圧、55は外面指頭圧が見られる。59は弥生土器の長頸壺で、外面タテハケ、内面指頭圧である。60は弥生土器の甕の口縁部である。出土遺物から概ね弥生終末期の埋没と考えられる。

流路の北西部分を上層の旧河道NR04によって切られており不明であるが、I区NR02は弥生終末期から古代の流路であり、II区に向かって流れていることから、合流する可能性が考えられる。

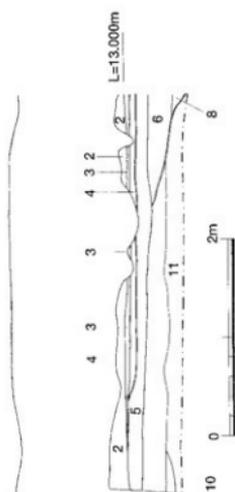
第1遺構面の遺構

NR04 (第17図)

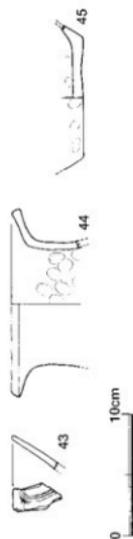
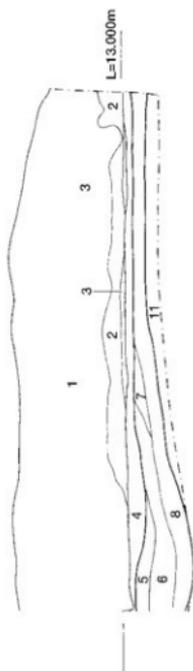
調査区の北半を東西方向に流れる旧河道である。北岸は調査区外であるため、川幅は不明である。埋土は基本層序の第6層が該当し、灰褐色粘質シルト層で、深さは40cmを測る。川の肩は全体になだらかに落ち込んでいる。下層においてはほぼ同位置でNR03を検出しており、NR03が南から北へ流れるのに対し、NR04はI区NR02から続く旧河道と考えられ、II区において南からの流路が合流し、さらに東へ流れ、III区NR04につながっていくものと考えられる。

出土遺物は第17図に掲載した。46は須恵器杯蓋で、ツマミがつく。47は須恵器壺底部である。48～50は須恵器杯蓋である。51は土師器杯である。出土遺物から概ね8世紀の埋没と考えられる。

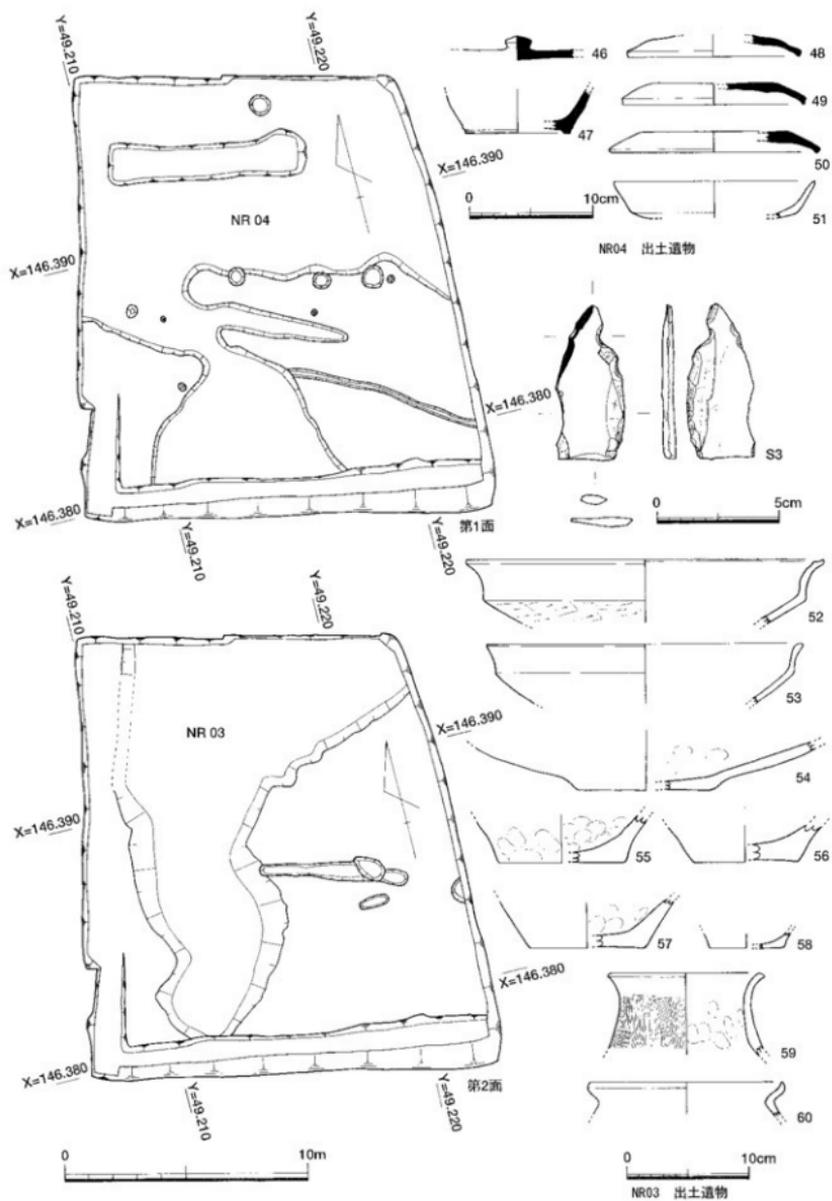
I区NR02においては、層位によって弥生時代終末期、古墳時代前期、古代の3時期に分かれるが、NR04は単層であり、須恵器しか出土しておらず、NR02の最終埋没期のみ機能していたと考えられる。このため、NR02の弥生終末期から古墳時代前期の流路についてはNR03につながり、古代の流路はNR04につながるものと考えられる。



- | | |
|-----------------|--------|
| 1. 客土 | シルト質粘土 |
| 2. 耕作土 | 粘質シルト |
| 3. 床土 | 粘質シルト |
| 4. 10R 3/1 黒褐色 | 粘質シルト |
| 5. 7.5R 3/2 赤褐色 | 粘質シルト |
| 6. 7.5R 4/2 灰褐色 | 粘質シルト |
| 7. 10R 4/1 細灰 | シルト質粘土 |
| 8. 10R 3/1 赤褐色 | シルト |
| 9. 2.5Y 4/2 暗灰黄 | シルト~礫 |
| 10. 10R 4/1 細灰 | シルト~細砂 |
| 11. 2.5Y 5/1 黄灰 | |



第16図 II区南壁土層断面図及び包含層出土遺物実測図 (43=第4層 44・45=第5層)



第17図 II区平面図及びNR03・NR04出土遺物実測図

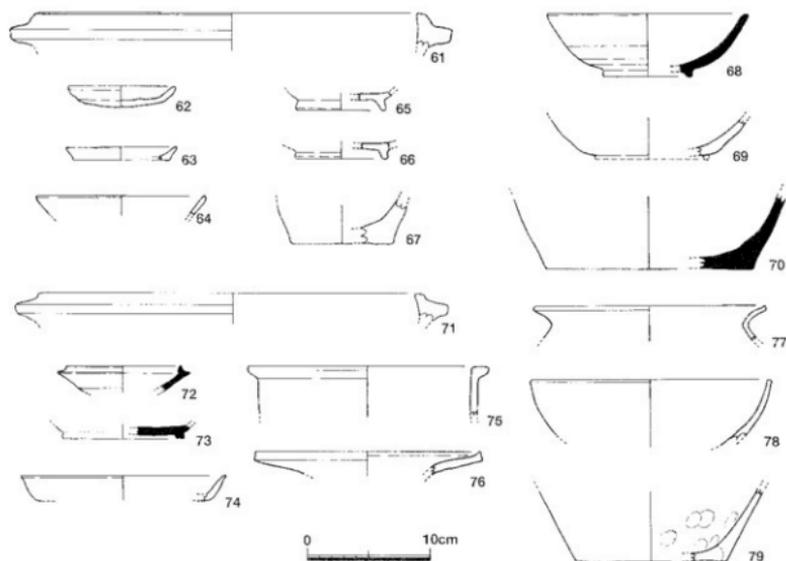
第3節 Ⅲ区の調査

調査区の概要と基本層序 (第18～25図)

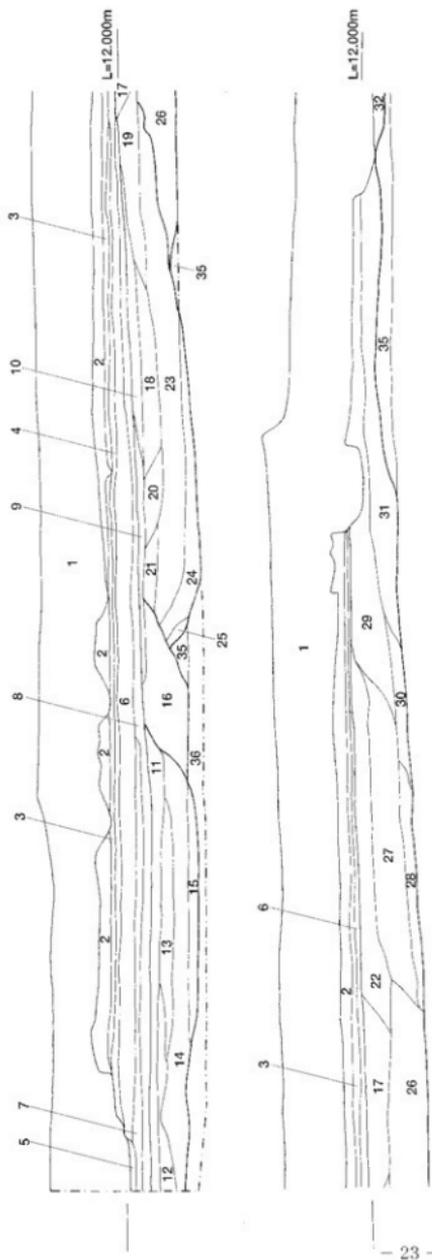
Ⅲ区は調査地西半の東部にあたる。調査区の南壁西半において断面図を作成し、第19図に掲載した。層序は36層に分層できた。第1層は花崗土で現代の客土層である。第2層は現代の耕作土、第3・4層は床上である。第5層は褐灰色の砂混粘土層で近世以降の遺構埋土と考えられる。第6層は灰白色シルト質極細砂層で、中世の遺物を多く含む。第7層は浅黄色シルト質極細砂層である。第8層以下第34層までは一部細砂～礫層も含まれるものの、概ね粘土質の土層となっており、全体が旧河道あるいは低湿地状の様相を示している。遺物はそれほど無く、第8層の黒褐色粘土層及び第9層の赤褐色粘土層にわずかに含まれる程度であった。第35層の灰黄褐色粘土層は遺物を含んでおらず、地山と考えられる。第35層は、Ⅲ区の西半しか認められず、中央部より東においては第36層の黄灰色細砂層を地山とした。

各層出土遺物は第18図に掲載した。61～70は機械掘削時に出土したもので、第6層上面のものがほとんどを占める。61は土師質土器釜である。62・63は土師器の皿である。64は瓦器碗である。65・66は黒色土器の碗である。67は弥生土器の底部である。68は須恵器の碗である。69は土師器の碗である。70は須恵器の壺である。71～77は第6層出土遺物である。71は土師質土器鉢である。72・73は須恵器の碗である。74は土師器の杯である。75は弥生土器の甕である。76は弥生土器の広口壺である。77は弥生土器の甕である。第6層出土遺物には弥生土器や須恵器も多く含まれているが、概ね中世の堆積層と考えられる。78・79は第8・9層出土遺物である。78は弥生土器の鉢である。79は弥生土器の底部である。第8・9層及び34層までの粘土層については遺物量が少なく詳細は不明であるが、弥生終末期以降の堆積層と考えられる。

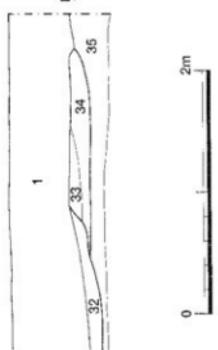
遺構面は包含層直下の第8層上面と第35層上面の2面で検出した。第8層上面では、旧河道2条、土坑4基、竪立柱建物11棟等を検出し、第1遺構面とした。旧河道の埋没は古代と考えられ、その上面で中世前半の



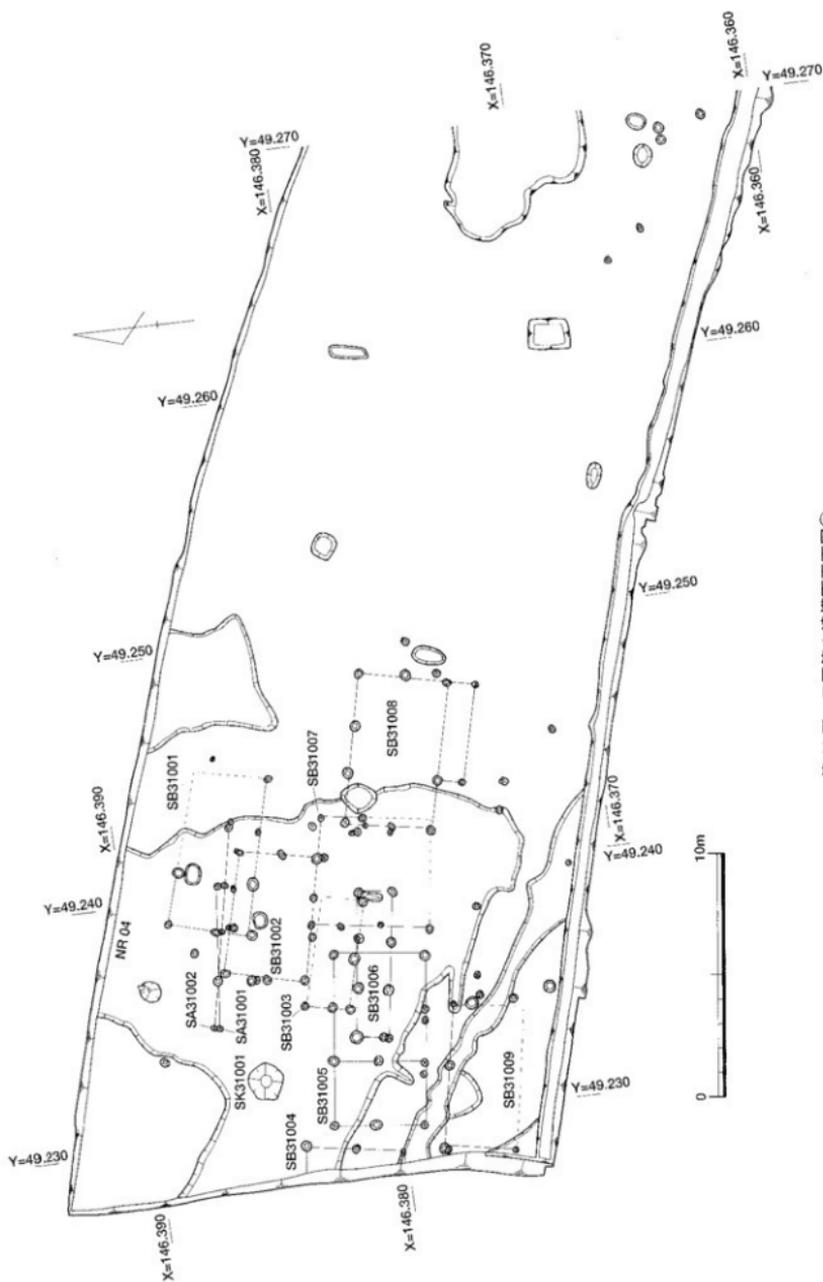
第18図 Ⅲ区包含層出土遺物実測図



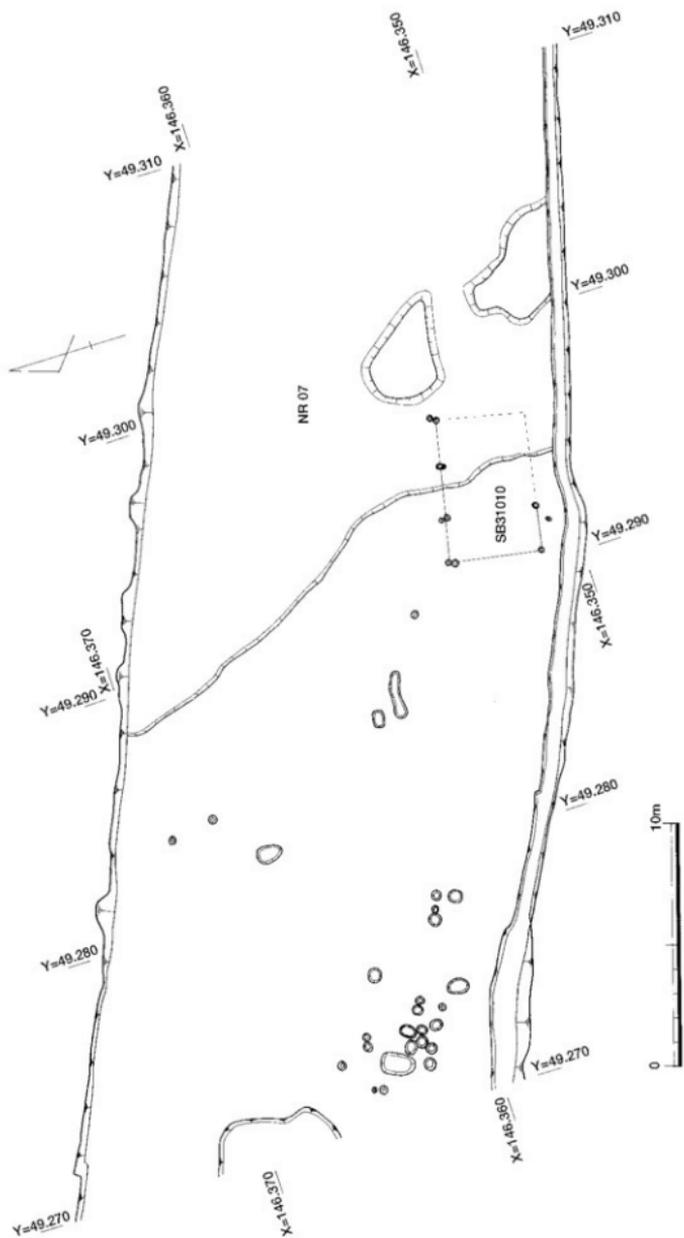
- | | | | |
|-------------------|-------------------|-------------------|--------|
| 1. 花崗土 | 13. 7.5R 3/2 黒褐 | 25. 10R 5/4 にふい青褐 | 粘土 |
| 2. 耕作土 | 14. 7.5Y 3/1 黒褐 | 26. 5R 2/4 徳福赤褐 | 砂土 |
| 3. 7.5R 8/6 浅黄褐 | 15. 10R 2/1 黒 | 27. 10R 5/1 褐灰 | シルト質粘土 |
| 4. 7.5R 6/8 橙 | 16. 5R 3/2 暗赤褐 | 28. 10R 3/3 暗黄 | 粘土 |
| 5. 10R 5/1 褐灰 | 17. 2.5Y 4/1 黄灰 | 29. 7.5R 4/1 褐灰 | 砂混粘土 |
| 6. 2.5Y 1/1 灰白 | 18. 10R 5/6 にふい青褐 | 30. 10R 4/3 にふい青褐 | 細砂~礫 |
| 7. 2.5Y 7/3 浅黄 | 19. 10R 2/3 黒褐 | 31. 10R 5/2 灰青褐 | 細砂~礫 |
| 8. 2.5Y 3/1 黒褐 | 20. 10R 3/3 暗褐 | 32. 10R 4/1 褐灰 | 細砂 |
| 9. 5Y 4/6 赤褐 | 21. 10R 4/2 灰黄褐 | 33. 10R 6/1 褐灰 | 砂混粘土 |
| 10. 7.5R 5/4 にふい褐 | 22. 10R 6/1 褐灰 | 34. 10R 5/2 灰黄褐 | 砂混粘土 |
| 11. 10R 4/1 褐灰 | 23. 7.5R 2/3 暗暗褐 | 35. 10R 4/2 灰黄褐 | 粘土 |
| 12. 7.5R 4/3 褐 | 24. 10R 5/1 褐灰 | 36. 2.5R 6/1 黄灰 | 粘質シルト |



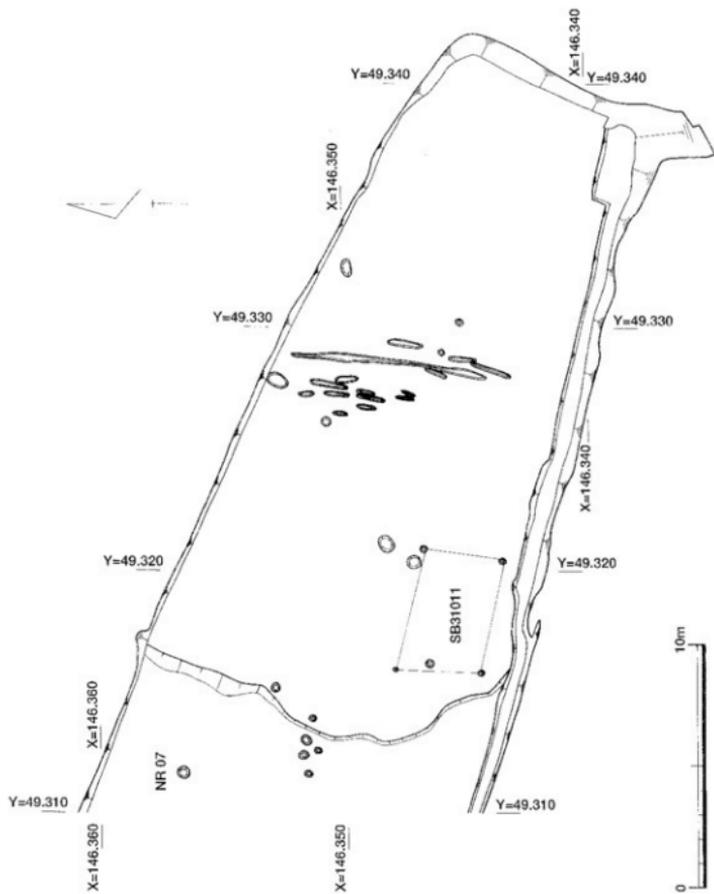
第19図 Ⅱ区南壁土層断面図



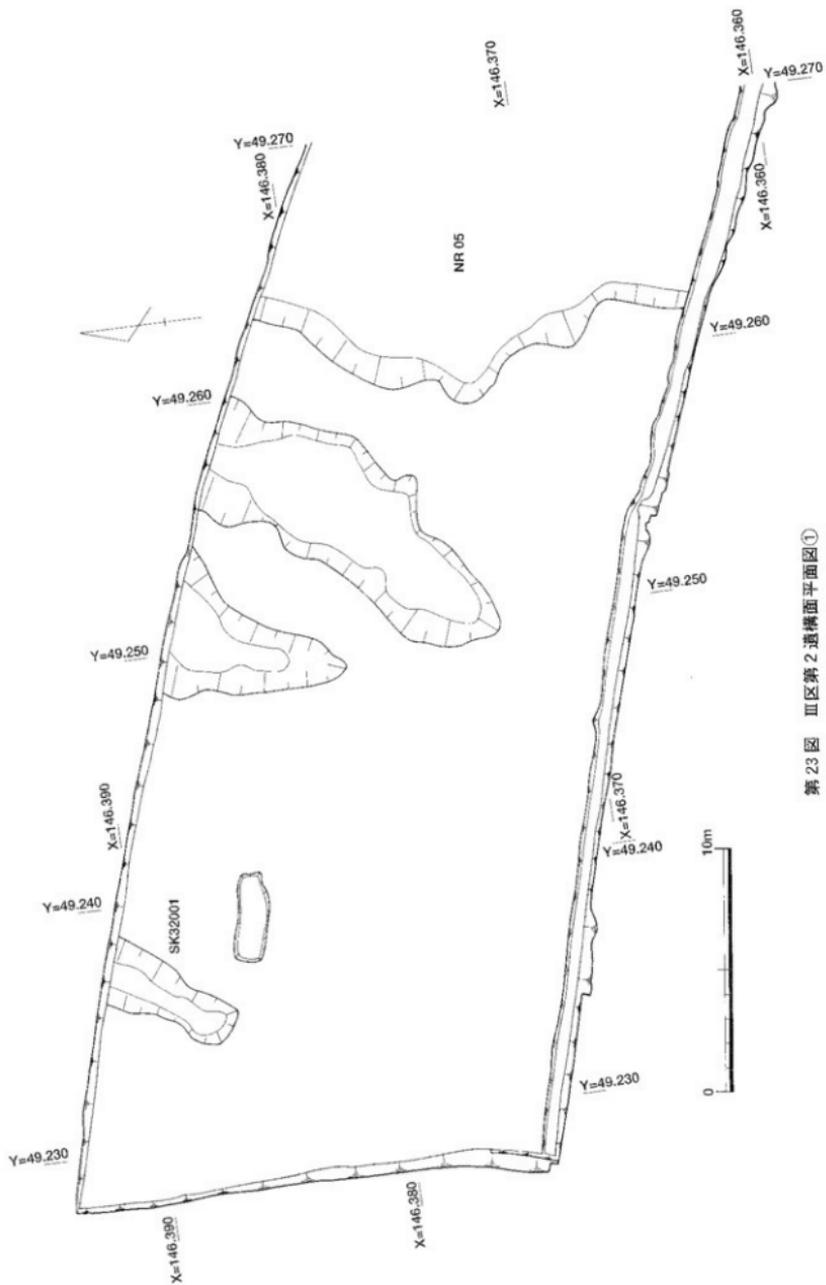
第20图 Ⅱ区第1遺構面平面図①



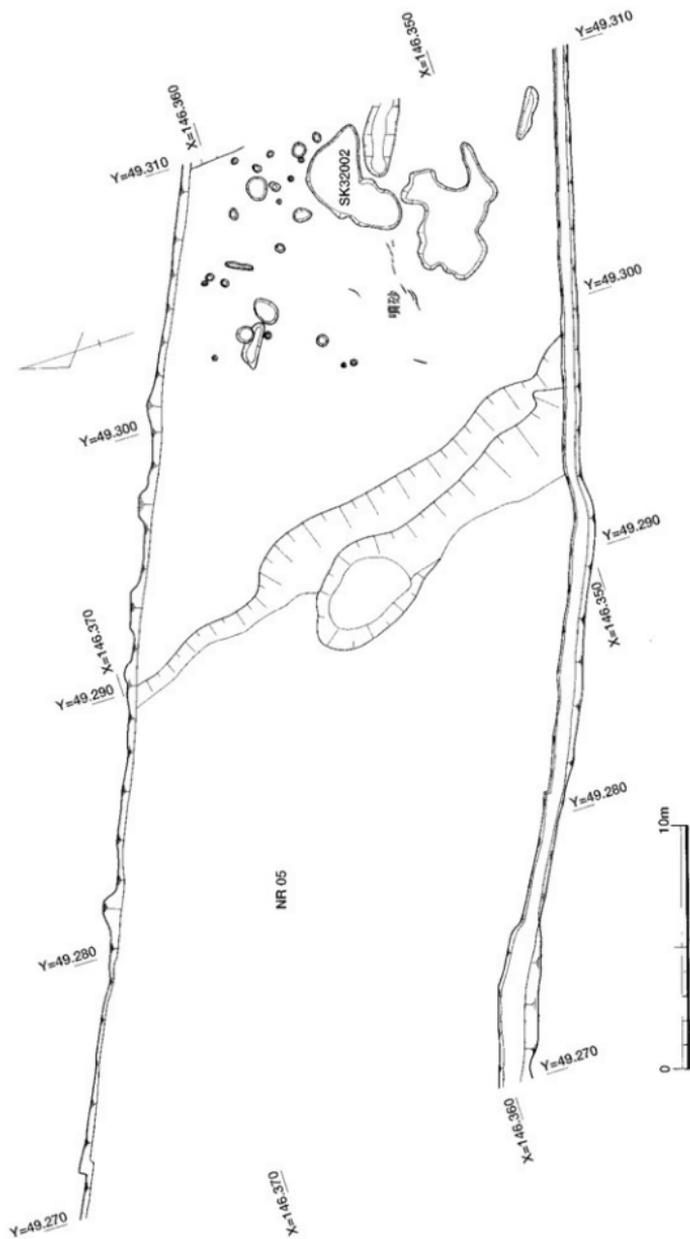
第21图 III区第1遺構面平面図②



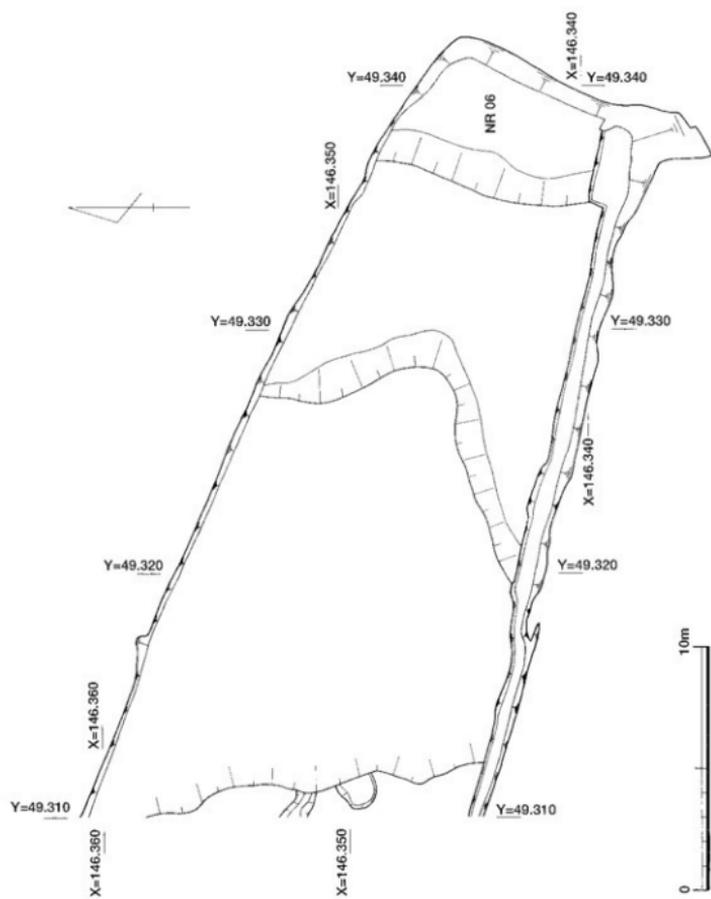
第22图 III区第1遺構面平面図③



第23図 III区第2遺構面平面図①



第 24 图 Ⅱ区第 2 道横断面图②



第 25 図 III区第2遺構面平面図③

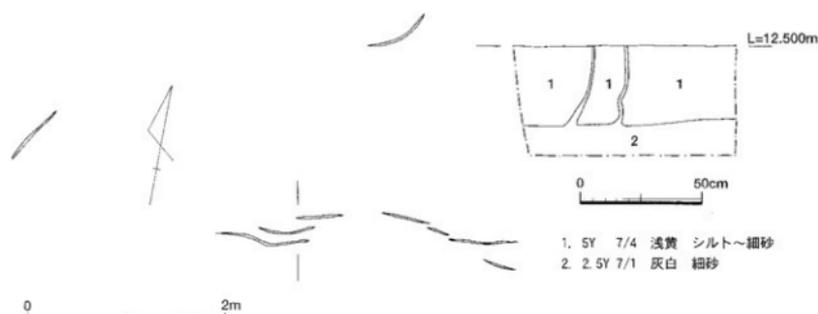
掘立柱建物を確認しており、上部の包含層中から中世までの遺物しか含まないことから、概ね古代から中世の遺構面と考えられる。

また、第35層上面では旧河道2条と土坑12基等を検出し、第2遺構面とした。遺構出土遺物から概ね弥生終末期の遺構面と考えられる。

第2遺構面の遺構

噴砂 (第26図)

調査区中央部で検出した地震痕跡である。長さ25cm～1m、幅数cmの砂脈が断続的に9箇所検出された。噴砂は地山の浅黄色シルト～細砂層直下の灰白色細砂層から噴き上がっており、その高さは30cmを測る。噴砂は遺構との切り合いが無いため、当該遺構面の埋没時期以前のものとしかわからない。遺構面の埋没時期については、基本層序の第8・9層出土遺物から弥生終末期頃と推定しており、当該噴砂を引き起こした地震の時期は弥生終末期以前のものと考えられる。



第26図 III区噴砂平・断面図

NR05 (第23・24図)

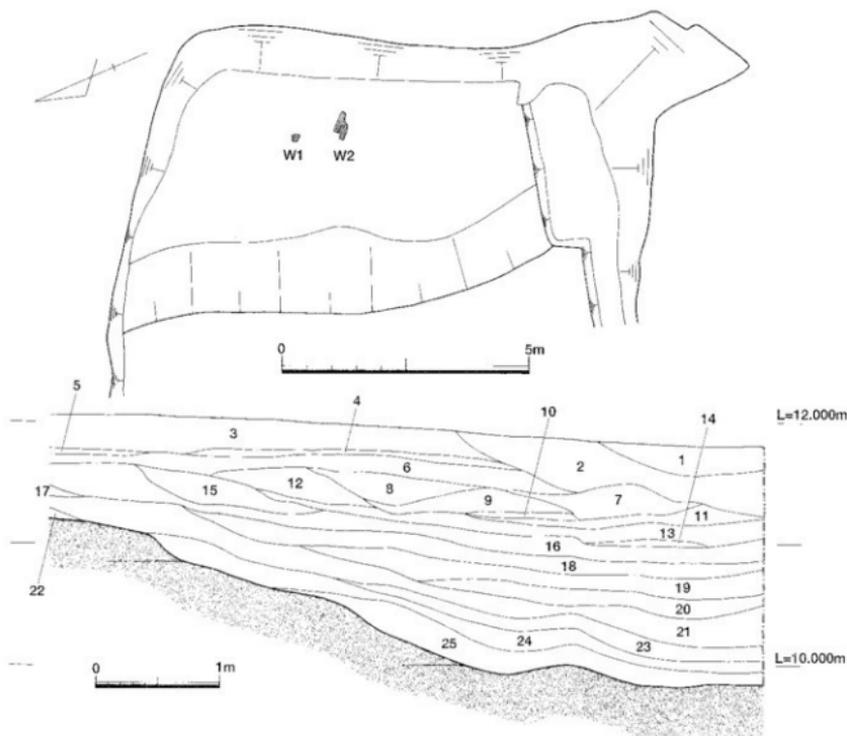
調査区の中央を南から北へ向かって流れる自然河道である。川幅32mを測り、深さは40cmを測る。川の西層は全体になだらかに落ち込んでいるが、東層は南部が2段落ちとなっている。2段落ちの最北部は長径5m、短径3.5m、深さ20cmの土坑状の落ち込みが認められる。埋土は黒褐色シルト質粘土層の単層である。遺物は弥生土器の一片がわずかに出土しただけで、時期は不明であるが、遺構面上部包含層の埋土が弥生終末期と考えられることから、弥生終末期以前の河川と考えられる。

NR06 (第27・28図)

調査区の東端で検出した自然河道で、南から北へ向かって流れている。東層が検出されていないため、川幅は不明であるが、深さは約2mを測る。西層は約25mにわたって緩やかに落ち込んでおり、調査区東端でやや急に落ち込んでいる。第27図では落ち込み部分の平面図及び断面図を掲載した。埋土は25層に分層でき、第1・2層は細砂層である。第3層以下は粘土やシルト層が最下層まで続いている。

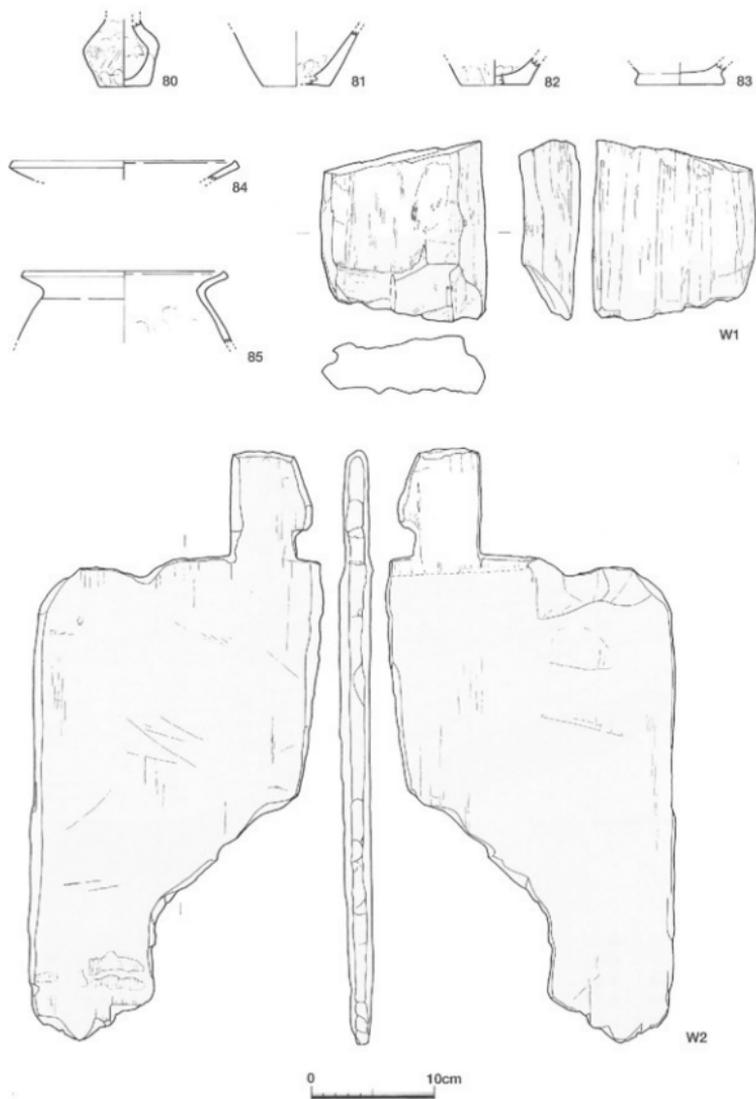
出土遺物は第28図に掲載した。第13層の炭を含む黒色粘土層から80～85の土器が出土し、最下層の第25層の黒褐色砂粘粘土層からW1・W2の木器が出土している。80は弥生土器の壺のミニチュア土器である。外面指頭圧のちタテヘラミガキ、内面指頭圧である。81～83は弥生土器の底部である。84～85は弥生土器の甕である。W1は建築部材である。長さ15cm、幅12cm、厚さ4cmを測る。下部は片面から斜め方

向に切り落としており、上部は切断されている。部材の下部及び側面は焼け焦げている。W2は板材である。長さ39cm、幅23cm、厚さ2.5cmを測る板に長さ9cm、幅7cmの突起がついており、突起の付け根には挟り込みがある。全体に焼け焦げているが、突起部の片面は焼けておらず、他の部材との接合面であった可能性が考えられる。全面焼け焦げている面には線状の工具痕が多数認められる。板状の部材の端の片面にやや分厚い材が接合することから、椅子や台状の木製品の部材と推定できる。下層では土器は出土しておらず、第13層の土器から弥生終末期の旧河道と考えられる。



1. 2.5Y 7/2 灰黄	細砂	10. 10YR 1.7/1 黒	粘土	19. 5Y 4/1 灰	粘土
2. 10Y 6/1 灰	細砂	11. 2.5Y 5/1 黄灰	シルト質粘土	20. 5Y 3/1 オリーブ黒	粘土
3. 7.5YR 6/3 にぶい褐	粘質シルト	12. 2.5Y 2/1 黒	粘土	21. 2.5YR 2/1 黒	粘土
4. 7.5YR 5/3 にぶい褐	粘土	13. 10YR 1.7/1 黒	粘土 (炭・土器含む)	22. 7.5YR 4/1 褐灰	砂混粘土
5. 5YR 4/4 にぶい赤褐	粘土	14. 10YR 4/1 褐灰	粘土	23. 10YR 4/1 褐灰	粘土
6. 7.5YR 6/2 灰褐	粘質シルト	15. 7.5YR 1.7/1 黒	粘土	24. 2.5Y 6/1 黄灰	シルト
7. 10YR 5/1 灰	シルト	16. 5Y 2/1 黒	粘土	25. 2.5YR 3/1 黒褐	砂混粘土
8. 10YR 3/1 黒褐	粘土	17. 7.5YR 3/4 暗褐	粘土		
9. 10YR 5/2 灰黄褐	シルト礫	18. 5G 6/1 緑灰	粘土		

第27図 NR06平・断面図

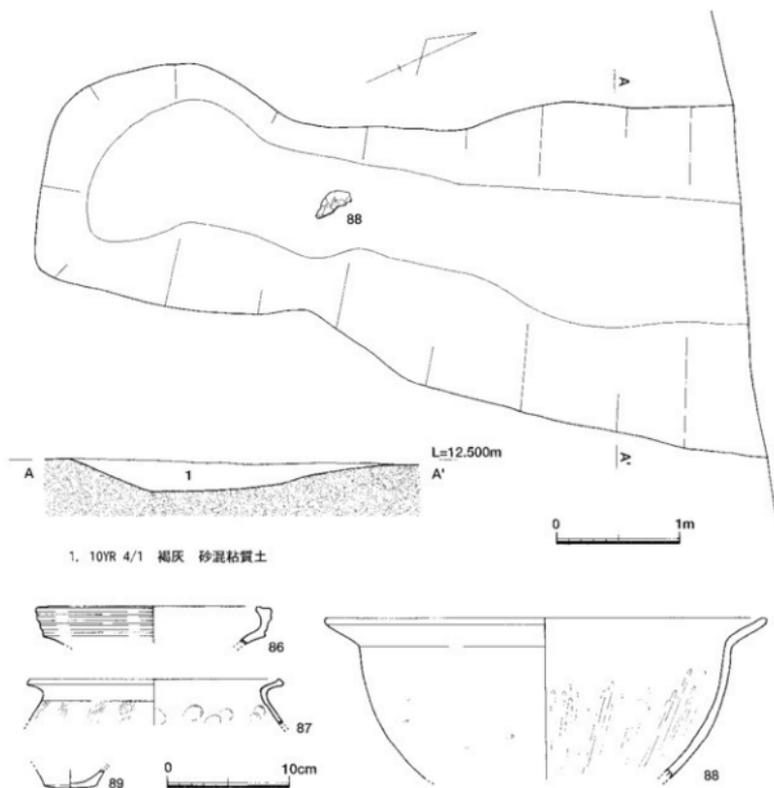


第 28 图 NR06 出土物実測図

SK32001 (第29図)

調査区の北西端で検出した土坑である。北側が調査区外に延びるが、平面形態は溝状を呈するものと考えられ、長辺6.25m以上、短辺2.8m、深さ25cmを測る。埋土は褐灰色砂混粘質土の単層で、断面形態は浅い逆台形である。

出土遺物は第29図に掲載した。86は弥生土器の細頸壺の口縁部である。外面に凹線3条を巡らせている。87は弥生土器の甕である。外面タテハケ、内面指頭圧である。88は弥生土器の鉢である。半球状の体部に外方へ開く口縁部がついている。外面ヨコハラケズリ、内面タテヘラミガキである。89は弥生土器の底部である。やや丸みを持った平底である。86の細頸壺は弥生中期後半まで遡るものであるが、その他の遺物から弥生終末期の遺構と考えられる。



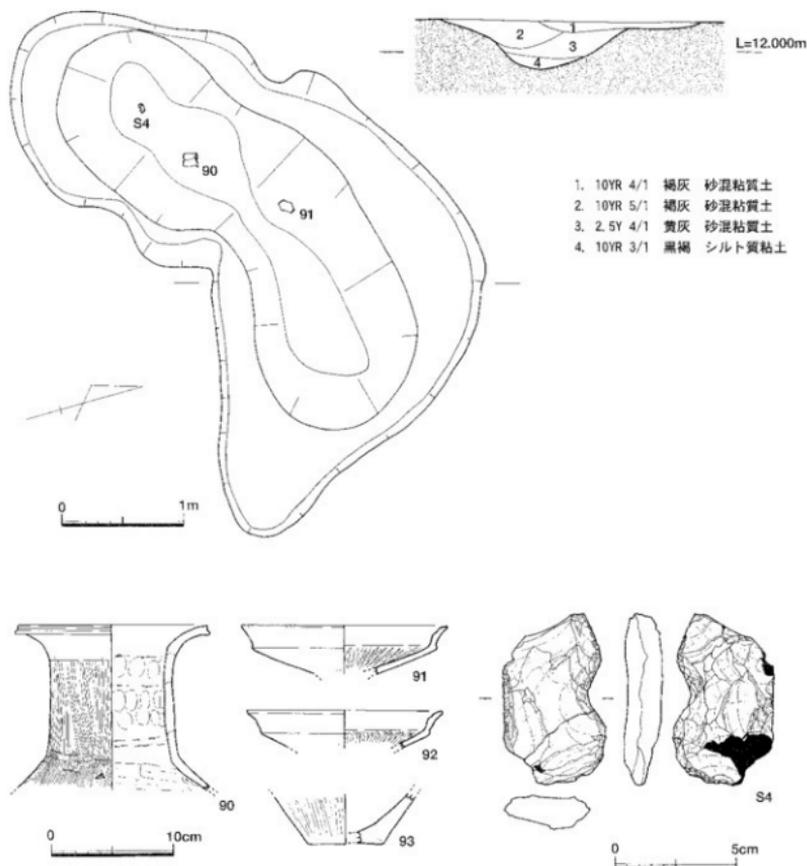
1. 10YR 4/1 褐灰 砂混粘質土

第29図 SK32001 平・断面図及び出土遺物実測図

SK32002 (第30図)

NR05とNR06の間の微高地上で検出した土坑である。平面形態は不整形形であるがI字を呈し、長辺4.6m、短辺3.2mを測る。土坑は検出面より約5cmで平坦面が見られ、土坑の中心部分にはさらに幅1.3m、長さ3.85m、深さ35cmの溝状に落ち込む。埋土は4層に分層でき、第1・2層は褐灰色砂混粘質土、第3層は黄灰色砂混粘質土、第4層は黒褐色シルト質粘土である。

出土遺物はすべて第3層から出土しており、第30図に掲載した。90は弥生土器の長頸壺である。長く垂直に延びる頸部に外反する口縁部がつく。口縁端部はやや上下に拡張させ、凹線文が施されている。外面はタテハケで、体部上部に刺突文が施される。内面は頸部が指頭瓦、体部がヨコヘラケズリである。91・92は弥生土器の高杯である。内面タテヘラミガキである。93は弥生土器の底部である。外面タテヘラミガキ、内面ナデである。S4は削器である。刃部は両面より調整しており、背部は決りを持つ。出土遺物から弥生後期後半の遺構と考えられる。



第30図 SK32002 平・断面図及び出土遺物実測図

第1 遺構面の遺構

NR04 (第20・31・32図)

調査区の西端で検出した自然河道で、Ⅱ区から続いており、西から東へ流れ、北へ屈曲している。川幅は7mであるが、屈曲部は広くなっており、10mを測る。埋土は灰褐色粘質シルトの単層で、深さは40cmを測る。川の肩は全体になだらかに落ち込んでいる。

出土遺物は第31・32図に掲載した。S5は石鍬である。側縁部は一部自然面を残すものの、両面より調整されている。S6は石砲丁である。宍形で、両側面に抉りをもち、刃部は細かく両面から調整が施されている。S7・S8は剃片である。91～100は弥生土器の甕である。98～100は内面指頭圧が見られる。101は弥生土器の広口壺である。直立する頸部から外方へ水平に広がる口縁部がついている。口縁端部は上方に拡張している。外面粗いタテハケ。内面ナデである。102・103は弥生土器の長頸甕である。104は弥生土器の紡錘車である。上器の体部片の転用で、土器内面側から穿孔しているものの、貫通はしていない。内外面ともメツしている。105は弥生土器の高杯の脚部である。外面はメツしており調整不明であるが、沈線1条を施している。内面はヨコヘラケズリである。杯部と脚部の接合面では内壘充填技法が見られる。106～117は弥生土器の底部である。106～108は外面タテヘラミガキが施されている。113は尖底気味、116・117は丸底である。118は弥生土器の鉢である。比較的浅く、やや大型の鉢である。外面ヨコヘラケズリのちタテハケのち指頭圧、内面ナデである。遺物は弥生終末期のものしか出土していないが、Ⅱ区においては古代の遺物が出土していることから、概ね古代の旧河道と考えられる。

NR07 (第21・22・33図)

調査区の中央で南から北に流れる自然河道である。川幅25～30mを測り、深さは30cmを測る。川の肩は全体になだらかに落ち込んでおり、埋土は褐灰色シルト質粘土層の単層である。河川内には中洲上の盛り土が見られる。

出土遺物は第33図に掲載した。119・120は弥生土器の高杯脚部である。S9は削器である。弥生後期～終末期の遺物しか出土していないが、第1遺構面の他の遺構は古代以降のものであり、NR07についても古代以降の遺構の可能性が考えられる。

SK31001 (第34図)

調査区北西部においてNR04の上面で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し、直径1.45m、深さ50cmを測る。埋土は褐灰色砂混粘質土の単層で、断面形態は逆台形である。

出土遺物は第34図に掲載した。121は土師質土器の鍋である。外面粗いタテハケのち指頭圧、内面板ナデである。122は土師質土器の釜である。外面指頭圧、内面ナデである。出土遺物から12世紀頃の遺構と考えられる。

SA31001 (第35図)

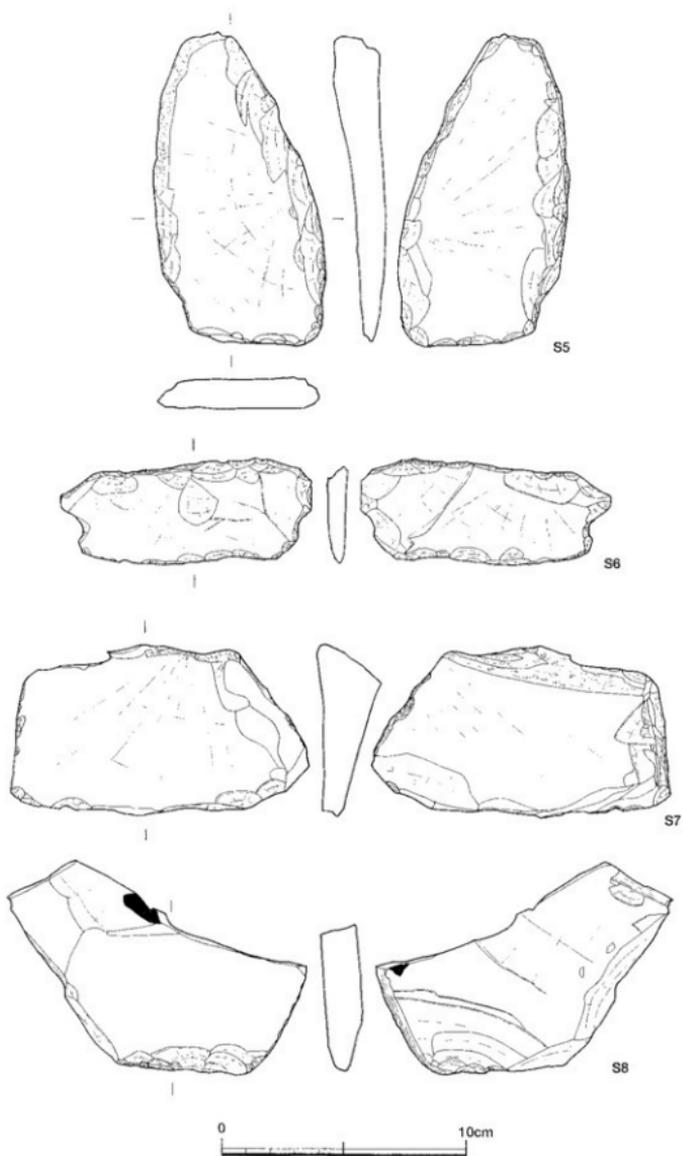
調査区の西部で検出した柱穴列である。柱穴4基からなり、主軸方位はN-83°-Eである。柱間は1m前後で均等である。柱穴列を構成する柱穴は直径10～20cmの円形で、深さは3～15cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから、12世紀頃の遺構と考えられる。

SA31002 (第35図)

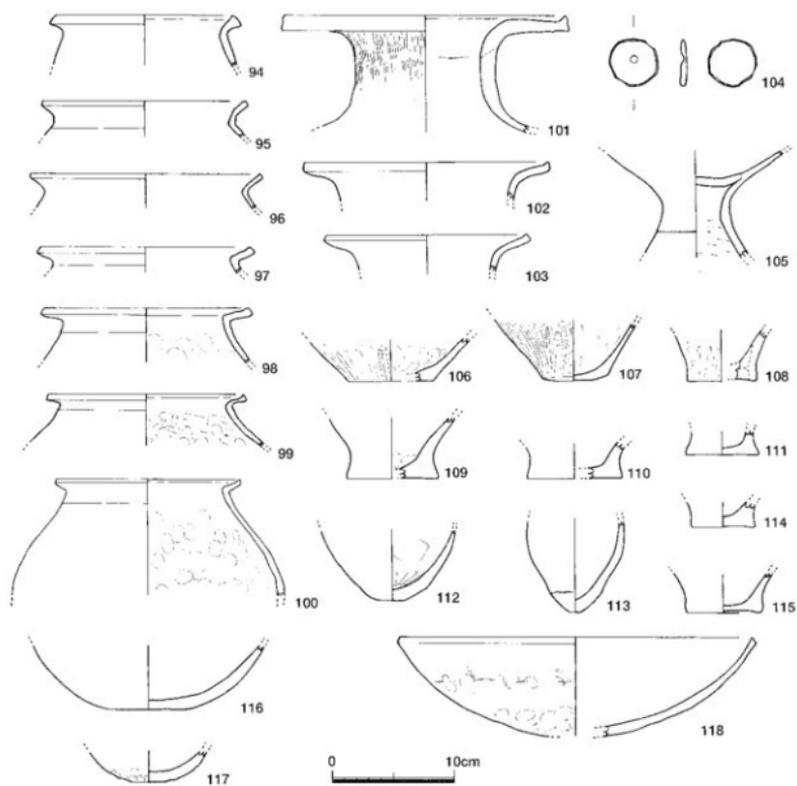
調査区の西部で検出した柱穴列である。柱穴5基からなり、主軸方位はN-88°-Wである。柱間は1m前後で均等である。柱穴列を構成する柱穴は直径10～20cmの円形で、深さは3～15cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから、12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31001 (第36図)

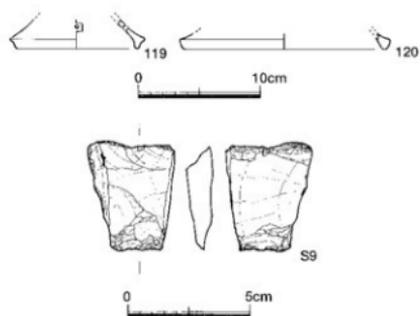
調査区の西部で検出した掘立柱建物である。北東側の柱穴2基が削平のため検出できなかったが、東西3間(3.2m)、南北1間(1.6m)、床面積5.12㎡で、主軸方位はN-75°-Wである。東西方向の柱間は



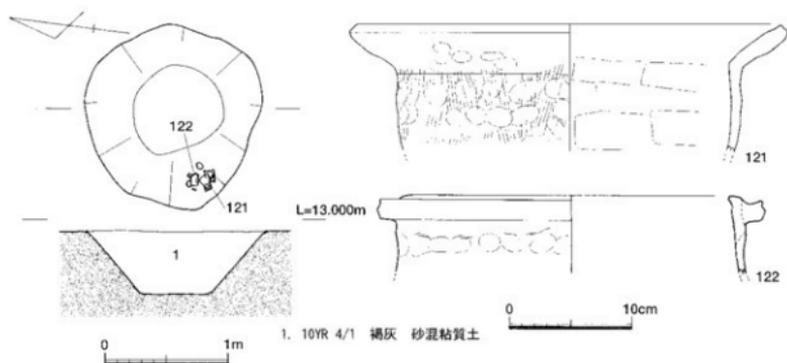
第 31 図 NR04 出土遺物実測図①



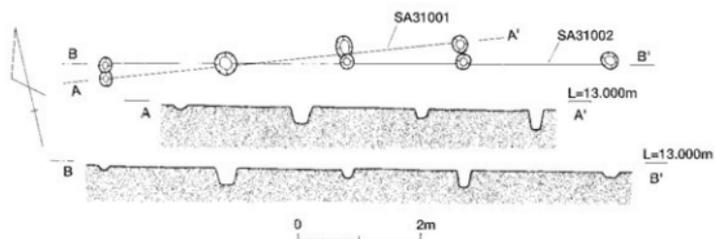
第 32 図 NR04 出土遺物実測図②



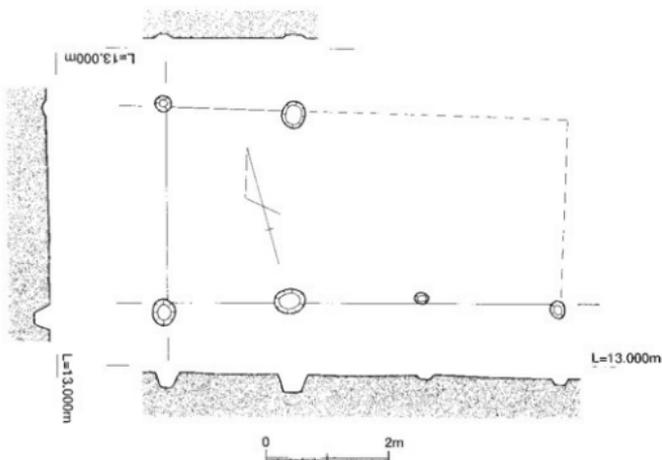
第 33 図 NR07 出土遺物実測図



第 34 図 SK31001 平・断面図及び出土遺物実測図



第 35 図 SA31001・SA31002 平・断面図



第 36 図 SB31001 平・断面図

1～1.1mとほぼ均等である。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10～25cmの円形で、深さは3～15cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、柱穴埋土がSK31001と同じ褐色砂混粘質土であることから、12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31002 (第37図)

調査区の西部で検出した掘立柱建物である。東西3間(2.5m)、南北1間(1.65m)、床面積4.13㎡で、主軸方位はN-75°-Wである。柱間はすべて80～90cmとほぼ均等である。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10～20cmの円形で、深さは3～20cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、柱穴埋土がSK31001と同じ褐色砂混粘質土であることから、12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31003 (第38図)

調査区の西部で検出した掘立柱建物である。北東側の柱穴2基が削平のため検出できなかったが、東西2間(2.2m)、南北1間(90cm)、床面積1.98㎡で、主軸方位はN-76°-Wである。東西方向の柱間は1.1mで均等である。掘立柱建物を構成する柱穴は直径15～25cmの円形で、深さは5～15cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、柱穴埋土がSK31001と同じ褐色砂混粘質土であることから、12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31004 (第39図)

調査区の西端で検出した掘立柱建物である。西側が調査区外であるため、建物東辺しか検出できていない。南北2間(2m)、主軸方位はN-79°-Wである。柱間は1mで均等である。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10～20cmの円形で、深さは10～15cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、柱穴埋土がSK31001と同じ褐色砂混粘質土であることから、12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31005 (第40図)

調査区の西部で検出した掘立柱建物である。東西3間(3.5m)、南北2間(1.8m)、床面積6.3㎡で、主軸方位はN-81°-Wである。建物は東西2室に分割でき、東側は2間、西側は1間である。柱間は東西方向は東側2間分は1.1mで、西側は1.3mとやや広がっている。このため、床面積は東側が3.96㎡、西側が2.34㎡となっている。南北方向の柱間はほぼ90cmで均等であるが、東辺は中央の柱が検出されていない。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10～25cmの円形で、深さは5～20cmを測る。柱穴埋土はSK31001と同じ褐色砂混粘質土である。

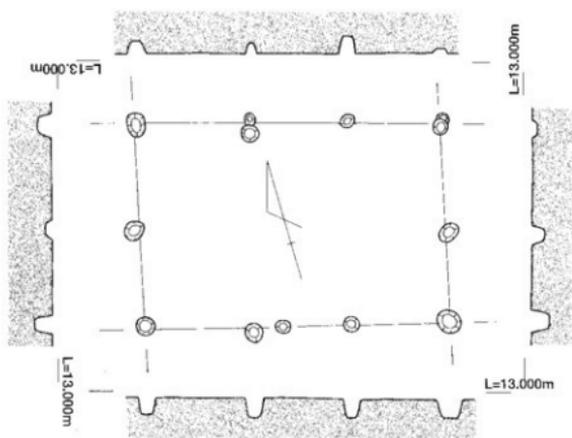
出土遺物は第40図に掲載した。建物北辺の中央に所在するSP3037から123・124、SP3038から125・126が出土した。123・124は土師器の埴である。125・126は土師器の環である。出土遺物から12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31006 (第41図)

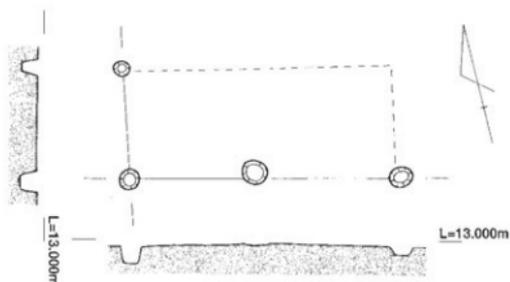
調査区の西部で検出した遺構である。東西3間(3m)、南北1間(70cm)、床面積2.1㎡で、主軸方位はN-81°-Wである。東西方向の柱間はすべて1mでほぼ均等である。南北の幅が70cmと狭いことからSB31006単独の掘立柱建物とは考えられない。SB31005と重なるようにして所在し、ほぼ同じ主軸方位であることから、SB31005の一部になる可能性も考えられる。掘立柱建物を構成する柱穴は直径15～25cmの円形で、深さは10～15cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、柱穴埋土がSK31001と同じ褐色砂混粘質土であることから、12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31007 (第42図)

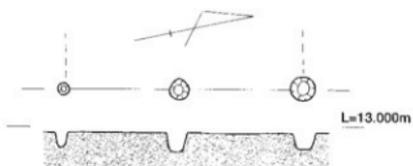
調査区の西部で検出した掘立柱建物である。南東部の柱穴は削平により検出できていないが、東西3間(2.2m)、南北3間(2.4m)、床面積5.28㎡で、主軸方位はN-76°-Wである。柱間は55cm～1mとかなりばらつきがある。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10～20cmの円形で、深さは3～15cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、柱穴埋土がSK31001と同じ褐色砂混粘質土であることから、12世紀頃の遺構と考えられる。



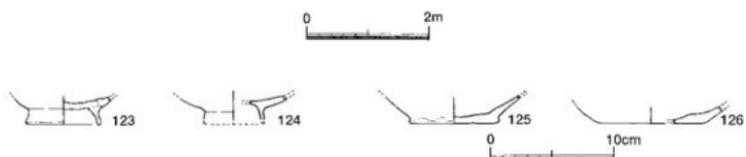
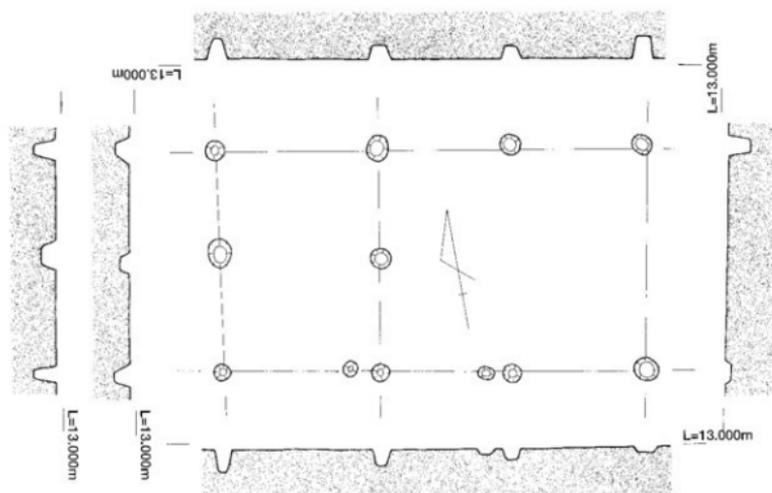
第 37 図 SB31002 平・断面図



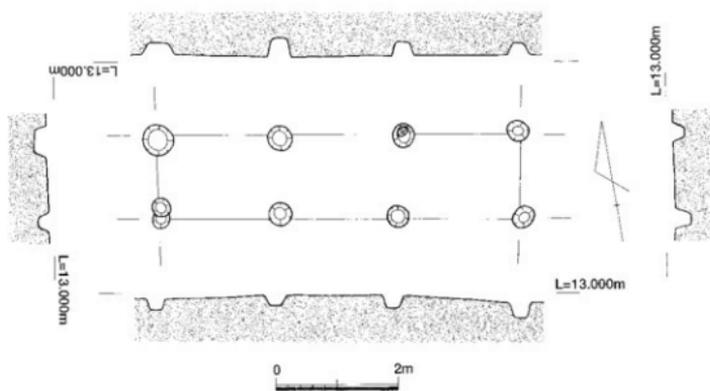
第 38 図 SB31003 平・断面図



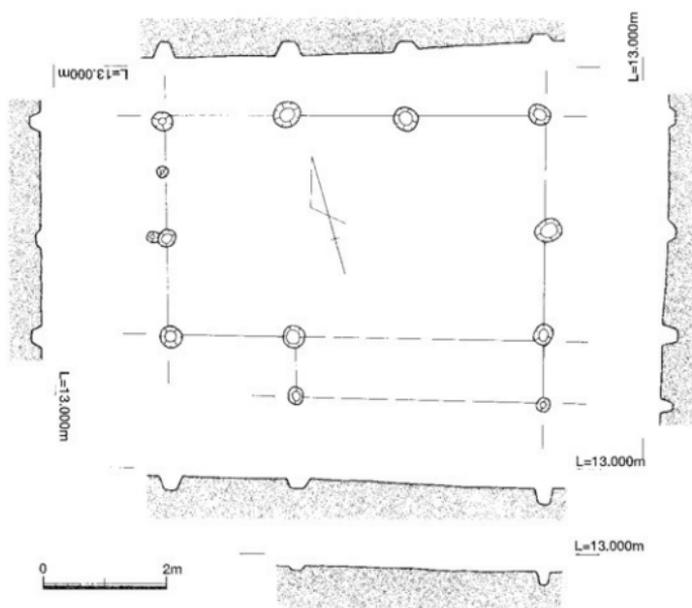
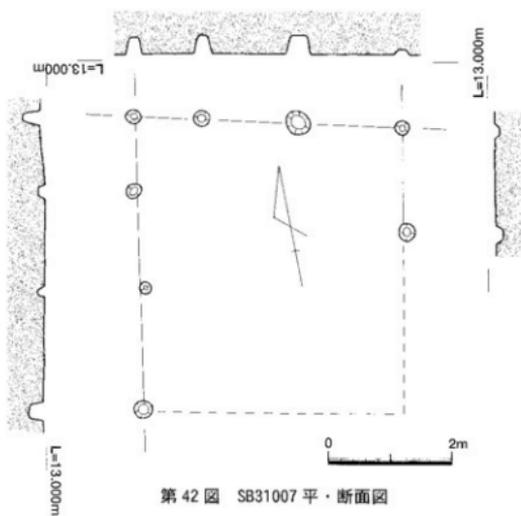
第 39 図 SB31004 平・断面図



第40図 SB31005 平・断面図及び出土遺物実測図



第41図 SB31006 平・断面図



SB31008 (第43図)

調査区の西部で検出した掘立柱建物である。東西3間(3.1m)、南北2間(1.8m)、床面積5.58㎡で、主軸方位はN-74°-Wである。建物の東側2間の南側には約50cmの底状の張り出しが見られる。これをあわせた床面積は6.61㎡である。柱間は東西方向では1m前後で均等であるが、南北方向では北側が1m、南側が80cmである。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10~20cmの円形で、深さは3~15cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから、12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31009 (第44図)

調査区の西部で検出した掘立柱建物である。南東部の柱穴は削平により検出できていないが、東西2間(3m)、南北1間(1.45m)、床面積4.35㎡で、主軸方位はN-77°-Wである。東西方向の柱間は東側が1.3m、西側が1.7mである。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10~20cmの円形で、深さは3~20cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから、12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31010 (第45図)

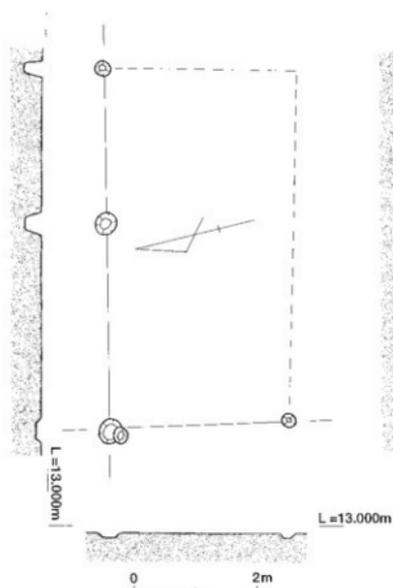
調査区の中央で検出した掘立柱建物である。南東部の柱穴は削平により検出できていないが、東西3間(2.9m)、南北1間(1.9m)、床面積5.51㎡で、主軸方位はN-77°-Wである。東西方向の柱間は1m前後ではほぼ均等である。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10~20cmの円形で、深さは5~15cmを測る。建物の北辺の柱穴は2基ずつ見られることから、建て直しの可能性が考えられる。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから、12世紀頃の遺構と考えられる。

SB31011 (第46図)

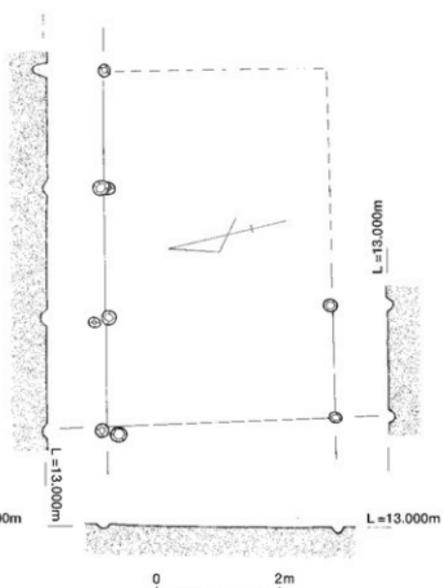
調査区の東部で検出した掘立柱建物である。東西1間(2.6m)、南北1間(1.6m)、床面積4.16㎡で、主軸方位はN-80°-Wである。掘立柱建物を構成する柱穴は直径10cm程度の円形で、深さは3~10cmを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、柱穴埋土がSK31001と同じ褐灰色砂混粘質土であることから、12世紀頃の遺構と考えられる。

溝溝群 (第22図)

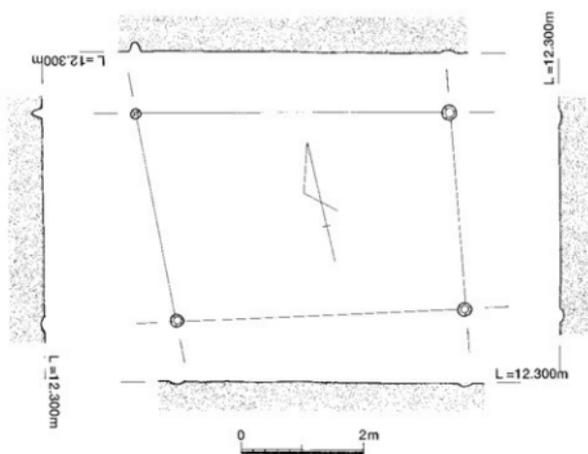
調査区の西端で幅20~30cm、深さ5cmの南北方向の溝を15条検出した。埋土はいずれも浅黄色シルトである。遺物は出土していないが、I区の第1遺構面で検出した近世の遺構の埋土と同じであることから近世の遺構と考えられる。



第 44 图 SB31009 平·断面图



第 45 图 SB31010 平·断面图



第 46 图 SB31011 平·断面图

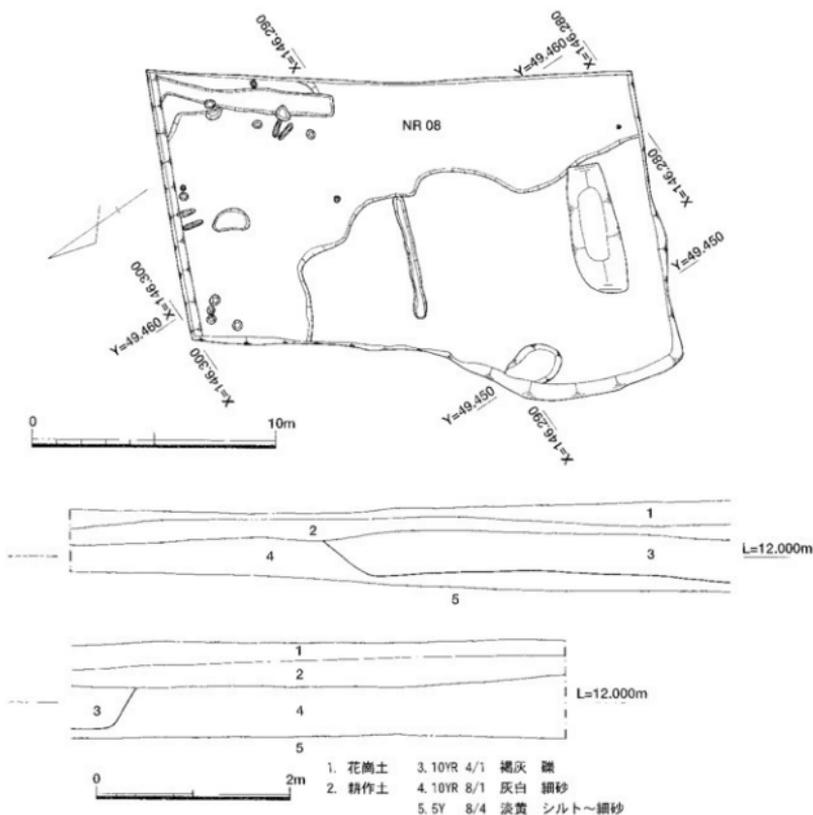
第4節 IV区の調査

調査区の概要と基本層序 (第47図)

IV区は調査地の東部の西端にあたる。調査区の南壁において断面図を作成し、第47図に掲載した。層序は5層に分層できた。第1層は花崗土で現代の客土層、第2層は現代の耕作土である。第3層は褐灰色の礫層で、近現代の土坑と考えられる。第4層は灰白色細砂層である。第5層は淡黄色シルト～細砂層で、遺物を含まないことから地山とした。遺構面はこの地山の上面のみで、旧河道1条、土坑1基、溝2条等を検出した。出土遺物は無く遺構面の時期は不明であるが、隣接するV区の遺構面と同一面であり、V区では中世末～近世の遺構を検出していることから同時期の遺構面と考えられる。

NR08 (第47図)

調査区の東半を南から北へ流れる自然河道である。川幅は7～10mで、深さ40cmを測る。埋土は褐灰色細砂で、層は全体になだらかに落ち込んでいる。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

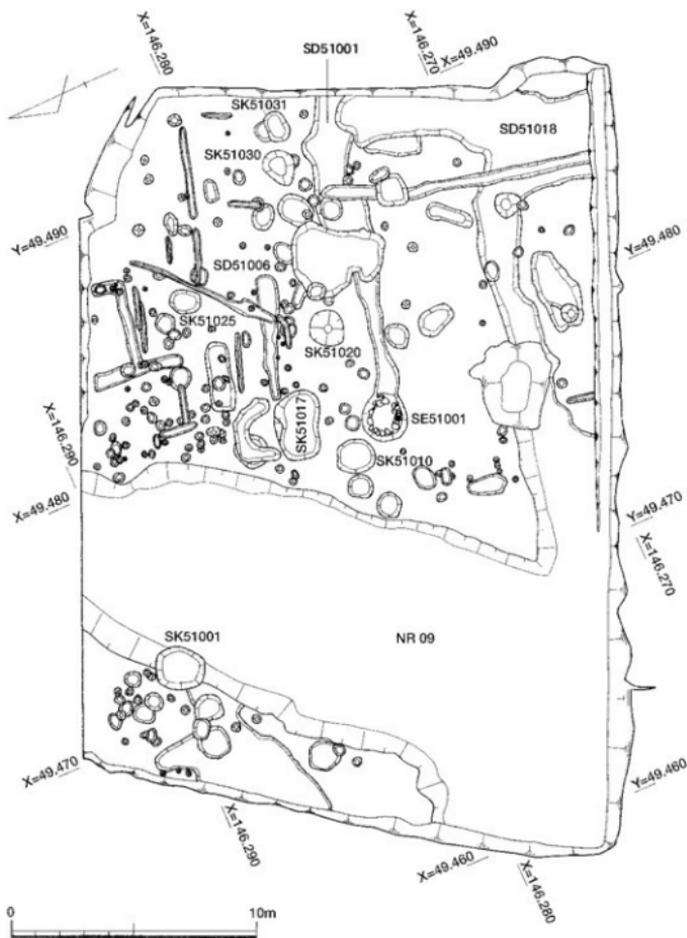


第47図 IV区断面図及び南壁土層断面図

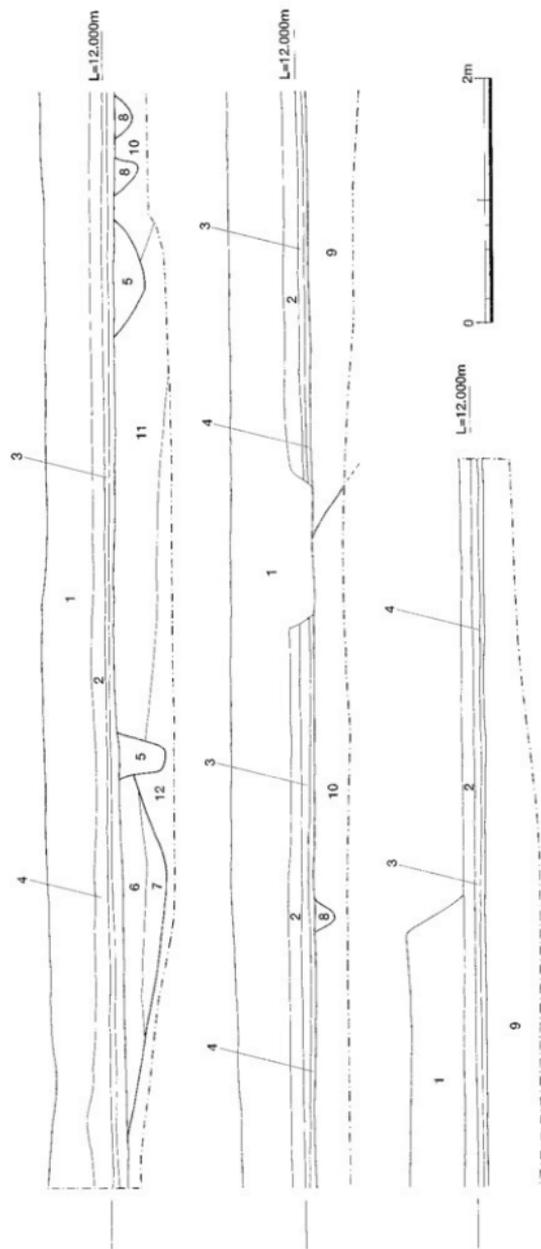
第5節 V区の調査

調査区の概要と基本層序 (第48・49図)

V区は調査地東半の西部にあたる。調査区の南壁において断面図を作成し、第49図に掲載した。層序は12層に分層できた。第1層は花崗土で現代の客土層である。第2層は現代の耕作土、第3層は床土である。第4層は灰褐色シルト質極細砂層で、近世の遺物をわずかに包含する。第5～8層は遺構理土と考えられる。第9層は淡黄色シルト～細砂層で、自然河道NR09の埋土である。第10・11層は礫層で、遺物を含まない

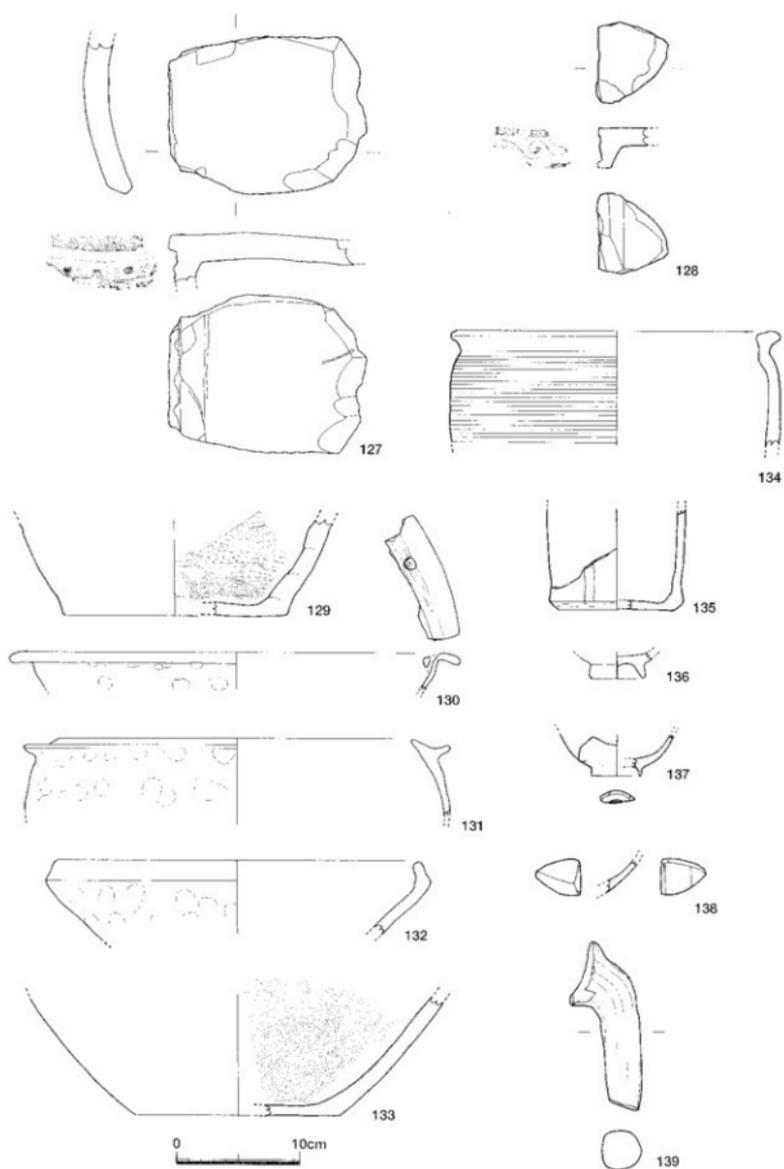


第48図 V区平面図

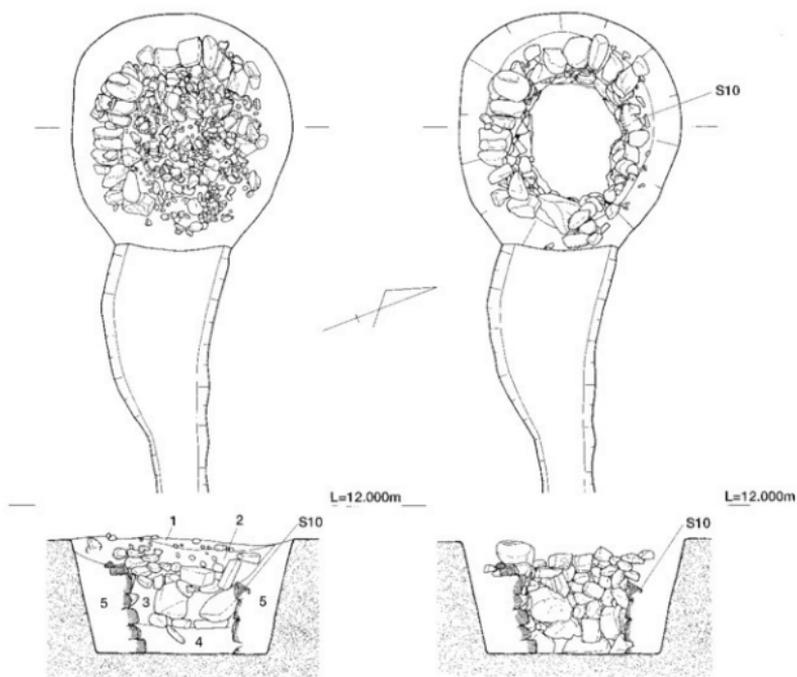


- | | | | | | | |
|-------------|-------------|----|---------|--------------|-------|---------|
| 1. 花崗土 | 7. 5VR6/6 | 橙 | 砂混粘質土 | 7. 10YR 5/3 | にぶい黄褐 | 粘質シルト |
| 2. 精作土 | 4. 5YR4/2 | 灰褐 | シルト質硬細砂 | 8. 10R 4/2 | 灰黄褐 | シルト質硬細砂 |
| 3. 7.5YR6/6 | 5. 2.5Y3/1 | 黄褐 | 礫混粘土 | 9. 7.5Y 8/3 | 茶黄 | シルト～細砂 |
| 4. 5YR4/2 | 6. 2.5Y5/1 | 黄灰 | 礫混粘土 | 10. 10Y 6/1 | 灰 | 礫 |
| 5. 2.5Y3/1 | 7. 2.5Y 6/1 | 黄灰 | | 11. 2.5Y 6/1 | 黄灰 | 礫 |
| 6. 2.5Y5/1 | 8. 2.5Y 8/4 | 茶黄 | | 12. 5Y 8/4 | 茶黄 | シルト～細砂 |

第49図 V区南壁土層断面図

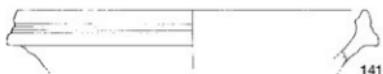
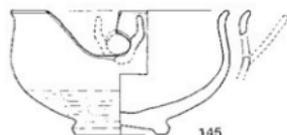


第 50 图 NR09 出土物実測图



1. 10YR 4/1 褐灰 粘質シルト
2. 10YR 5/3 にぶい黄褐 粘土
3. 2.5Y 4/1 黄灰 砂混粘土 (井戸枠上部の石含む)
4. 10G 4/1 暗緑灰 粘土
5. 2.5Y 4/1 黄灰 細砂～粗砂

0 1m



0 10cm

第51図 SE51001 平・断面図及び出土遺物実測図①

ことから地山とした。しかしながら、第10・11層は南壁断面にしか認められず、平面では第12層の淡黄色シルト～細砂層を地山として認識した。

遺構面は地山上面の1面だけである。自然河道1条、土坑31基、溝19条等を検出した。遺構出土遺物から概ね中世末～近世の遺構面と考えられる。

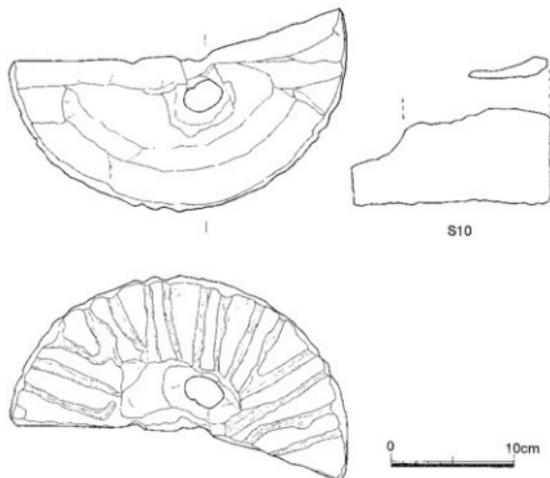
NR09 (第48・50図)

調査区の西半を南から北へ向かって流れる自然河道である。川幅は南側では10m、北側では6.5mで、深さ50cmを測る。埋土は淡黄色シルト～細砂の単層である。

出土遺物は第50図に掲載した。127は軒平瓦である。比較的厚いつくりで、面取りもしっかりしている。凸面はケズリ状の板ナデである。瓦当面には連珠文が見られる。128は軒平瓦である。やや薄く、瓦当面には唐草文が見られる。129は信楽焼の壺である。内面に格子目タタキが認められる。130は土師質土器の焙烙である。内耳を持ち、孔は貫通している。外面指頭庄、内面ナデである。131は土師質土器の釜である。外面指頭庄、内面ナデである。132は土師質土器の摺鉢である。外面指頭庄、内面ナデである。133は備前焼の摺鉢である。134は産地不明の陶器壺である。135は備前焼の鉢である。136は肥前系陶器の京佐風陶器碗である。137は肥前系磁器の碗である。138は龍泉窯系青磁碗で、鎗連弁が見られる。139は土師質土器鍋の脚部である。出土遺物のうち127の瓦は13世紀に遡るものであるが、中世後半～近世のものも多く、最終埋没は19世紀頃と考えられる。

SE51001 (第51・52図)

調査区の中央で検出した井戸である。平面形態は楕円形を呈し、長径2m、短径1.8m、深さ95cmを測る。井戸枠は石組みであり、検出面では長径1m、短径90cm、底面では長径90cm、短径75cmの楕円形である。石組みは高さ75cmまで残っている。井戸枠の石組みに使用された石材は砂岩が多く、一部火山岩が使用されている。また、第52図S10の石臼が転用されていた。また、石積み方法は、基底部の石材は長辺を井戸の中心に向けるもの、2段目以上の石は小口を井戸の中心に向けて積まれている。井戸の断面形態は逆台形を呈し、埋土は井戸枠内4層と掘方部分の計5層に分層できる。第1層は褐灰色粘質シルト層、第2層はぶい黄褐色粘土層で、この上部2層には数cm～20cm程度の礫が多く混じる。第3層は黄灰色砂混粘質土層で井戸枠上部の石材が転落していた。第4層は暗緑灰色粘土層である。第5層とした掘方は黄灰



第52図 SE51001出土遺物実測図②

色の細砂～粗砂層である。断面の状況から井戸は第4層堆積後に上部石積みを破却され、さらに礫によって上部を埋め戻されたと考えられる。また、井戸から溝SD51001が東へ延びている。

遺物は人工的な埋め戻しの土と考えられる第1・2層から出しており、第51・52図に掲載した。140は土師質土器の鍋である。口縁部はわずかに外反する。外面指頭庄、内面ヨコハケである。141は備前焼播鉢である。重ね焼痕が残る。142～144は肥前系陶器の皿である。すべて高台無軸としており、142の外面には胎土目が残る。145は瀬戸美濃系陶器片口鉢である。片口部分は欠損しているものの、注ぎ口には円孔が穿たれている。体部下半以下の無軸部分はヨコヘラケズリが残る。146は土師器の皿である。147は土師質土器の播鉢である。S10は凝灰岩製の石臼である。中央から放射状の刻線が見られる。出土遺物から17世紀前半に井戸が埋め戻されたことがうかがえる。

SD51001 (第53図)

SE51001から東へ向かって流れる溝である。最大幅1.95m、検出長13.4m、深さ20cmを測る。埋土は褐灰色粘質シルトの単層で、断面形態は逆台形である。SE51001から溝が始まっていることから、この井戸から水を配水していた溝の可能性が考えられる。

出土遺物は第53図に掲載した。148～150は土師器の皿である。151は土師質土器鍋の脚部である。152は肥前系陶器の皿である。高台無軸で、砂目が内外面に残る。内面には鉄絵により文様が描かれている。出土遺物から17世紀前半の遺構と考えられる。

SD51006 (第54図)

調査区中央で検出した東西方向の溝である。最大幅90cm、検出長5.2m、深さ20cmを測る。埋土は褐灰色砂混粘質土の単層で、断面形態はU字である。

出土遺物は第54図153の肥前系陶器の皿だけである。153は高台無軸で、内外面に砂目を残す。出土遺物から17世紀前半の遺構と考えられる。

SD51018 (第55図)

調査区南東隅で検出した溝である。最大幅4.8m、検出長12.5mの南北方向の溝から、西側へ最大幅2.5m、長さ17mの溝が分岐し、NR09に流れ込んでいる。埋土は黄灰色粘質シルトの単層で、断面形態は逆台形である。

出土遺物は第55図に掲載した。154は肥前系陶器の皿である。高台無軸で、見込みに胎土目が残る。155は肥前系磁器の皿である。見込みに染付けが見られる。156は肥前系陶器の皿である。157は肥前系磁器の瓶である。158は肥前系磁器の紅猪口である。外面には雨降り文と圏線が施されている。159は土師質土器の火鉢である。体部は肩が張り、短い口縁部は直立する。外面ナデ、内面ヨコヘラケズリである。160は土師質土器の鍋である。外面指頭庄、内面板ナデである。161は土師質土器の甕である。162～164は備前焼の播鉢である。最も新しい遺物から18世紀の遺構と考えられるが、18世紀の遺物は旧河道との合流点付近に集中しており混入の可能性も考えられる。その他の場所では17世紀の遺物しか出土しておらず、17世紀の屋敷地を囲む溝の可能性も有る。

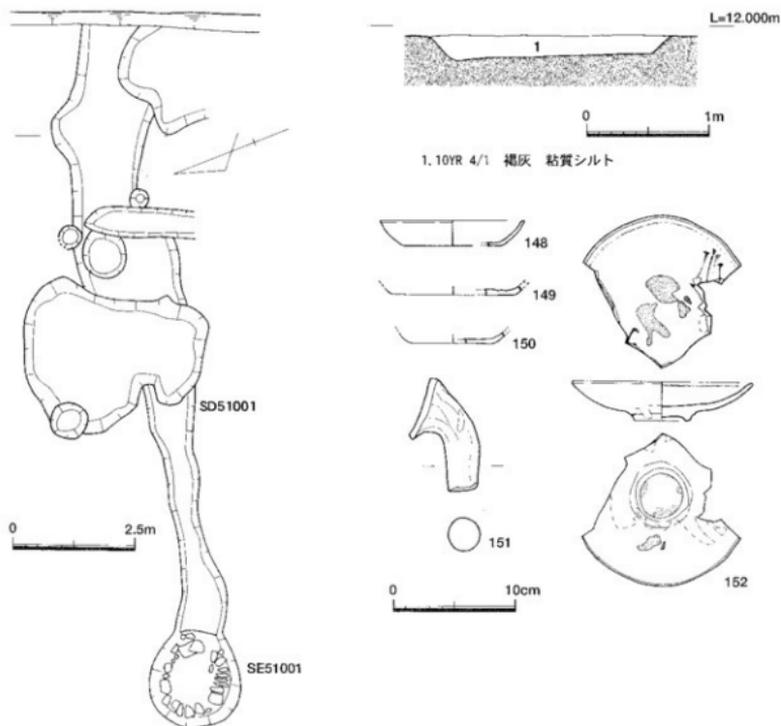
SK51001 (第56図)

調査区北西部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径2m、短径1.8m、深さ25cmを測る。埋土は炭を含んだ黄灰色粘質シルトの単層で、断面形態は逆台形である。

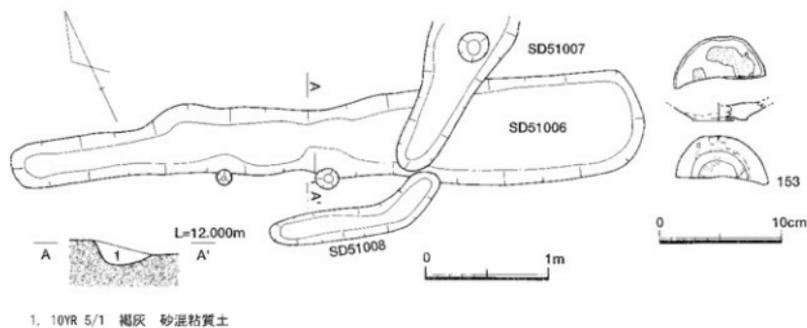
出土遺物は第56図に掲載した。165は備前焼の鉢である。底面に窯記号が見られる。166は備前焼の播鉢である。167は堺焼の播鉢である。削出高台がわずかに残る。168～176は土師質土器の焙烙である。内耳に2個の孔を持ち、貫通している。出土遺物から18世紀前半頃の遺構と考えられる。

SK51010 (第57図)

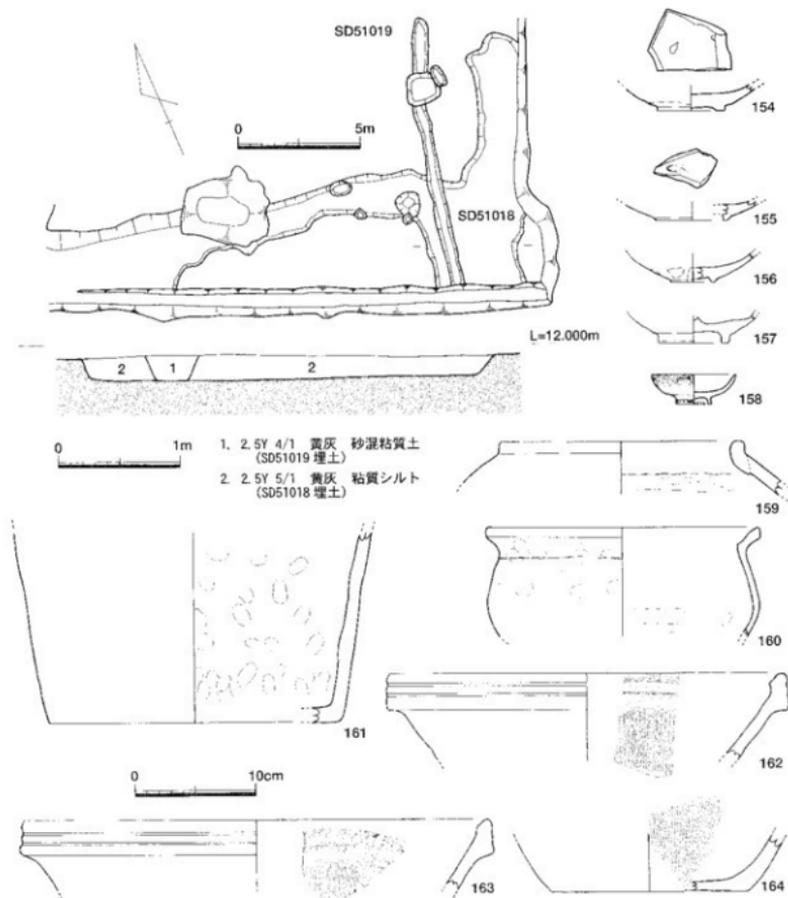
調査区中央で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径1.5m、短径1.4m、深さ75cmを測る。断面形態は逆台形である。土坑の底面と壁面には厚さ10～20cmの黄灰色の粘土を貼り付けており、水溜



第 53 図 SD51001 平・断面図及び出土遺物実測図



第 54 図 SD51006 平・断面図及び出土遺物実測図



第55図 SD51018 平・断面図及び出土遺物実測図

め等に利用した可能性が高い。粘土内の埋土は黄褐色の礫混じりの細砂層である。

出土遺物は第57図に掲載した。177は肥前系磁器の小甗である。外面に染付と罫線が見られる。178は肥前系磁器甗で、外面の文様は菊花散らしである。179は瀬戸美濃系磁器仏飯具である。180は産地不明陶器の皿である。181は信楽焼の鉢である。出土遺物から19世紀の遺構と考えられる。

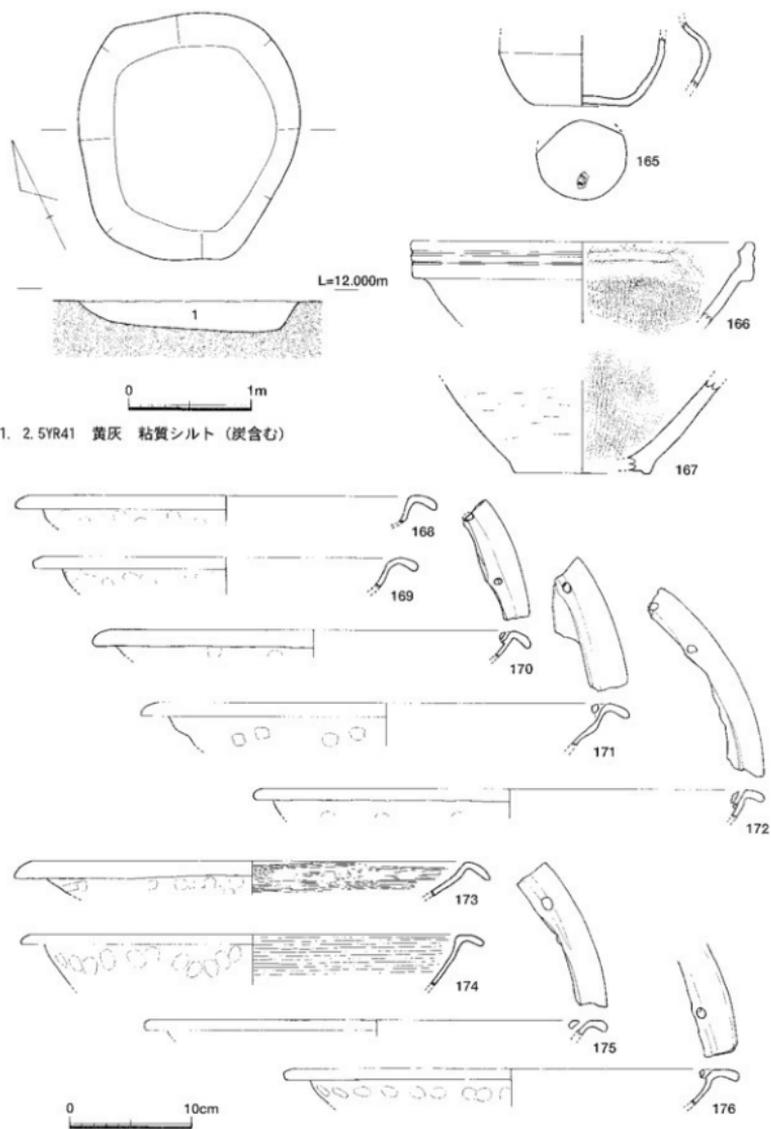
SK51017 (第58図)

調査区中央で検出した土坑である。平面形態は隅丸の長方形を呈し、長辺2.8m、短辺1.8m、深さ30cmを測る。埋土は傘大の礫を含んだ褐灰色粘質シルトの単層で、断面形態は逆台形である。

出土遺物は第58図183の火鉢1点だけで、遺構の詳細な時期は不明である。

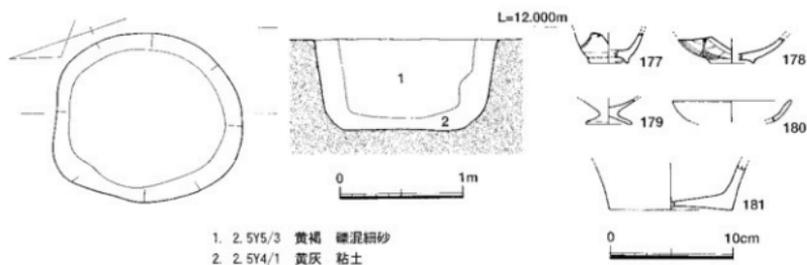
SK51020 (第59図)

調査区中央で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し、直径1.4m、深さ55cmを測る。埋土は2層

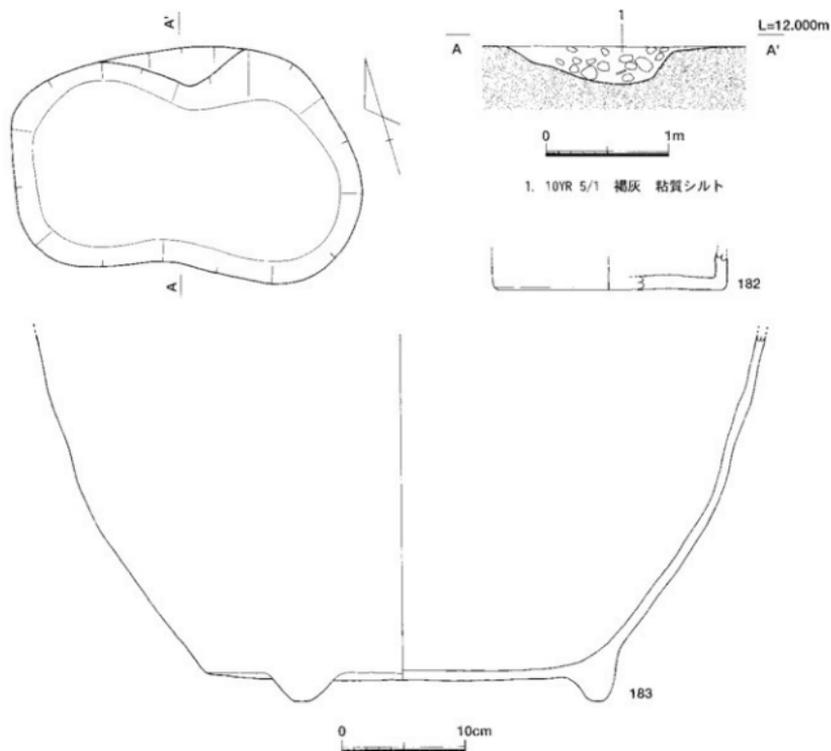


1. 2. 5YR41 黄灰 粘質シルト (炭含む)

第 56 図 SK51001 平・断面図及び出土遺物実測図



第 57 図 SK51010 平・断面図及び出土遺物実測図



第 58 図 SK51017 平・断面図及び出土遺物実測図

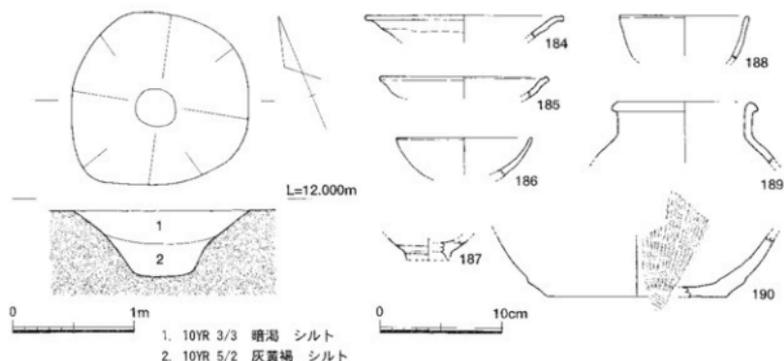
に分層でき、上層は暗褐色シルト、下層は灰黄褐色シルトで、断面形態は逆台形である。

出土遺物は第59図に掲載した。184・185は肥前系陶器の皿である。186・187は肥前系磁器碗である。188は京信楽系陶器の碗である。189は備前焼の壺である。190は堺焼の榴鉢である。出土遺物中には17世紀前半の遺物も含むが、18世紀の遺構と考えられる。

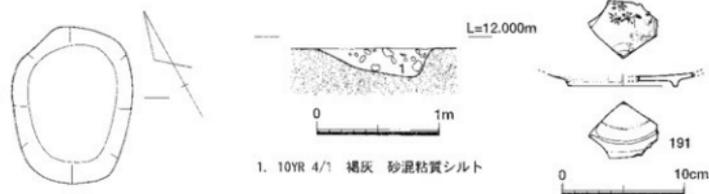
SK51025 (第60図)

調査区北東部で検出した上坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径1.3m、短径1m、深さ25cmを測る。埋土は拳大の礫を含んだ褐灰色粘質シルトの単層で、断面形態は逆台形である。

出土遺物は第60図191の肥前系磁器の皿1点のみで、遺構の詳細な時期は不明である。



第59図 SK51020 平・断面図及び出土遺物実測図



第60図 SK51025 平・断面図及び出土遺物実測図

SK51030 (第61図)

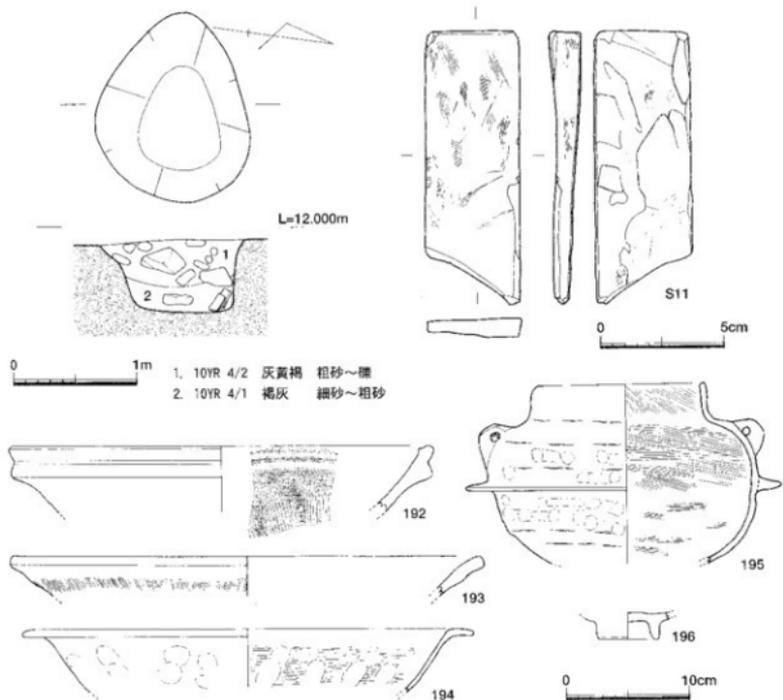
調査区東部で検出した土坑である。平面形態は卵形を呈し、長径1.55m、短径1.3m、深さ60cmを測る。埋土は2層に分層でき、上層は灰黄褐色粗砂～礫、下層は褐灰色細砂～粗砂で、両層とも人頭大の石材を多く含んでいる。断面形態は逆台形である。

出土遺物は第61図に掲載した。S11は流紋岩製の砥石である。全面に擦痕が残る。192は備前焼の榴鉢である。193は土師質土器の鍋である。外面タテハケ、内面ナデである。194は土師質土器の焙烙である。外面指頭圧、内面ヨコハケのち指頭圧である。195は瓦質土器の釜である。短く直立する口縁部をもち、体部上半に外耳がつく。外面指頭圧、内面ヨコハケである。196は肥前系陶器の京焼風碗である。出土遺物から18世紀前半頃の遺構と考えられる。

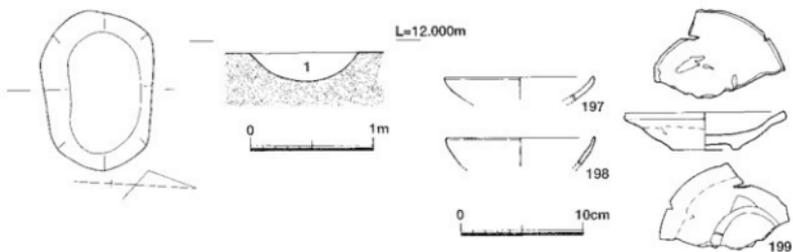
SK51031 (第62図)

調査区東部で検出した土坑である。平面形態は卵形を呈し、長径1.2m、短径90cm、深さ25cmを測る。埋土は褐灰色の礫混シルトの単層で、断面形態はレンズ状の堆積である。

出土遺物は第62図に掲載した。197は肥前系陶器の皿である。198は土師器の坏である。199は肥前系陶器の皿である。高台無軸で、内外面に砂目が残る。出土遺物から17世紀前半の遺構と考えられる。

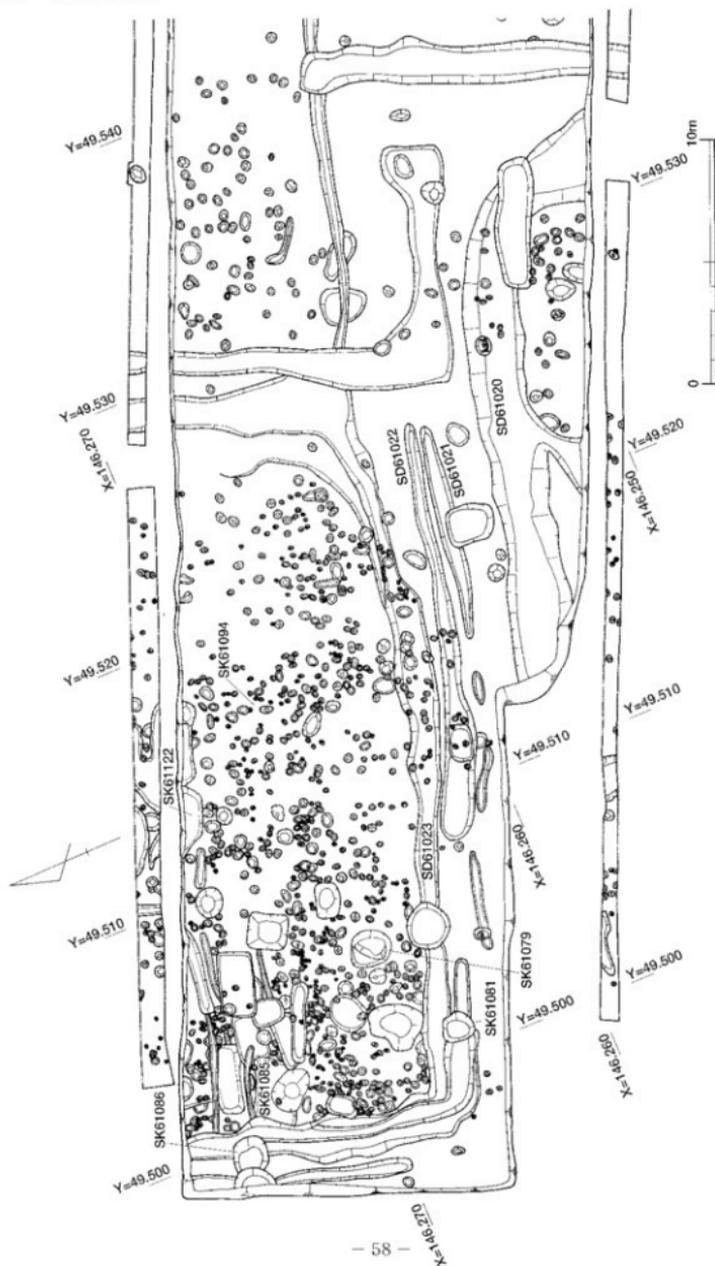


第61図 SK51030 平・断面図及び出土遺物実測図

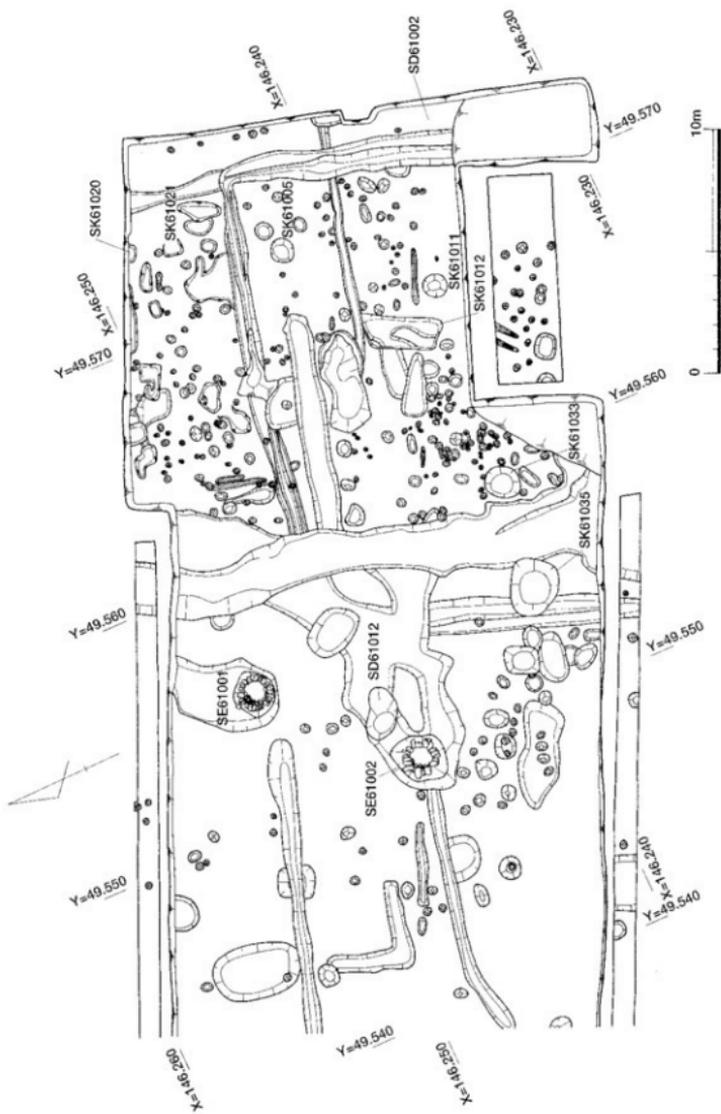


第62図 SK51031 平・断面図及び出土遺物実測図

第 6 節 VI区の調査



第 63 図 VI区平面図①



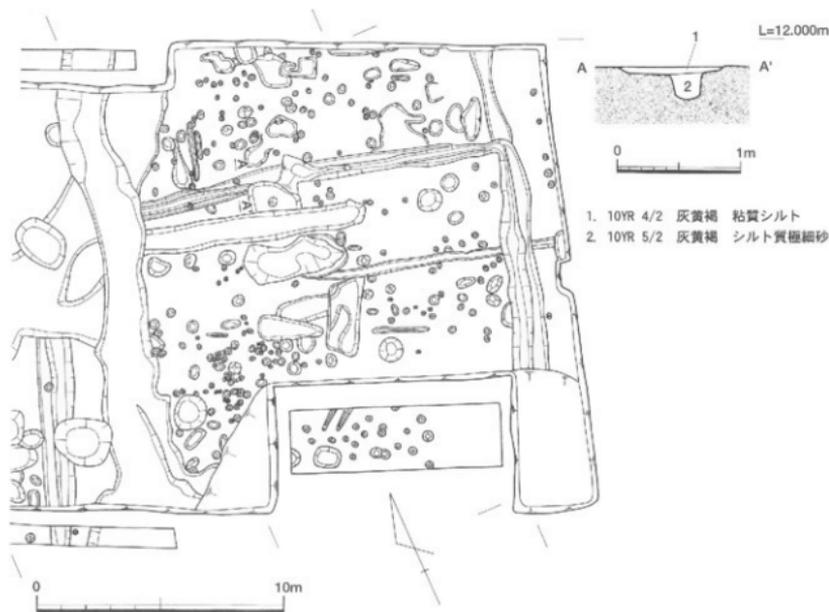
第 64 图 VI 区平面图②

調査区の概要と基本層序 (第63・64図)

VI区は調査地東半の中央にあたる。基本層序は厚さ10～15cmの現代の耕作土層直下で遺物を含まない淡黄色シルト～細砂層が検出でき、この面を地山としてとらえた。このため、遺構面は地山上面の1面だけである。遺構は屋敷地を区画すると考えられる溝や土坑等を検出した。遺構出土遺物から概ね中世末～近世の遺構面と考えられる。

SD61002 (第65図)

調査区の東部で検出した溝である。南側が調査区外へ延びるため不明であるが、東・北・西の3面をコの字に囲む溝である。最大幅1.6m、深さ30cmを測る溝である。断面形状は2段落ちとなっており、埋土も2層に分層できる。上層は灰黄褐色粘質シルト層、下層は灰黄褐色シルト質極細砂層である。溝で囲まれた内部からは柱穴や土坑を検出しており、屋敷地を区画する溝と考えられる。屋敷地の範囲は東西18m、南北14m以上で、溝を含めた範囲は東西20.8m、南北15m以上である。遺物は図示できなかったが、胎土目を有する肥前系陶器の小片が出土しており、最終埋没は17世紀初頭頃の遺構と考えられる。



第65図 SD61002平・断面図

SD61012 (第66・67図)

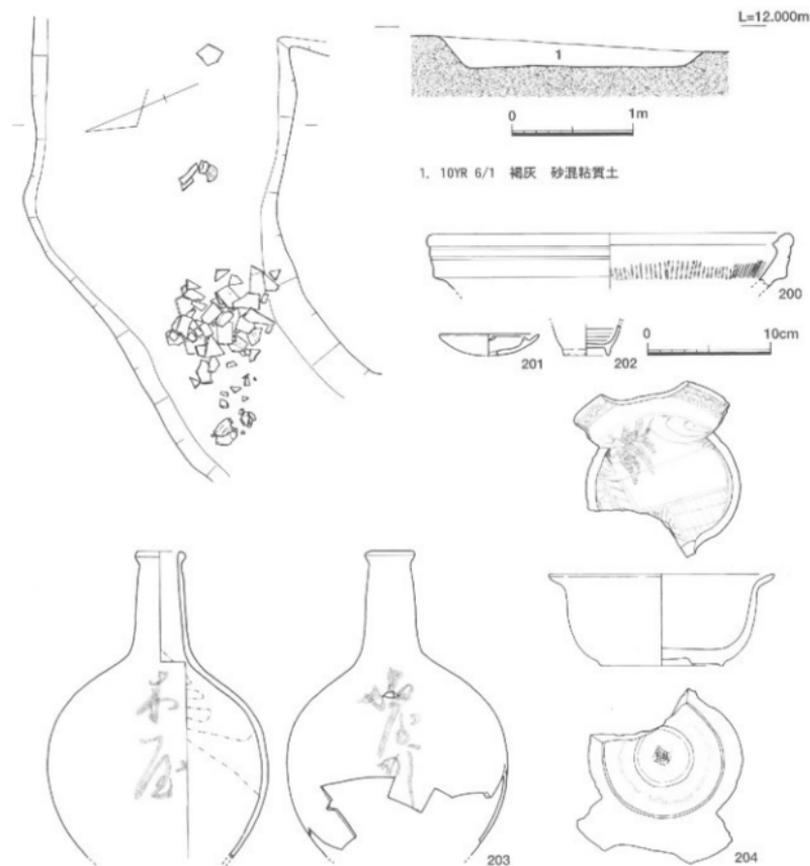
調査区の東部で検出した溝である。SE61002から北東方向に流れ、検出長16m、最大幅3.5m深さ25cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は褐灰色砂混粘質土の単層である。

出土遺物は第66・67図に掲載した。200は堺焼の描鉢である。201は備前焼の灯明皿である。202は肥前系磁器の瓶で、内面無釉である。203は京・信楽系陶器の徳利である。外面に文字を染付している。204

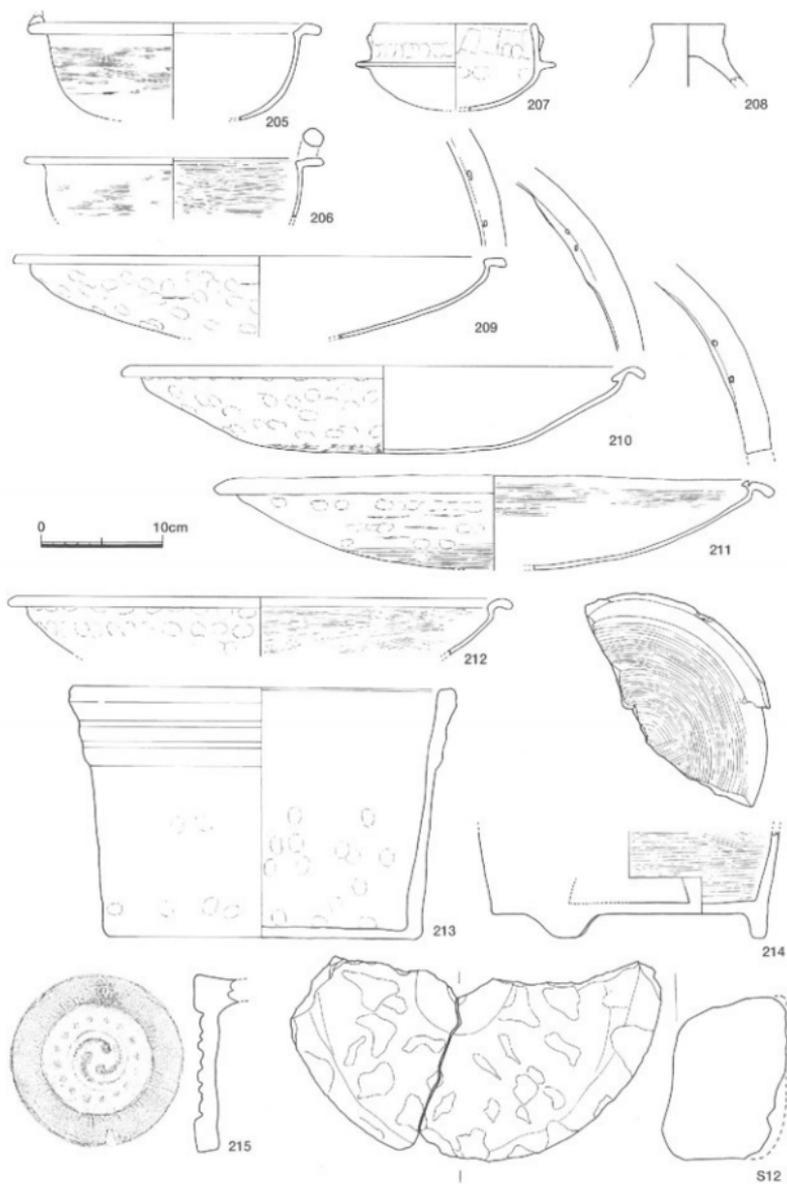
は肥前系磁器の鉢である。外面青磁軸で、蛇ノ目凹型高台内には溝窟が見られ、内面は染付である。205・206は瓦質土器の鍋で、把手がつく。207は瓦質土器の釜である。外面指頭圧、内面板ナデ後指頭圧である。208は弥生土器の蓋で混入品である。209～212は土師質土器の焙烙である。外面は指頭圧、内面はヨコハケやナデが施されている。内耳の孔は貫通していない。213は土師質土器の鉢である。内外面とも指頭圧である。214は土師質土器の焔炉である。3方向に脚部及び体部に窓がつくと考えられる。215は軒丸瓦である。巴文の上部に◎の刻印が見られる。S12は石臼である。この他図示しなかったが、平瓦が多量に出土した。出土遺物から18世紀後半～19世紀の遺構と考えられる。

SD61020 (第68～71図)

調査区中央部南端で検出した溝である。東西方向の溝であるが、東端で南へ屈曲している。検出長は24m、最大幅2.6m、深さ60cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は2層に分層でき、上層は暗灰黄



第66図 SD61012 平・断面図及び出土遺物実測図①



第 67 图 SD61012 出土遺物実測図②

色シルト質極細砂層、下層は黄灰色細砂～粗砂層である。L字にしか検出していないが、SD61002及びSD61023とはほぼ同時期の溝であることから、屋敷地を囲む溝と推定した。屋敷地内の状況については調査区外になることから不明である。なお、調査区の西端が条里坪界となっており、SD61023で囲まれる屋敷地もこの部分を西端としていることから、SD61020で囲まれる屋敷地も坪界を西端とする可能性が考えられる。また、調査区の南に所在する東西の市道も坪界であり、ここを南端とする可能性が考えられる。検出したSD61020の屈曲部から坪界まではいずれも約44mを測ることから、44m四方の屋敷地を想定できる。

出土遺物は第69～71図に掲載した。216～220は土師器の皿である。221は肥前系磁器の青磁皿である。222・223は土師質土器の鍋である。224・225は土師質土器の鍋で、内耳がつくものである。226～229は土師質土器の鍋である。230～235は土師質土器の脚部である。236・237は土師質土器の釜である。外面指頭圧、内面ヨコハケである。238～245は土師質土器の播鉢である。外面指頭圧及びナデで、内面はナデのものが多い。246・247は備前焼の播鉢である。248～252は丸瓦である。凹面はコビキAと布目痕が見られる。253・254は平瓦である。255は丸瓦である。凹面はコビキAと布目痕及び吊り紐痕が見られ、凸面は板ナデで細かく整形されている。S13は石臼である。出土遺物から概ね16世紀の遺構と考えられる。

SD61021 (第72図)

調査区西部で検出した溝である。東西方向の溝で全長は9m、最大幅80cm、深さ10cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は黄灰色粘質シルトの単層である。

出土遺物は第72図に掲載した。256は肥前系陶器の鉢である。外面無釉、内面施釉である。267は土師質土器の焙烙である。外面指頭圧、内面ヨコハケである。出土遺物から18世紀の溝と考えられる。

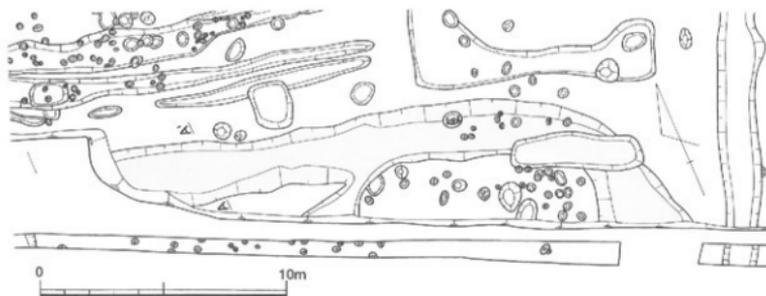
SD61022 (第73図)

調査区西部で検出した溝である。東西方向の溝で全長は17.2m、最大幅1.2m、深さ28cmを測る。断面形状は逆台形を呈し、埋土は黄灰色粘質シルトの単層である。

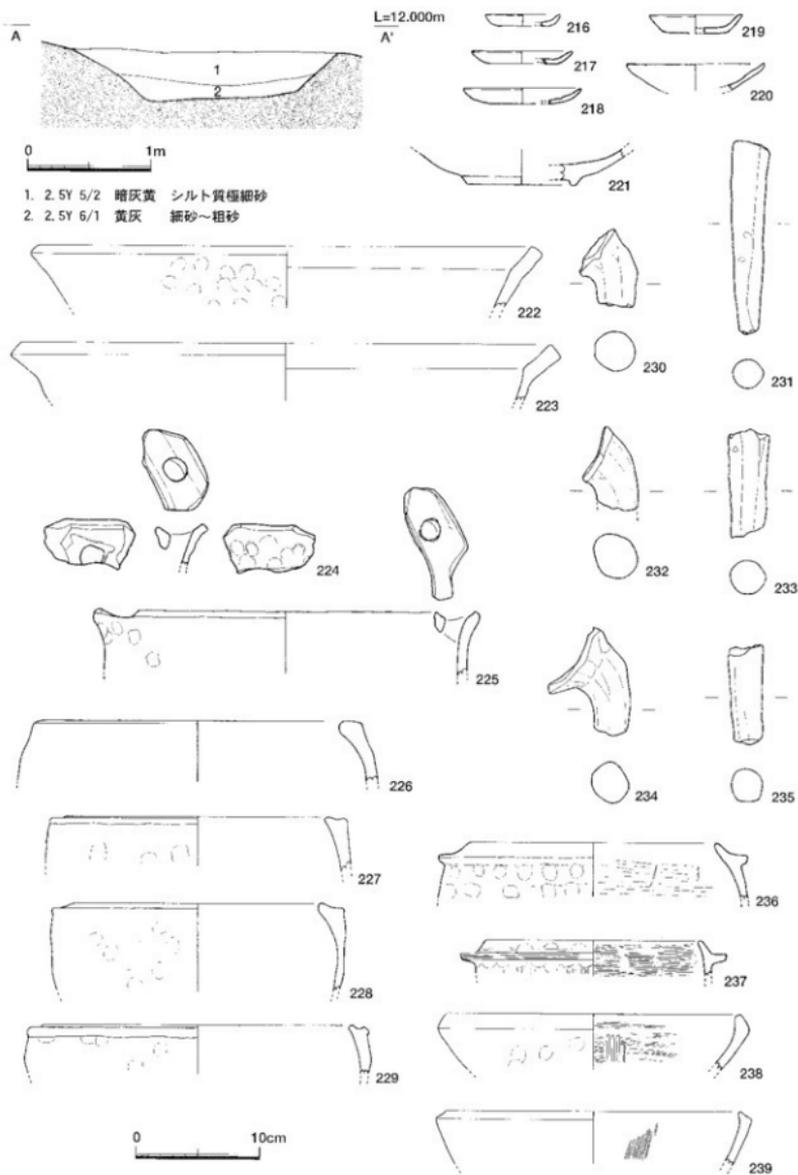
出土遺物は第73図に掲載した。258は備前焼の播鉢で、重ね焼の痕が見られる。259は土師質土器の脚部である。260～265は肥前系陶器の皿である。いずれも高台を無釉とし、砂目が残る。S14は石臼である。出土遺物から17世紀前半の溝と考えられる。

SD61023 (第74・75図)

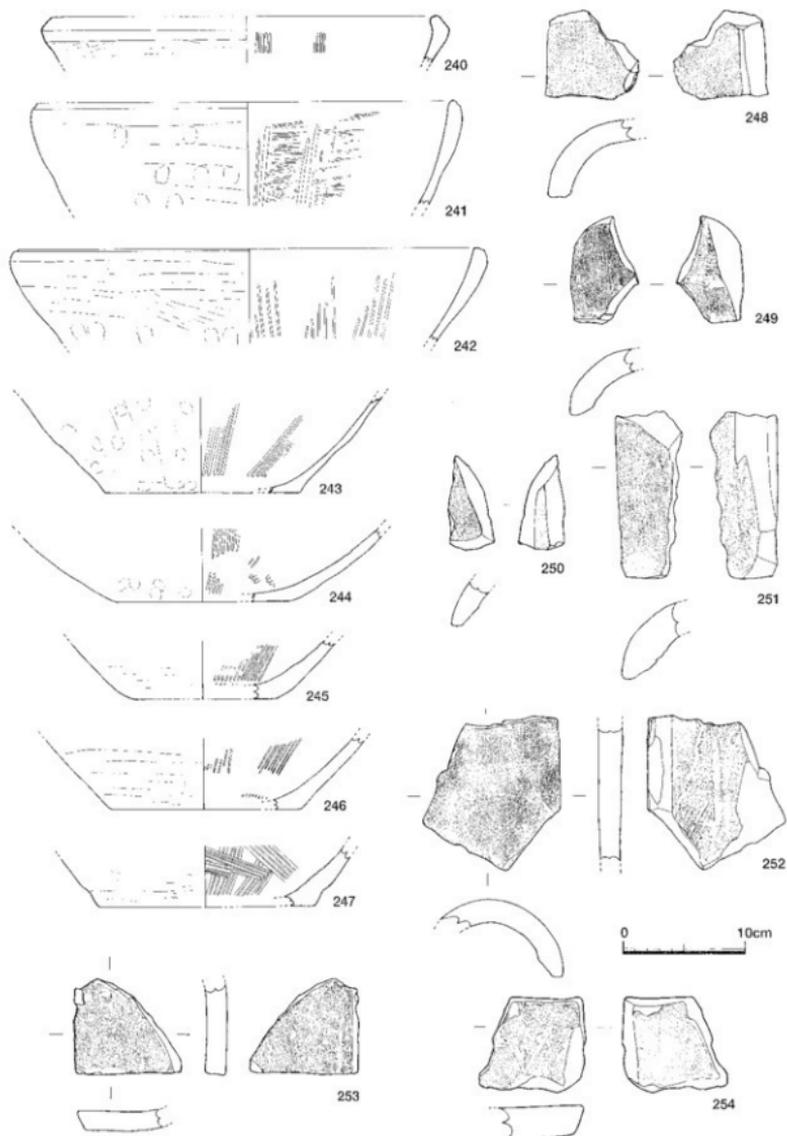
調査区の西部で検出した溝である。北側が調査区外へ延びるため不明であるが、東・南・西の3面をコの字に囲む溝である。最大幅2.5m、深さ40cmを測る溝である。断面形状は2段落ちとなっており、埋土は3層に分層できる。第1層は褐色シルト質極細砂層、第2層は灰黄褐色粘質シルト層、第3層は灰黄褐色粘質シルト層である。溝で囲まれた内部からは柱穴や土坑を多数検出しており、屋敷地を区画する溝



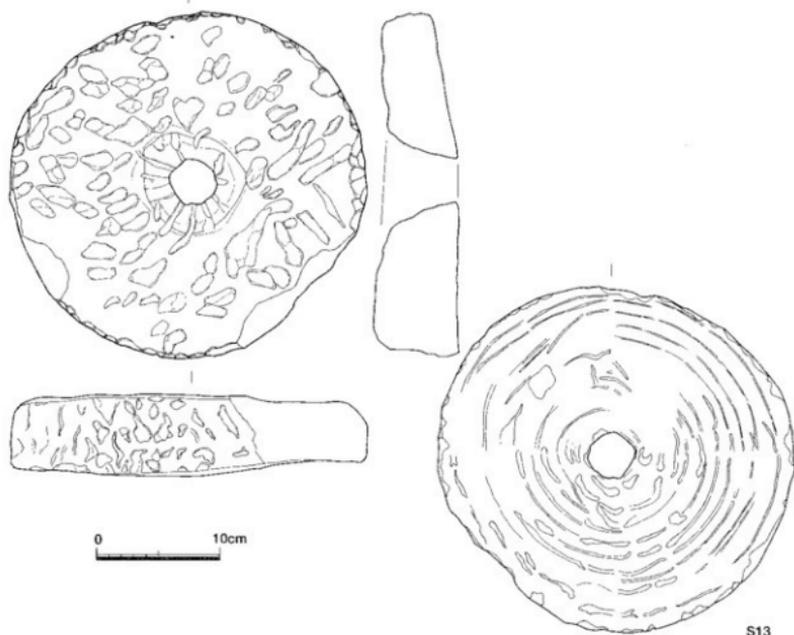
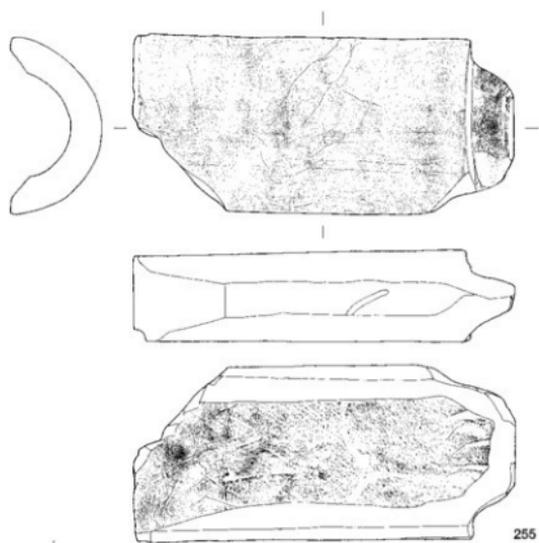
第68図 SD61020平面図



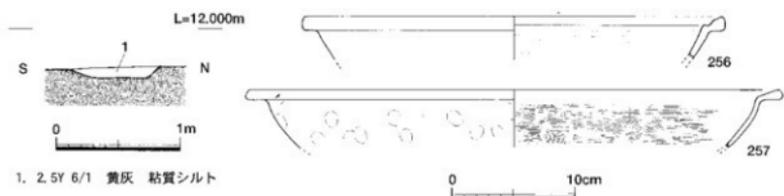
第 69 図 SD61020 断面図及び出土遺物実測図①



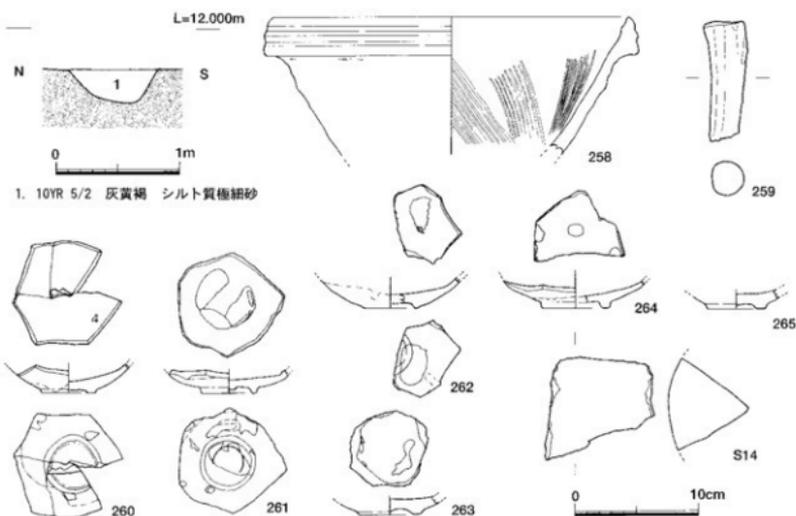
第70图 SD61020 出土遺物実測図②



第 71 图 SD61020 出土遺物実測図③



第72図 SD61021 断面図及び出土遺物実測図



第73図 SD61022 断面図及び出土遺物実測図

と考えられる。屋敷地の範囲は東西 26.5m、南北 11.5m 以上で、溝を含めた範囲は東西 32m、南北 12.5m 以上である。屋敷地内には多数の柱穴が錯綜し、建物を復元し得なかった。しかしながら、屋敷地南西部、中央部、南東部の 3 箇所に柱穴が集中することから、この 3 箇所付近に建物を想定できる。

出土遺物は第 75 図に掲載した。266・267 は土師質土器の鍋である。外面格子目タタキ、内面ヨコハケである。268 は土師質土器の釜で、内外面とも指頭圧である。269 は備前焼の播鉢で、外面に重焼痕が見られる。270～272 は肥前系陶器の皿である。いずれも高台無軸で、270・271 には砂目が見られる。273 は肥前系陶器の鉢である。274 は土師質土器を打ち欠いた円盤である。275 は軒平瓦である。276 は土師質の平瓦で、古代のものと考えられる。K1 は鉄釘である。出土遺物から概ね 17 世紀前半の遺構と考えられる。

SE61001 (第76図)

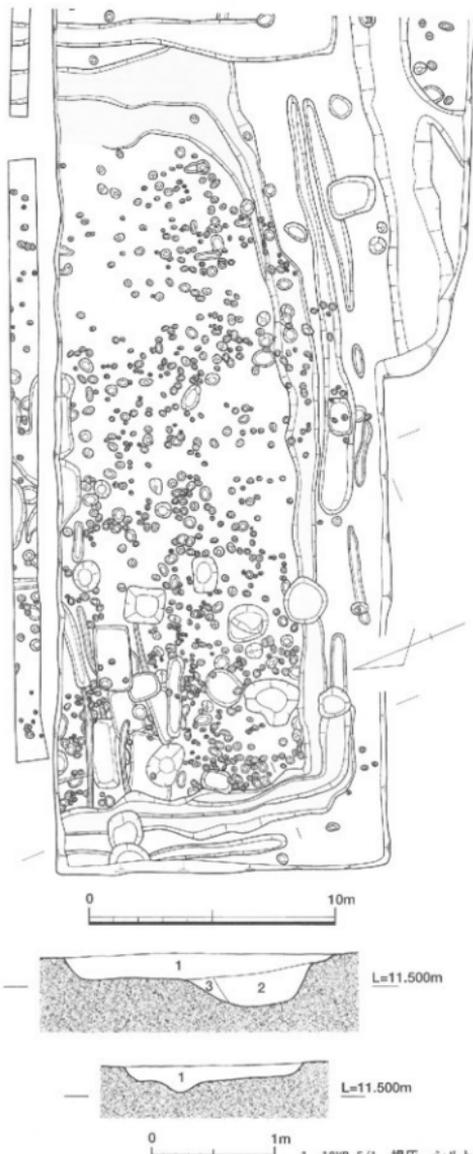
調査区北東部で検出した井戸である。平面形態は楕円形を呈し、長径 4.3m、短径 3.1m を測る。遺構の

上部は井戸廃棄後の最終埋没層と見られ、遺構面より約10cm掘り下げたところで本来の井戸の掘方を検出した。掘方は直径1.65mの円形を呈する。井戸枠は石組みであり、検出面では長径1m、短径90cmの楕円形を呈するが、底面では50cm四方の正方形である。石組みは高さ1.1mまで残っている。井戸枠の石組みに使用された石材は砂岩が多く、一部安山岩が使用されている。また、石積み方法は、基底部の石材は長辺を井戸の中心に向けるものの、2段目以上の石は小口を井戸の中心に向けて積まれている。井戸の断面形態は逆台形を呈し、埋土は井戸枠内4層と掘り部分、そして廃棄後の最終埋没層1層の計6層に分層できる。第1層は最終埋没層で、褐灰色シルト質極細砂層である。第2層は暗灰黄色細砂～粗砂層、第3層は黄灰色粘質シルト層、第4層は暗灰黄色細砂～粗砂層で、この第2～4層には数cm～20cm程度の礫が多く混じるほか、井戸枠上部の石材が転落していた。第5層は黄灰色シルト質粘土層である。第6層とした掘り方は灰白色の細砂～粗砂層である。断面の状況から井戸は第5層堆積後に上部石組みを破却され、さらに礫によって上部を埋め戻されたと考えられる。

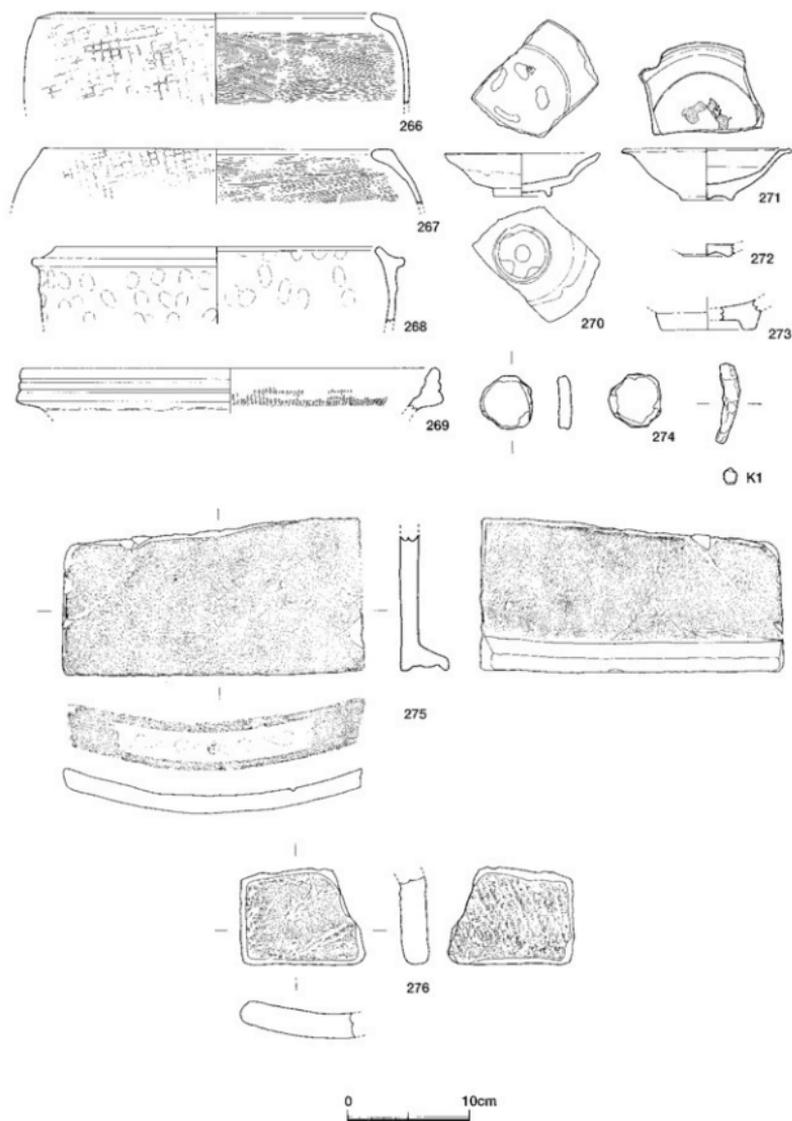
遺物は人工的な埋め戻しの土と考えられる第2～4層から出土しており、第76図に掲載した。277は土師質土器の鍋である。内外面ともヨコハケである。278・279は土師質土器の脚部である。280は産地不明の陶器で、高台無軸としている。出土遺物から17世紀頃に井戸が埋め戻されたことがうかがえる。

SE61002 (第77図)

調査区東部で検出した井戸である。SD61012掘削時に下部から検出したもので、井戸上部はかなり削平されている。平面形態は直径1.9mの円形を呈する。井戸枠は石組みで



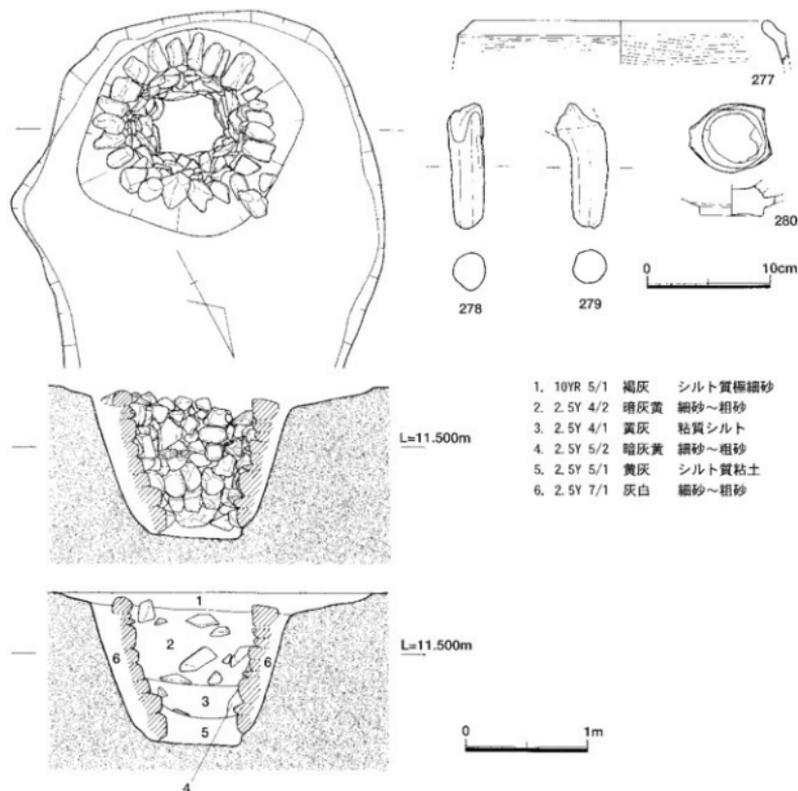
第74図 SD61023 平・断面図



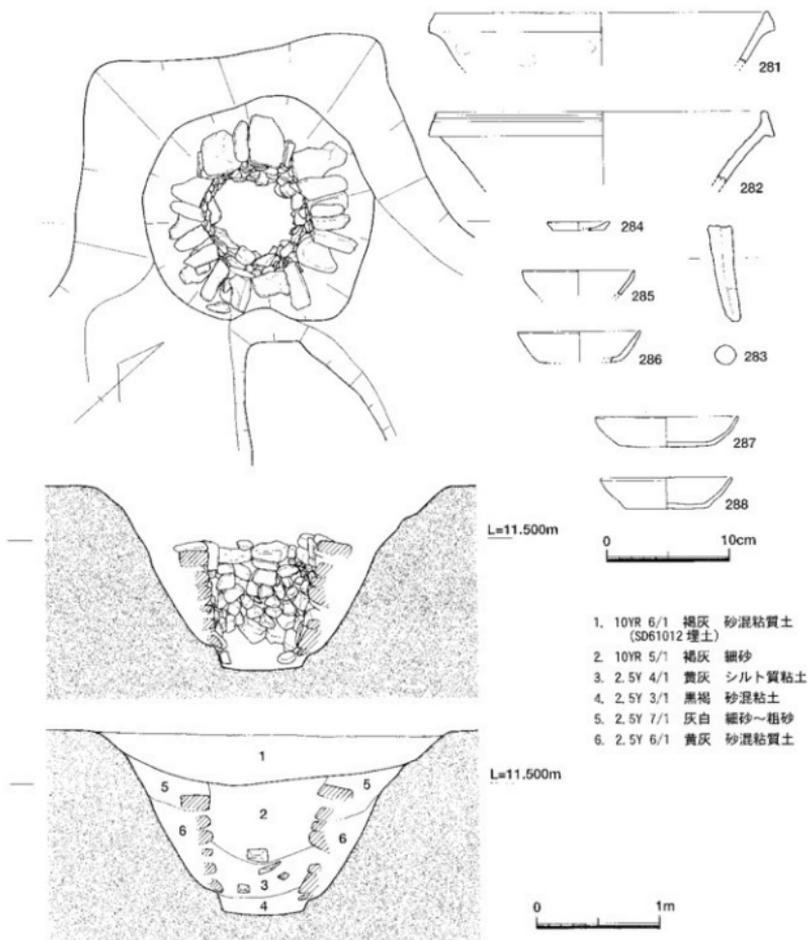
第 75 图 S061023 出土遗物实测图

あり、検出面では直径90cmの円形を呈するが、底面では長径70cm、短径50cmの楕円形である。石組みは高さ1mまで残っている。井戸枠の石積みに使用された石材は砂岩が多く、一部安山岩が使用されており、小口を井戸の中心に向けて積まれている。井戸の断面形態は逆台形を呈し、埋土は井戸枠内3層と掘り部分2層の計5層に分層できる。井戸枠内の上層は褐灰色の砂層、中層は黄灰色シルト質粘土層で、両層には井戸枠上部の石材が転落していた。下層は黒褐色砂泥粘上層である。掘りの上層は灰白色細砂～粗砂層、下層は黄灰色砂泥粘質上層である。

遺物は下層から出土しており、第77図に掲載した。281・282は須恵器のこね鉢である。283は土師質土器の脚部である。284は土師器の皿である。285～288は土師器の坏で、いずれも井戸底より出土したものである。出土遺物から16世紀の遺構と考えられる。



第76図 SE61001 平・断面図及び出土遺物実測図



第 77 図 SE61002 平・断面図及び出土遺物実測図

SK61005 (第 78 図)

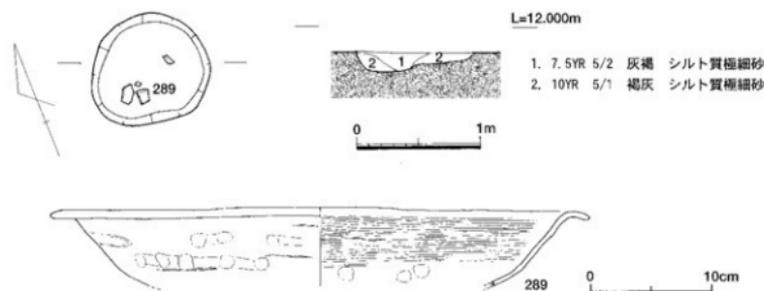
調査区東部で SD61002 に囲まれた屋敷地内北東部で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し、直径 95cm、深さ 15cm を測る。断面形態は逆台形で、埋土は 2 層に分層できる。上層は灰褐色シルト質極細砂層、下層は褐灰色シルト質極細砂層である。埋土中には一辺 20cm 程度の角礫が数点含まれていた。

出土遺物は第 78 図に掲載した。289 は上師質土器の焙烙である。外面指頭圧、内面ヨコハケのち指頭圧である。口縁部の屈曲はなめらかであることから 17 世紀後半から 18 世紀前半のものと考えられる。屋敷地を区画する SD61002 は 17 世紀前半までに埋没することから屋敷に伴う可能性は低い。

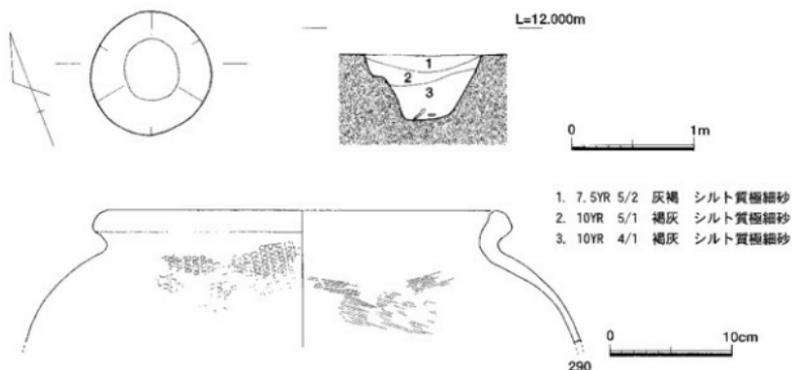
SK61011 (第79図)

調査区東部でSD61002に囲まれた屋敷地内中央部で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し、直径1m、深さ42cmを測る。断面形態は西側の一部が二段落ちになる他は逆台形で、埋土は3層に分層できる。上層は灰褐色シルト質極細砂層、中・下層は褐灰色シルト質極細砂層である。

出土遺物は第79図に掲載した。290は土師質土器の甕である。遺構底面から1点のみ出土した。外面格子目タタキ、内面ヨコハケである。口縁部は断面矩形に肥厚しており、15世紀前半のものと思われる。屋敷地を区画するSD61002の出土遺物については17世紀前半のものしか見られないが、屋敷地が15世紀代から存在した可能性も否定できない。



第78図 SK61005 平・断面図及び出土遺物実測図



第79図 SK61011 平・断面図及び出土遺物実測図

SK61012 (第80・81図)

調査区東部でSD61002に囲まれた屋敷地内中央部で検出した土坑である。平面形態は長方形を呈し、長辺3.25m、短辺1.35m、深さ30cmを測る。遺構底面は凹凸が著しく、断面形状は不整形で、埋土は2層に分層できる。上層は灰黄褐色粘質シルト層で遺構上部に薄く堆積しており、下層は褐灰色粘質シルト層で

遺構の窪みに堆積している。遺構北東隅には最大 25cm 角程度の礫が集中して見られた。

出土遺物は第 80・81 図に掲載した。いずれも礫が集中する部分から出土している。S15 は柱状片刃石斧である。弥生時代のもので、混入品である。S16 は石臼である。S17 は石製の竈である。円筒形の焼成部分の全面に方形の焚き口部分がついている。焼成部分の内面にはスガが付着している。出土遺物は石器のみで土器片は 1 点も出土しておらず、詳細な遺構の時期は不明である。

SK61020 (第 82 図)

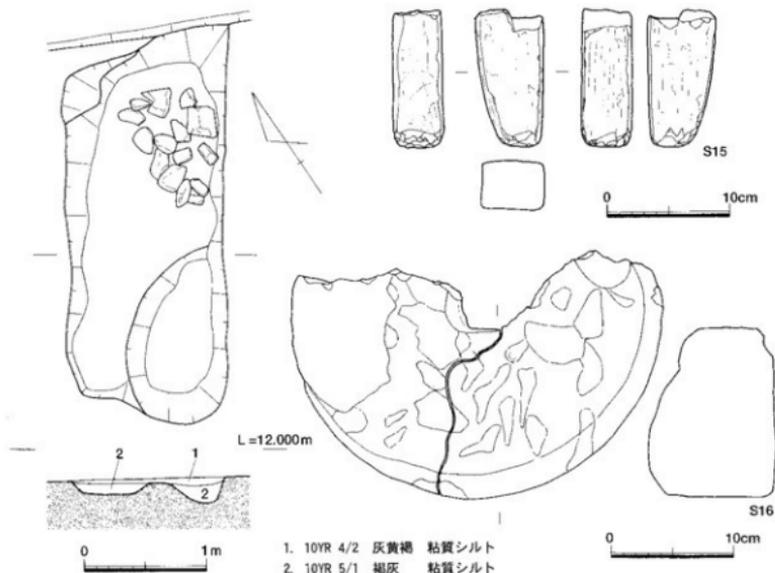
調査区北東部で検出した土坑である。北側が調査区外に延びるが、平面形態は楕円形を呈すると考えられ、長径 85cm、短径 30cm 以上、深さ 6cm を測る。断面形態は逆台形と考えられ、埋土は灰黄褐色シルト質極細砂層の単層である。

出土遺物は第 82 図に掲載した。291 は土師質土器の脚部である。292 は土師器の坏である。出土遺物から 16 世紀の遺構と考えられる。

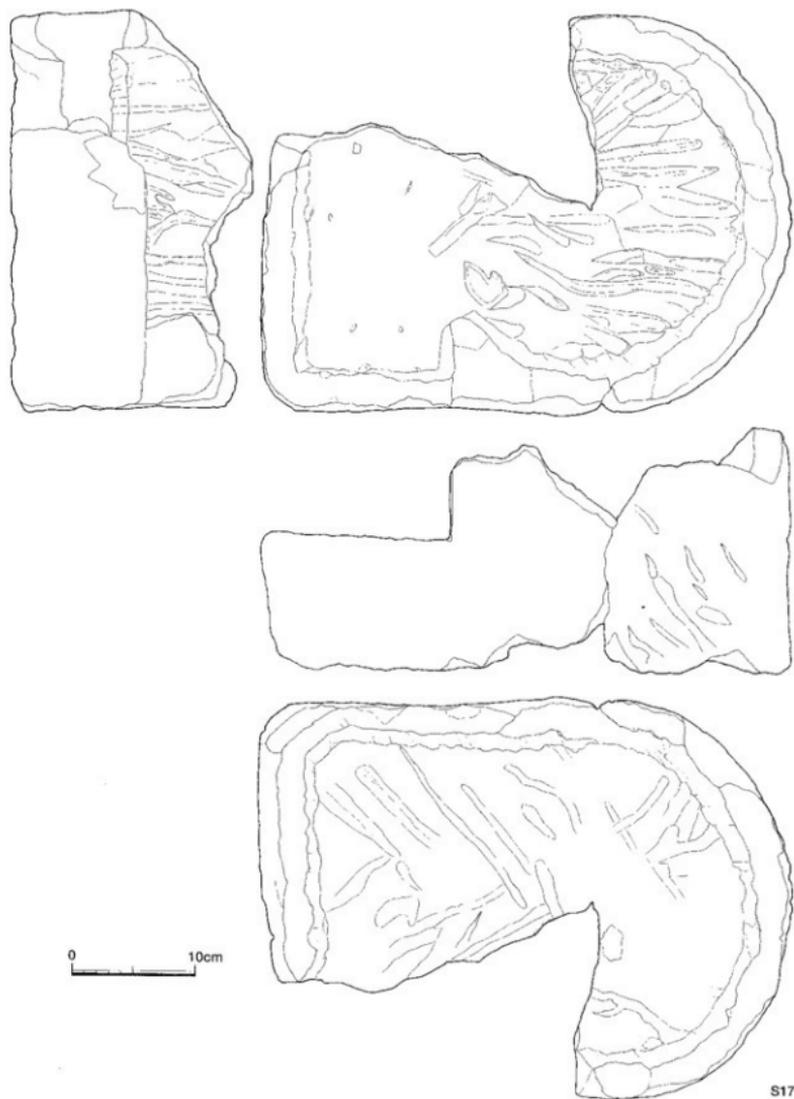
SK61021 (第 83 図)

調査区北東部で検出した土坑である。一部攪乱を受けているが、平面形態は楕円形を呈し、長径 85cm、短径 70cm、深さ 28cm を測る。断面はレンズ状の堆積を示し、埋土は 3 層に分層できる。上層は灰黄褐色粘質シルト層、中層は灰黄褐色シルト質極細砂層、下層は褐灰色シルト質極細砂層である。

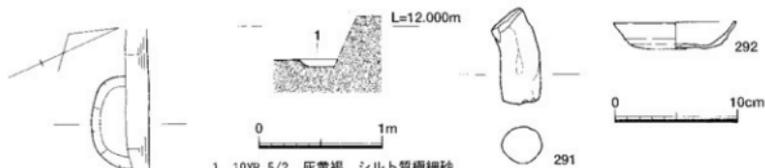
出土遺物は第 83 図に掲載した。293～297 は肥前系陶器の皿である。293～296 までは高台無軸とし、296 の見込みには胎土目が残る。297 は内面刷毛目文様で全面施釉され、砂目が残る。298 は土師質土器の播鉢である。出土遺物から 17 世紀前半頃の遺構と考えられる。



第 80 図 SK61012 平・断面図及び出土遺物実測図

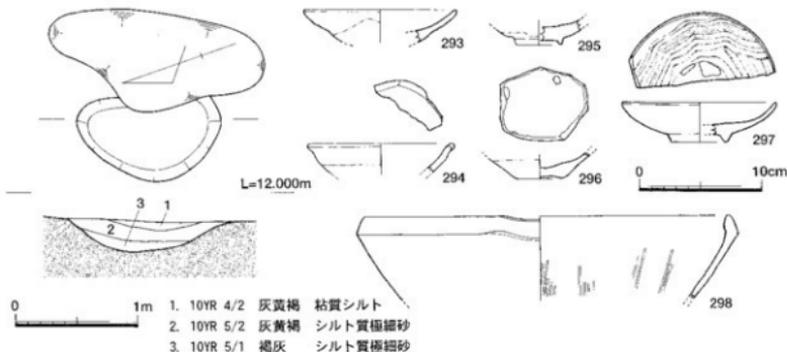


第81图 SK61012出土遗物实测图②



1. 10YR 5/2 灰黄褐 シルト質極細砂

第82図 SK61020 平・断面図及び出土遺物実測図



1. 10YR 4/2 灰黄褐 粘質シルト
2. 10YR 5/2 灰黄褐 シルト質極細砂
3. 10YR 5/1 褐灰 シルト質極細砂

第83図 SK61021 平・断面図及び出土遺物実測図

SK61033 (第84図)

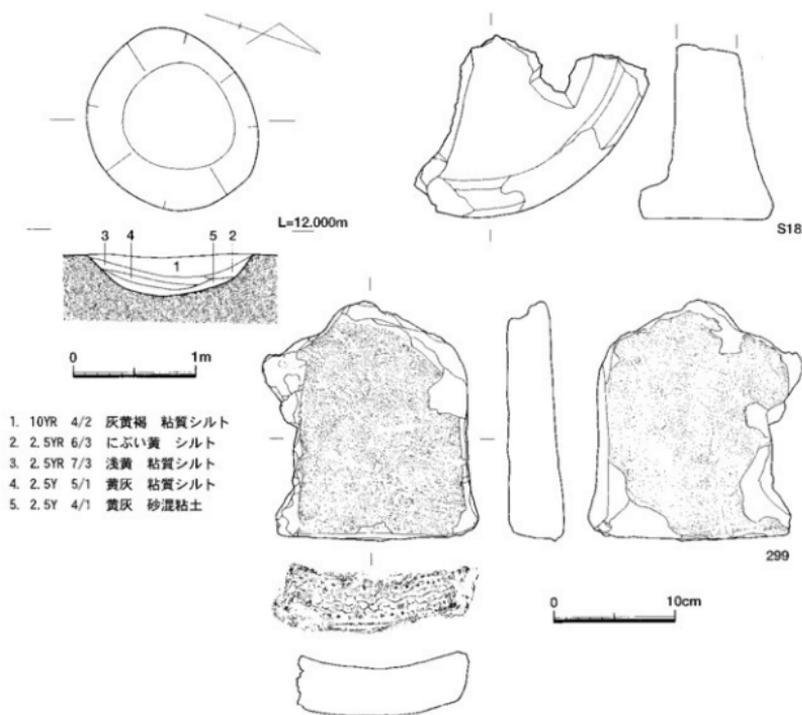
調査区東部でSD61002に囲まれた屋敷地内西部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径1.5m、短径1.35m、深さ32cmを測る。断面はレンズ状の堆積を示し、埋土は5層に分層できる。第1層は灰黄褐色粘質シルト層、第2層はにぶい黄色シルト層、第3層は浅黄色粘質シルト層、第4層は黄灰色粘質シルト層、第5層は黄灰色砂混粘土層である。

出土遺物は第84図に掲載した。S18は石臼である。299は土師質の軒平瓦である。凹面には布目の痕跡が見られ、凸面は板ナデで調整されている。直線頸の瓦当面の均整唐草文は退化して樹木状になったもので、内外区の区別を設けず上下脇に珠文を配している。坂田廃寺や平安中期に同寺に瓦を供給していたとされる片山池1号窯跡出土瓦と同范である。坂田廃寺や片山池1号窯跡からは直線距離にして1.5km以上離れており、偶然混入したとは考えられず、意図的に持ち込まれた可能性が有る。遺構の時期は供伴遺物が無く不明であり、屋敷地との関連も不明である。

SK61035 (第85図)

調査区東部でSD61002を切った状態で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径2.35m、短径1.95m、深さ35cmを測る。断面はレンズ状の堆積を示し、埋土は2層に分層できる。第1層は灰黄褐色粘質シルト層、第2層は褐灰色細砂層である。

出土遺物は第85図に掲載した。300は瀬戸美濃系の陶胎染付碗である。301は土師質土器の描鉢の片口部分である。302は土師質土器の蓋である。303・304は土師質土器の焔炉である。円筒形の器形で、窓が開いており、口縁部外面に押圧突帯を施し、内面はヨコハケである。305・306は堞焼の描鉢である。307・308は土師質土器の焙烙である。309は土師質土器の甕である。出土遺物から19世紀の遺構と考えられる。



第 84 図 SK61033 平・断面図及び出土遺物実測図

SK61079 (第 86 図)

調査区西部で SD61023 に囲まれた屋敷地内南西部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長さ 1.65m、短径 1.5m、深さ 50cm を測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土は 2 層に分層できる。上層は黄灰色粘質シルト層、下層は暗灰黄色シルト質極細砂層である。

出土遺物は第 86 図に掲載した。310 は土師質土器の鍋である。311 は土師質土器の播鉢である。内外面ともヨコハケである。312 は土師質の丸瓦で古代のものと考えられる。313 は瓦質の丸瓦である。凹面は布目と吊紐痕が残り、凸面は細かい板ナデで調整されている。出土遺物から概ね 16 世紀頃の遺構と考えられ、屋敷地に伴う可能性が有る。

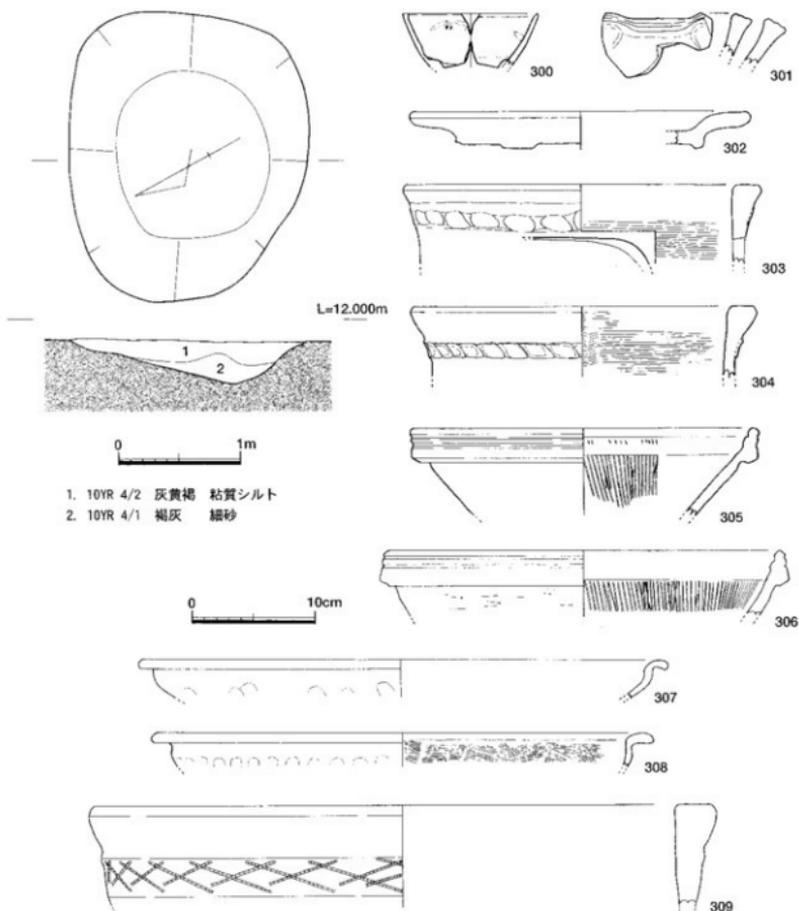
SK61081 (第 87 図)

調査区西部で屋敷地を区画すると考えられる SD61023 を切った状態で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し、直径 1.2m、深さ 30cm を測る。断面形態は半円形を呈し、埋土は褐灰色シルト質極細砂層の単層である。

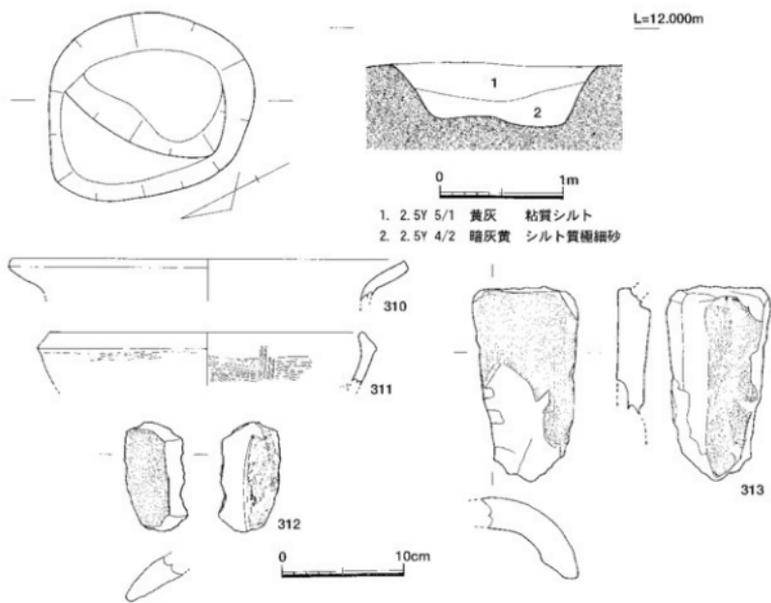
出土遺物は第 87 図に掲載した。314・315 は肥前系陶器の皿である。314 は口縁部で屈曲し鈎縁状になっている。315 は高台無軸とし、内面に砂目や重ね焼き痕が残る。出土遺物から 17 世紀後半の遺構と考えられ、屋敷地の廃絶が 17 世紀前半までに限定されることがうかがえる。

SK61085 (第 88 図)

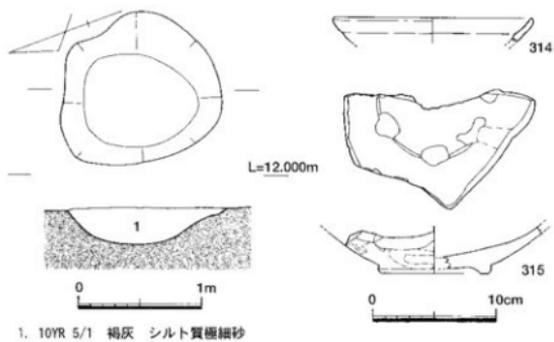
調査区西端で S061023 に囲まれた屋敷地内西部で検出した土坑である。南側の一部を他の遺構に切られるが、平面形態は楕円形を呈し、長径 1.9m、短径 1.2m、深さ 32cm を測る。断面形態は半円形を呈し、埋



第 85 図 SK61035 平・断面図及び出土遺物実測図



第 86 図 SK61079 平・断面図及び出土遺物実測図



第 87 図 SK61081 平・断面図及び出土遺物実測図

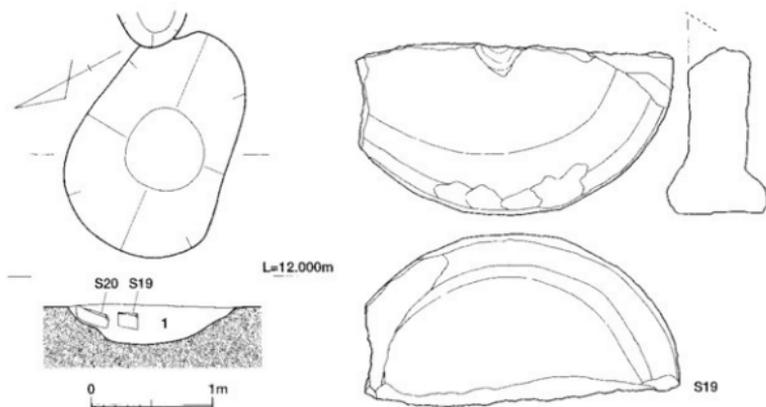
土は褐灰色シルト質極細砂層の単層である。

出土遺物は第 88 図に掲載した。S19・S20 とも石臼である。上器片は出土しておらず、詳細な時期は不明である。

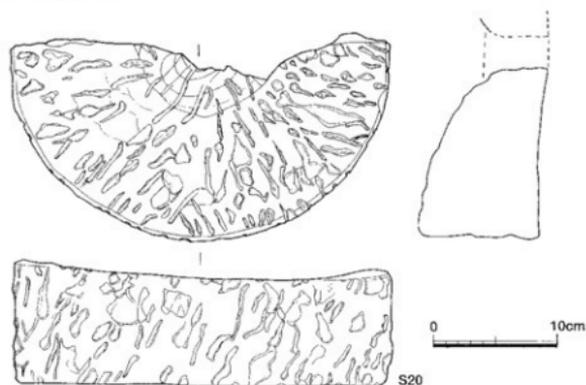
SK61086 (第 89 図)

調査区西端で屋敷地を区画すると考えられる SD61023 を切った状態で検出した土坑である。西側の一部を他の遺構に切られるが、平面形態は隅丸の長方形を呈し、長辺 1.15m、短辺 1.3m、深さ 30cm を測る。断面形態は半円形を呈し、埋土は褐灰色シルト質極細砂層の単層である。

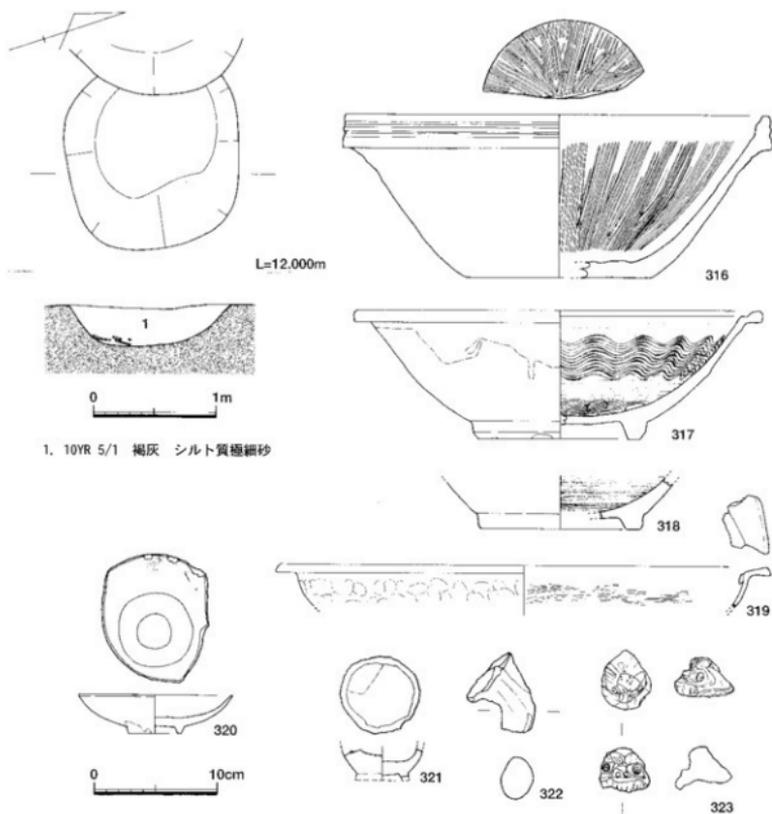
出土遺物は第 89 図に掲載した。316 は備前焼の播鉢である。317 は肥前系陶器の鉢である。高台無軸で、内外面に砂目が残る。内面は刷毛目で、銅緑釉の掛流しが見られる。318 も肥前系陶器の鉢である。外面無軸で内面刷毛目である。319 は土師質土器の焙烙である。外面指頭庄、内面ヨコハケで内耳がつく。320



1. 10YR 6/1 褐灰シルト質極細砂



第 88 図 SK61085 平・断面図及び出土遺物実測図



1. 10YR 5/1 褐灰 シルト質極細砂

第 89 図 SK61086 平・断面図及び出土遺物実測図

は肥前系磁器の皿である。高台無軸で、見込みには蛇ノ目軸ハギが見られる。321は瀬戸美濃系陶器の瓶である。内面無軸である。322は土師質土器の脚部である。323は瓦質土器である。獣頭を模したものであり、火鉢等の装飾の可能性が考えられる。出土遺物から18世紀の遺構と考えられる。

SK61094 (第90図)

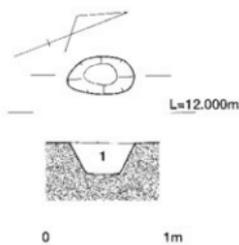
調査区西部でSD61023に囲まれた屋敷地内中央部で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径55cm、短径32cm、深さ25cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土は黄灰色粘質シルトの単層である。

出土遺物は第90図に掲載した324は上師器の坏のみである。概ね16世紀の遺構と考えられ、屋敷地に伴うものと考えられる。

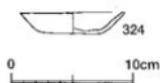
SK61112 (第91図)

調査区西部でSD61023に囲まれた屋敷地内中央部で検出した土坑である。北側が調査区外に延びるため平面形態は不明であるが、長辺3m、短径95cm、深さ15cmを測る。断面形態は浅い逆台形を呈し、埋土は灰黄褐色細砂層の単層である。

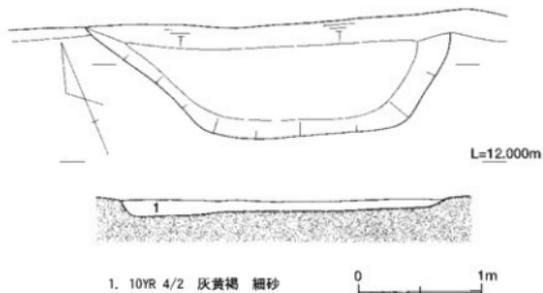
出土遺物は第91図に掲載した輸入磁器1点のみで、詳細な時期は不明である。



1. 2.5Y 5/1 黄灰 粘質シルト



第90図 SK61094 平・断面図
及び出土遺物実測図



1. 10YR 4/2 灰黄褐 細砂

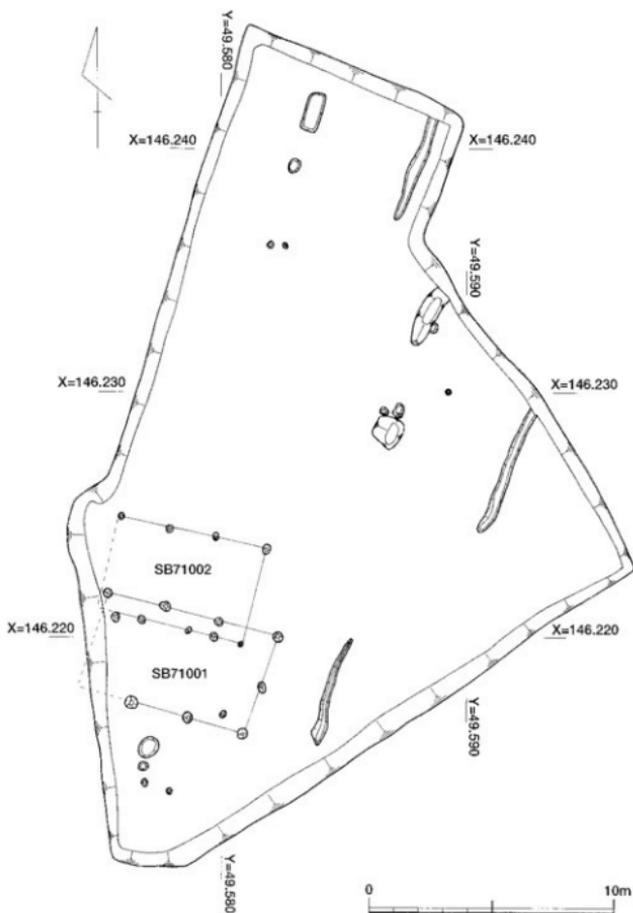


第91図 SK61122 平・断面図及び出土遺物実測図

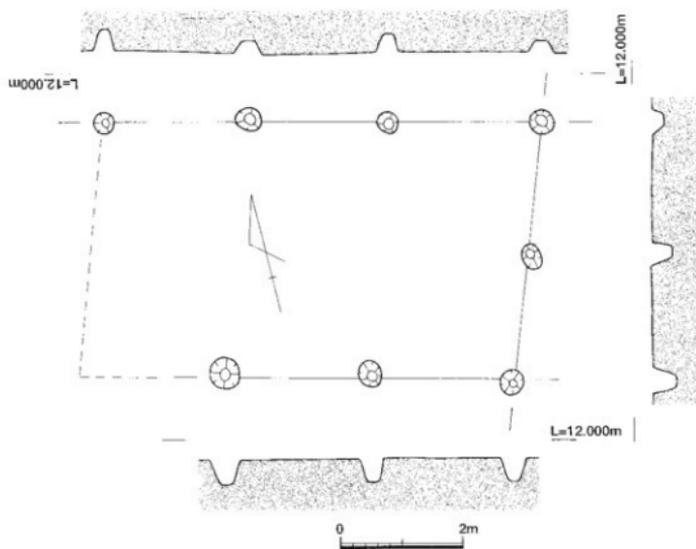
第7節 VII区の調査

調査区の概要と基本層序 (第92図)

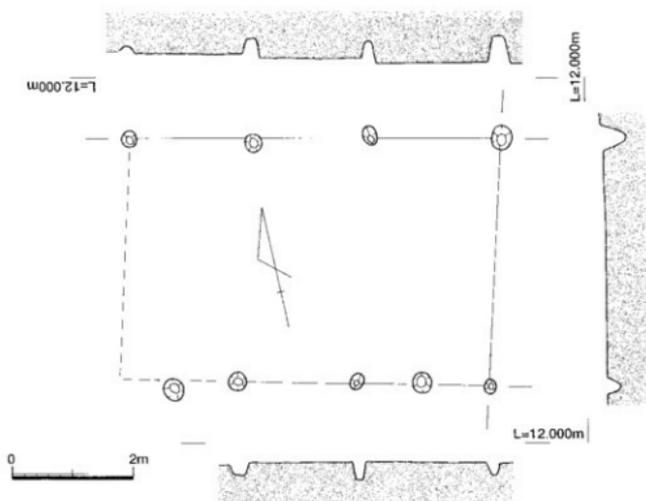
VII区は調査地の東端にあたる。現代の客土層約80cmを取り除くと地山の淡黄色シルト～細砂層が見られる。遺構面はこの地山上面の1面のみで、削平が著しく、遺構は散漫で、掘立柱建物2棟、溝3条等を検出したにすぎない。遺物は出土しておらず、遺構面の時期は不明であるが、隣接するVI区の遺構面と同一面であることから、中世末～近世の遺構面と考えられる。



第92図 VII区平面図



第 93 图 SB71001 平・断面图



第 94 图 SB71002 平・断面图

SB71001 (第 93 図)

調査区の南部で検出した遺構である。南西隅の柱穴は調査区外のため検出できていないが、東西 3 間 (3.6m)、南北 2 間 (2.1m)、床面積 7.56 m²で、主軸方位は N - 76° - W である。東西方向の柱間は 1.2m、南北方向の柱間は 1.05m でほぼ均等である。掘立柱建物を構成する柱穴は直径 15 ~ 25cm の円形で、深さは 10 ~ 20cm を測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SB71002 (第 94 図)

調査区の南部で検出した遺構である。南西隅の柱穴は調査区外のため検出できていないが、東西 3 間 (3.05m)、南北 1 間 (2m)、床面積 6.1 m²で、主軸方位は N - 76° - W である。東西方向の柱間は 1m 前後でほぼ均等である。掘立柱建物を構成する柱穴は直径 10 ~ 15cm の円形で、深さは 5 ~ 20cm を測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

第4章 まとめ

第1節 遺構の変遷について

西ハゼ土居遺跡の発掘調査では弥生時代から近世に至るまでの遺構・遺物を検出した。調査地は東西に分断されており、西半は弥生時代～中世前半、東半は中世末～近世の遺構を多く検出した。各遺構の時期は、概ね弥生時代前期、弥生時代中期後半～後期初頭、弥生時代終末期～古墳時代初頭、古墳時代末～古代、古代末～中世前半、中世末～近世初頭、近世の7時期に大別できる。以下、その変遷を述べていきたい。なお、西側に隣接する松並・中所遺跡では既に遺構の変遷が検討されており（松本 2000）、これを参照し、同遺跡との対応関係も考えていきたい。

弥生時代前期（第95図）

当該期の遺構は見られず、調査区西端で検出した自然河川NR01が該当すると考えられる。NR01は隣接する松並・中所遺跡VII区ASR01から続くもので、同遺跡では弥生時代前期前半末の河川としている。西ハゼ土居遺跡で出土した遺物はわずかで時期決定が難しいが、柳摺文を施した甕の小片が見られることから、埋没は中期初頭まで下る可能性が考えられる。この自然河川に切られた状態で噴砂を検出しており、当該期以前に大地震があったことがうかがえる。

なお、松並・中所遺跡ではIV区SD02で区画された内部のみで当該期の遺構を検出していることから、IV区SD02を環濠の可能性がある溝としてとらえている。西ハゼ土居遺跡において弥生時代前期の遺構が見られないことは、同説を補強するものである。

弥生時代中期後半～後期初頭（第96図）

当該期の遺構としては、I区全体が自然河川の最終埋没層として認識されており、その上面において小区両水出21筆を検出している。堆積状況からI区全体に広がる自然河川最終埋没層は松並・中所遺跡III・IV区SR01と同一河川である可能性が高い。なお、松並・中所遺跡では畦畔は検出されていないが、プラント分析によりSR01上層において5,800個/gの稲のプラントオパールが検出されており、調査地ないし近傍で稲作が行われたことが検証されている。当該期には自然河川が機能しなくなり、湿地状になったSR01上面の広範囲において稲作が行われたことが考えられる。

なお、当該期の居住遺構は西ハゼ土居遺跡では全く見られず、松並・中所遺跡で検出されており、集落域はSR01の北西岸に位置するものと考えられる。

弥生時代終末期～古墳時代初頭（第97図）

当該期も遺構の密度は少なくNR02及びNR03、NR05、NR06の3本の旧河道がみられ、その旧河道の間のわずかな微高地においてSK32001、SK32002等の大型の土坑が掘削されているに過ぎない。なお、I区西端で検出した掘立建物SB12001～SB12006については、弥生終末期～中世前半のいずれかの時代の建物である。埋土の状況や建物主軸は後述する中世前半のものとは全く異なり、遺構周辺では古墳時代末～古代の遺物が出土していないことから、とりあえず、当該期のものとした。松並・中所遺跡においては弥生中期末以降中世前半段階まで遺構が見られなくなる。

なお、当該期には遺跡の北西方向に鶴尾神社1号墳をはじめ、積石塚が多数築造されている。当該期の集落域は近隣では未発見であり、その造営集団の集落の解明が待たれる。

古墳時代末～古代（第98図）

当該期も自然河川の埋土から土器が出土しているに過ぎない。NR04及びNR02の埋土から多量の土器が出土しており、当該期の埋没時期が考えられる。NR02及びNR04の延長部分と考えられる松並・中所遺跡VII区SR03は弥生時代中期末とされているが、当該期まで下る可能性が考えられる。また、遺物は出土していないが、NR04と同一面で検出したNR07も当該期のものと推定できる。居住遺構に関しては、西ハゼ土居遺跡、松並・中所遺跡とも検出していない。

古代末～中世初頭（第99図）

Ⅲ区においてSB31001～SB31011までの11棟の掘立柱建物やSK31001等の上坑を検出した。特にⅢ区西端に集中している。建物は切合っており、数時期に細分できると考えられるが、遺物はほとんど出土しておらず、時期決定は困難である。

松並・中所遺跡では12世紀後半から13世紀中葉にかけて4時期に細分される遺構が検出されており、西ハゼ土居遺跡の遺構もこれとほぼ同時期のものと考えられる。特に13世紀前葉段階では遺構密度が最も高くなっており、屋敷地を区画する溝も確認されている。なお、中世の遺構は13世紀中葉で廃絶し、以後近世まで遺構は見られない。

中世末～近世初頭（第100図）

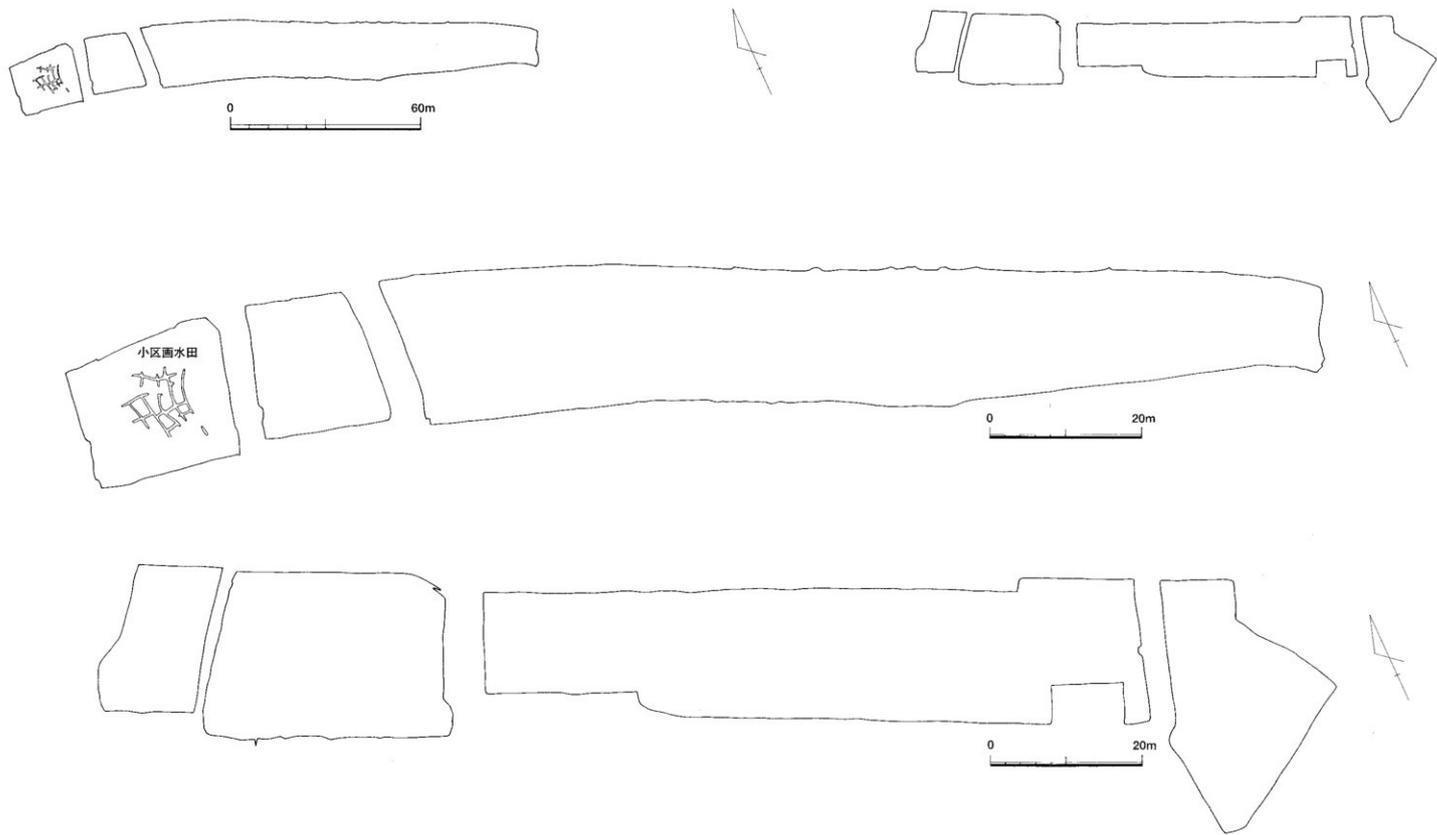
当該期の遺構は遺跡の東半に集中する。溝で囲まれた屋敷地を3区画検出した。正方形の屋敷地と仮定するとSD61020で囲まれた屋敷地は44m四方、SD61023で囲まれた屋敷地は33m四方、SD61002で囲まれた屋敷地は22m四方と推定される。いずれの屋敷地も17世紀前半に廃絶している。この他、SE51001、SE61001、SE61002の3基の石組井戸や土坑を多数検出した。

近世（第101図）

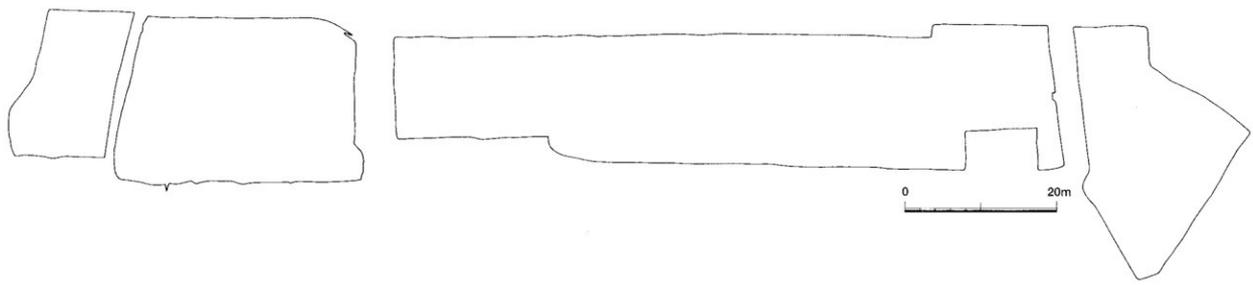
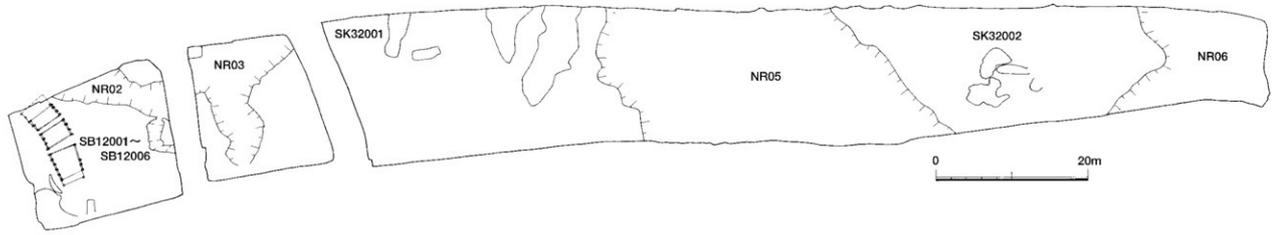
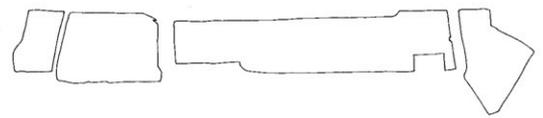
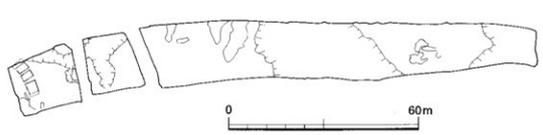
屋敷地廃絶後も近世の遺構は遺跡東半を中心に土坑・溝等が検出されている。遺構の時期は18世紀後半～19世紀のものが多く見られる。なお、Ⅳ・Ⅴ区には自然河川NR08・09も見られる。



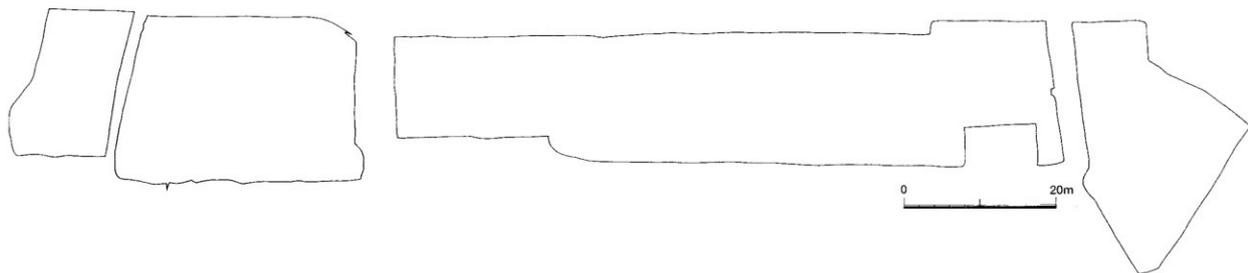
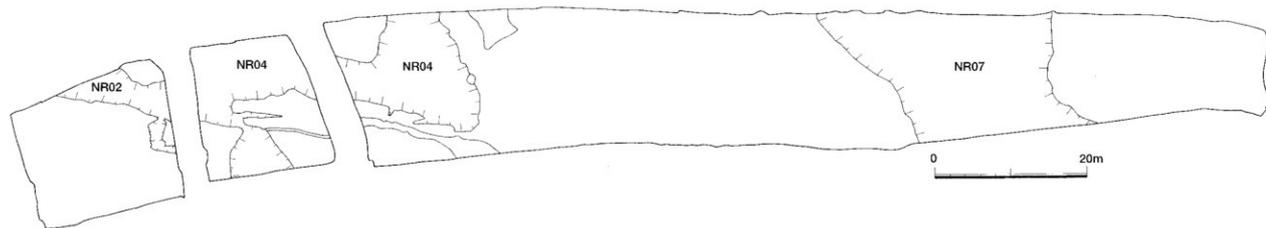
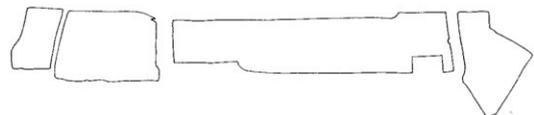
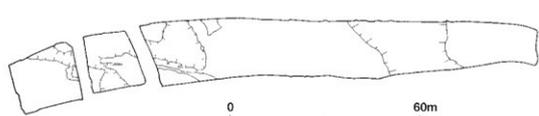
第95図 弥生時代前期の主要遺構



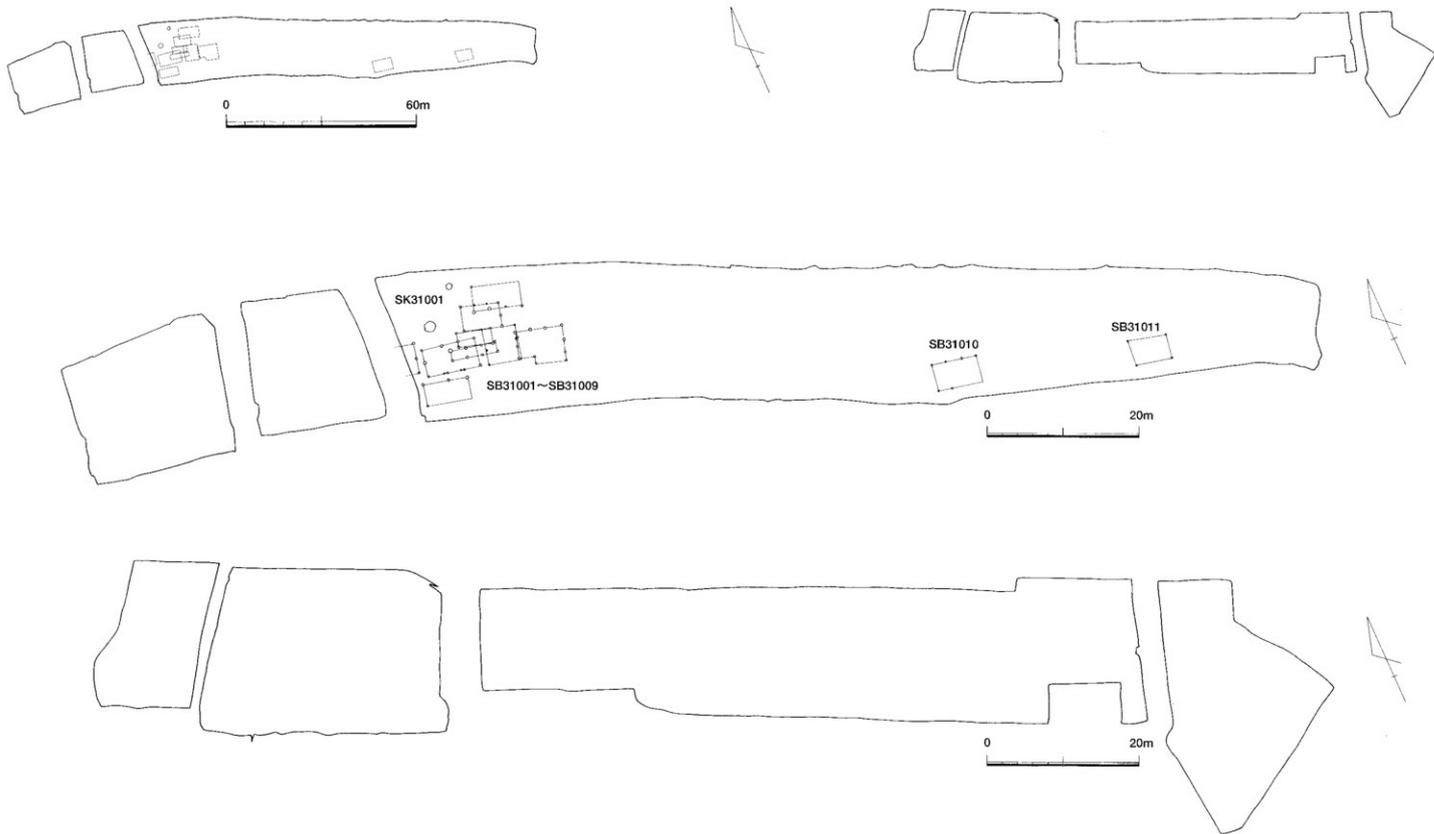
第96図 弥生時代中期後半～後期初頭の主要遺構



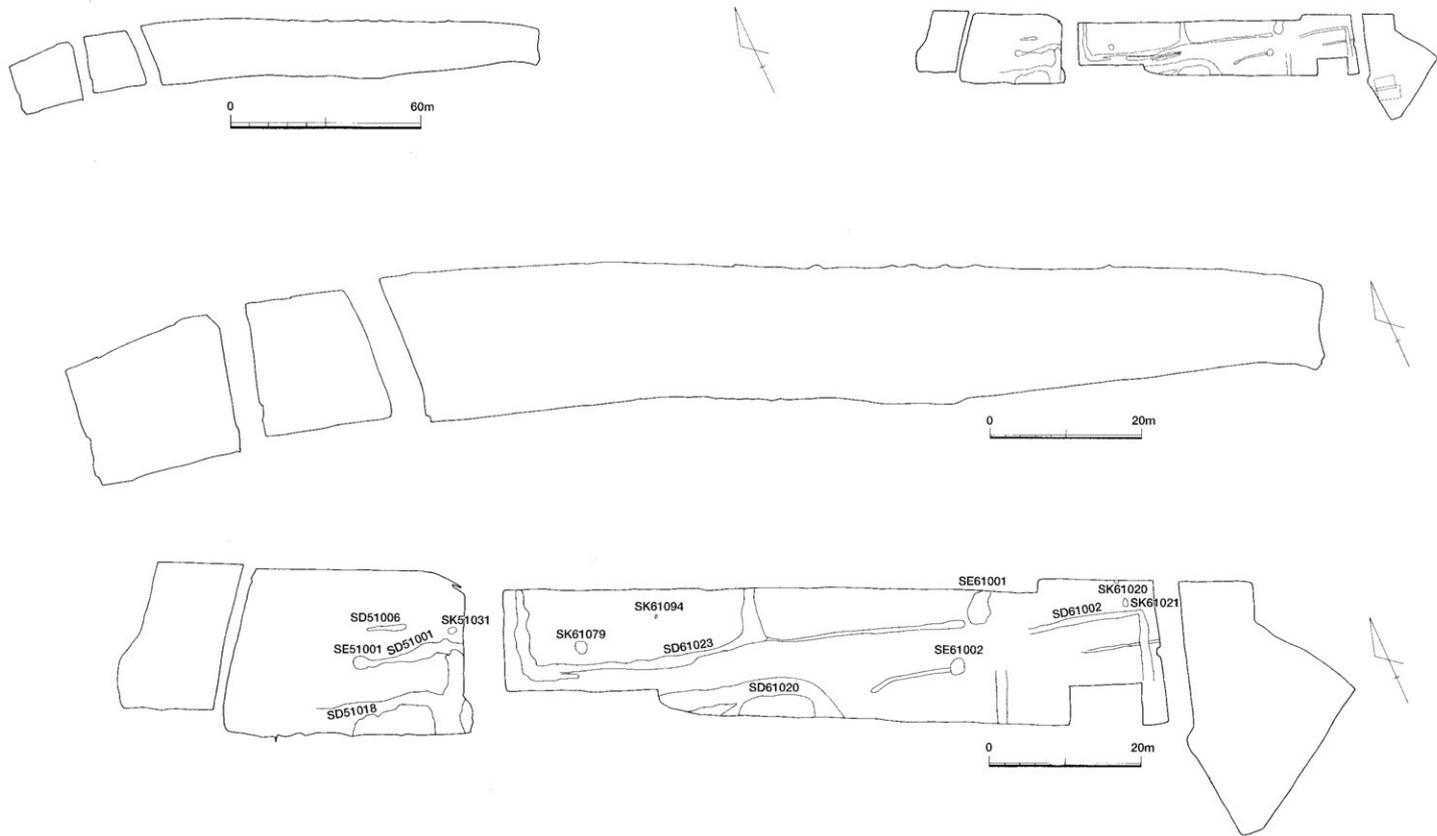
第 97 図 弥生時代終末期～古墳時代初頭の主要遺構



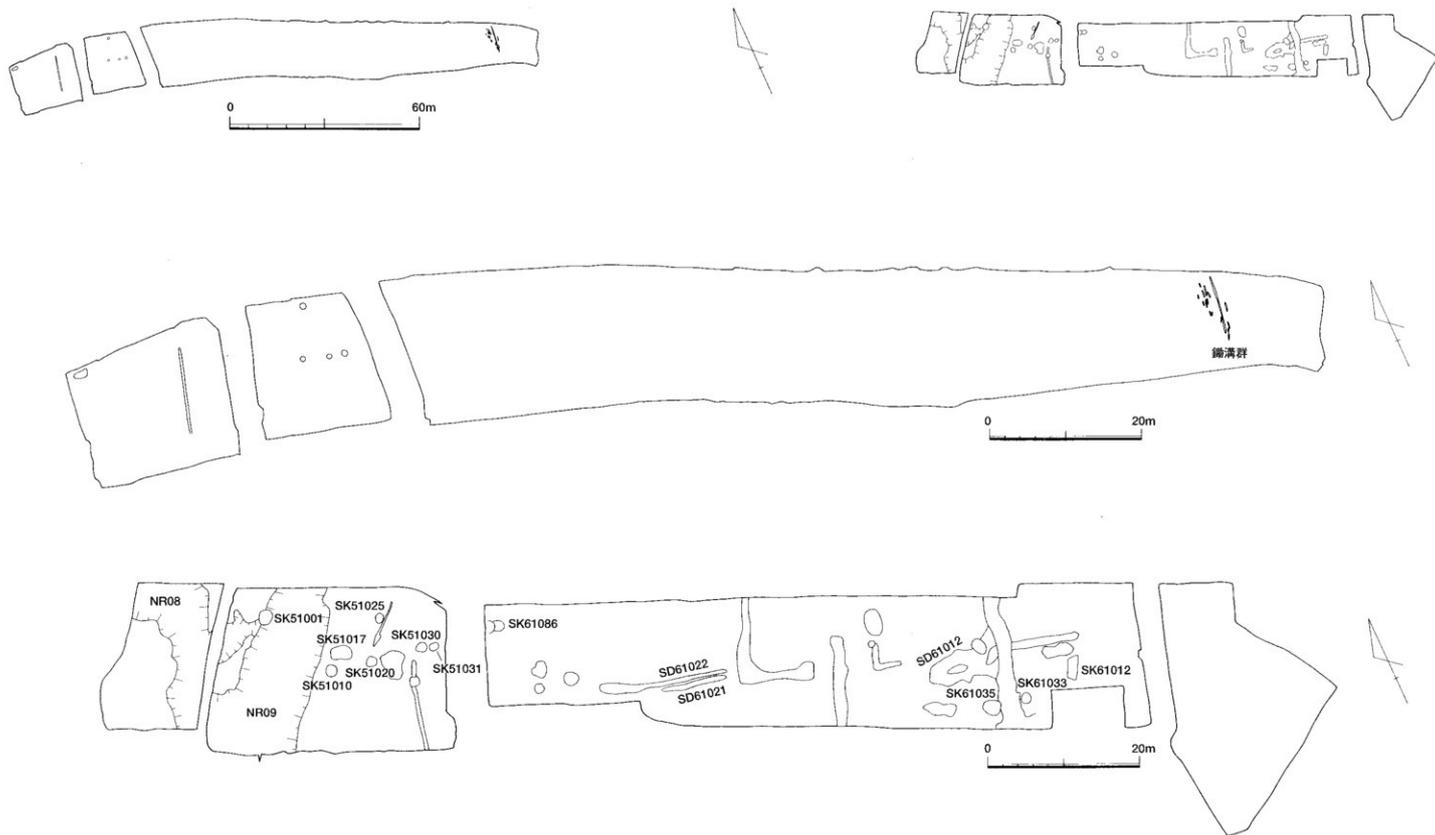
第 98 図 古墳時代末～古代の主要遺構



第 99 図 古代末～中世初頭の主要遺構



第100図 中世末～近世初頭の主要遺構



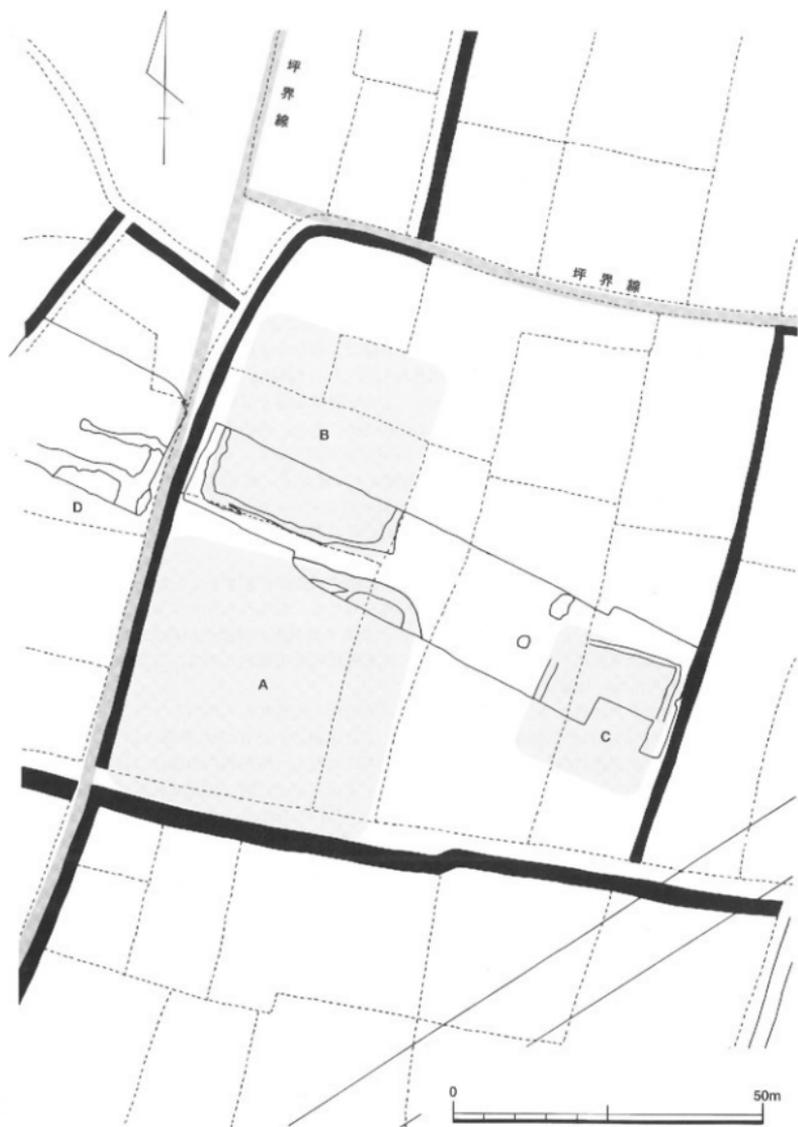
第 101 図 近世の主要遺構

第2節 屋敷地の居住者について

今回の調査では16世紀～17世紀前半の溝で囲まれた屋敷地を3区画検出した。この屋敷地の性格と居住者について考えてみたい。ここではSD61020に囲まれた範囲を屋敷地A、SD61023で囲まれた範囲を屋敷地B、SD61002で囲まれた範囲を屋敷地Cとした。なお、V区SD51001で囲まれた部分については、旧河道との接点部分において18世紀の遺物を含んでいるが、その他の部分では概ね17世紀前半までの遺物しか出土していないことから屋敷地Dが想定できる。しかしながら、時期決定に不安があり、規模も不明であることから、屋敷地Dは参考程度にとどめたい。屋敷地の規模については、屋敷地B・Cについては発掘調査で溝の1辺が全城検出されており、中世城館の平面プランが正方形であることが多いことから正方形のプランを想定した。屋敷地Bは、溝内の屋敷地は約26.5m四方で、屋敷地面積は約700㎡、溝幅1.5mを含めた規模は約32m四方を想定できる。同様に、屋敷地Cは、溝内の屋敷地は約18m四方で、屋敷地面積は約324㎡、溝幅1.6mを含めた規模は約21m四方を想定できる。一方、屋敷地Aは北東隅しか検出されていないため、規模は不明である。しかしながら、屋敷地B・Cを区画する溝に比べ屋敷地Aを区画する溝SD61020は幅2.6m、深さ60cmと他の区画溝に比べ大規模であることから、屋敷地B・Cより大規模な屋敷地であることが想定される。一方、VI区の西端は堺界線で、現在も水路と道路により区画されていることから、この堺界線を越えて屋敷地が広がることは想定しにくい。同様に、調査区の南側にも堺界線が所在し、現在も水路と道路により区画されていることから、この堺界線を越えて屋敷地が広がることも想定しにくい。屋敷地Aの北東隅から西側と南側の堺界線まで約44mであり、溝幅を含めた屋敷地は約41m四方を想定できる。溝内は約40m四方で、屋敷地面積は約1600㎡を想定できる。なお、屋敷地Aとその北辺が直線状に並んでいる。また、屋敷地Bは屋敷地Aとは接せず、約4m幅の間を空け平行に築かれている。この4m幅の空地には屋敷地廃絶以降の遺構しか見られないことから、通路上の遺構が想定できる。以上から、通路状の施設を基準に屋敷地が企画的に配置されており、3つの屋敷地は互いに関係しあっていることがうかがえる。

検出された屋敷地は周囲を溝で区画しており、出土遺物中に瓦が存在することから、明らかに一般集落とは異なるものであり、中世城館や寺社の可能性が考えられる。城館や寺社とする決定的な遺物の出土はないが、寺社の伝承は無く、「土居」の地名が残ることから中世城館の可能性が考えられる。西八ヶ岳土居遺跡の所在する坂田郷は香西郡に属しており、中世では香西氏の勢力圏内である。このうち、坂田郷内には室山城、坂田城、片山城、斎藤城があったとされる。

では、坂田郷内の中世城館について記述した近世の軍記物と編纂物から検討してみたい。最も古い記述は寛文3年(1663)に記された『南海治乱記』である。これを補訂したものが、享保4年(1719)『南海通記』であり、坂田郷部分の記述に関して大差は無い。これによると、坂田郷内の城については室山城の記述しかなく、その城主については一切触れられていない。宝永5年(1708)に記された『玉藻集』以降の諸文献では室山城主を太田犬養(六郎)とするものが多い。しかしながら、太田氏はその名の通り太田周辺の氏族と考えられており、文政11年(1821)に記された『全譜史』では太田城の藩に太田犬養、その子兼久、その子兼氏がいたという記述がある。また、『南海通記』においては「楠川太田ノ犬養」という記述が見られる。前後の文脈からすると「地名+人名」の記述となっていることから「楠川と太田に城を持つ犬養氏」という意味に取れる。別の箇所でも「太田犬養」とあるが、これについても姓名なのか地名と人名を併記しているものか判断つきがたい。いずれにせよ太田周辺に勢力を持つ「太田犬養」なる人物が室山城と関係があったということになる。しかしながら、寛政4年(1792)に記された『香西記』では太田犬養について2人なのかという疑問(太田氏と犬養氏が居たという疑問なのか室山城と太田城の両方に同姓同名の太田犬養がいたという疑問なのかは不明)が出されており、明治中期『新撰讃岐国風土記』では室山城主に太田犬養がいたということを疑問視している。一方、室山城の城主を太田犬養以外とするものもある。江戸時代に香川郡西部の政所を代々勤めた御殿町の小比賀家には、延享5年(1748)に記された『(小比賀家)由緒書』が残っている。これによると天正10年に甲府から落ち延びた小比賀野基助が伊予河野氏を頼り、その後坂田村の室山に城を築いたとしている。しかしながら、室山城については『南海治乱記』で天正2年(1574)の三好氏との戦いの際に「香西家二其間へ有ケレハ香東ノ士民ノ子女、坂田室山ノ城ニ入レ」という記述があることから、天正2年には既に室山城があったことが分かる。このことから『由緒書』に記載された築城は史実とは異なると考えられる。ただし、『全譜史』では太田六郎兼久の臣小比加



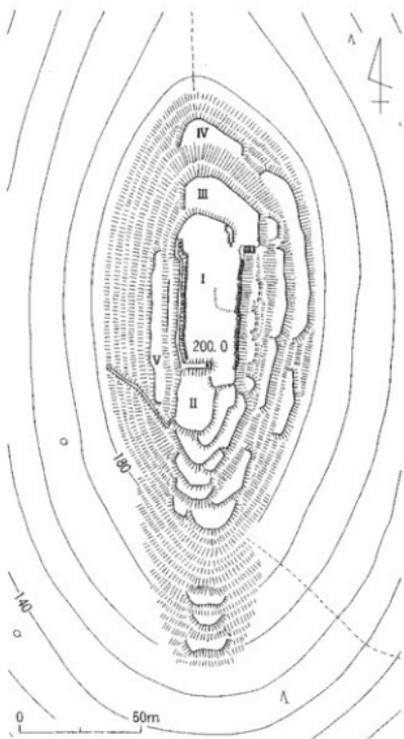
第102図 屋敷地復元図（地籍図と合成）

五郎四郎が居たという記述も見られる。なお、明和5年(1768)に記された『三代物語』においても小比賀桃千代に対して父親である五郎四郎の戦死について六郎から感状が出されている。六郎とは太田犬養六郎あるいは太田六郎兼久のことと考えられ、小比賀氏が太田氏の家臣的扱いを受けていたことがうかがえる。しかしながら、香西氏が三谷氏の大森(王佐山城)を攻めたのは『南海治乱記』等によると永正5年(1508)8月のことであり、感状に記載された日付12月6日とは異なる。記録に残っていない戦があった可能性も考えられるが、感状の真偽が疑われる。この他、室山城主については『全譜史』に眞鍋権頭某とも記載されている。眞鍋権頭については他の文献に記載が無いが、『南海通記』で上ノ村眞鍋と記載された人物があり、この人物が該当すると考えられる。以上、城主について諸説のある室山城であるが、その築城技術については、主郭の土塁裾の石積みや折れに勝賀城との類似性が指摘(香川県教育委員会2003)されている。また、「香西家二其間へ有ケレハ香東ノ士民ノ子女ハ、坂田室山ノ城ニ入レ」や「坂田ノ室山モ國中ナレドモ要城也。」という記述からは、室山城に対して香西氏の直接的な介入が読み取れる。また、平野部であることから居館しか持ち得ない香西氏配下の香東郡諸将の最終防衛地であったことも読み取れる。このような理由から『南海治乱記』において城主の記載が無く、その他の文献においても多数の武将の名が挙げられていることが考えられる。なお、室山城については、現在も室山の山頂部に遺構が残っており、同地が比定地となっている。

片山城については城の記載が無いものも多いが、城主に関しては片山氏であることはどの文献でも一致するところである。城の所在地については『翁廬夜話』では坂田口橋詰、『香西記』『全譜史』では小山としており、さらに『讃岐国名勝図会』においては北山裏付近に描かれている。具体的な場所は不明であるが、これらの諸説は現在の松並・勅使・西春日町にあたり、浄願寺山の東麓に位置することとなる。

斎藤城については、『全譜史』にのみ記述が見られる。城主は齋藤莊兵衛行長と記述されており、『香西記』にみられる沖村の佐藤莊兵衛行長と同一人物と考えられる。城の所在地については上天神・田村町に馬場・堀の角・ミドロという地名が残っており、この周辺が比定地とされている(香川県教育委員会2003)が、実態は不明である。

坂田城に関しても記述が少ない。坂田城が文献上最初に見られるのは、『三代物語』であり、これには太田六兵衛兼久とその子の加兵衛兼氏としている。以降の諸文献もこれを参考にしたと思われ、ほぼ同様の記載が見られる。しかしながら、太田が本願地と考えられる太田氏が常に坂田城に居たとは考え難く、太田氏配下の人物や他の人物の居館であった可能性が考えられる。『香西記』では片山城に片山志摩俊秀、室山城に太田犬養、沖村に佐藤莊兵衛行長とあり、坂田郷内の坂田城以外の城主が書かれている。小比賀基助は人名のみの記載であるが、他の城館の城主と併記されていることを考えれば、坂田城主と考えられる。なお、小比賀氏については先述の通り、太田氏配下の可能性が考えられる。また、『三代物語』以前の『南海通記』によれば坂田城の記述は無いが、「坂田庄官」や「坂田ノ河野、坂田ノ庄官」という記述が見られ



第103図 室山城跡縄張り図
(香川県教育委員会2003より抜粋)

第3表 古記録に見る坂田郷内城主一覧

書名	出版年	室山城	坂田城	片山城	吉藤城
『南海治政記』	寛文3年 (1663)	高山城の記述はあるが、城主についての記述なし	坂田城の記述は無いが、表田ノ庄官、坂田ノ河野の記述あり	片山氏の記述はあるが、片山城の記述なし	
『南海通記』	享保4年 (1719)				
『仁藤集』	宝永5年 (1708)	太田大養	庄官の記述あり	片山氏の記述はあるが、片山城の記述なし	
『小比賀翁傳書』	延享5年 (1748)	小比賀甚助が河野に城を築く			
『三代物語』	明和5年 (1768)	太田大養	太田六兵衛兼久 →加兵衛兼氏	片山彦蕃俊武 →志摩俊秀	
『鶴崎夜記』	18世紀 後半	太田大養→小比賀甚助	太田六兵衛兼久 →加兵衛兼氏	首藤ひら山立書俊武 →志摩俊秀	
『香西記』	寛政4年 (1792)	太田大養	坂田郷小比賀甚助の記述あり	片山志摩俊秀	佐藤山兵衛 行長
『全徳史』	文政11年 (1828)	眞鍋頼頭 太田大養(伊勢)	太田六兵衛兼久の弟 小比加四郎四郎	片山彦蕃俊武 →志摩俊秀	齋藤莊兵衛 行長
『讃陽古城記』	弘化3年 (1840)	太田大養			
『讃陽国名勝同会』	嘉永7年 (1854)	太田大養	太田六兵衛兼久 →加兵衛兼武	片山志摩俊久	
『新撰讃陽風土記』	明治30 年以降	太田大養は誤り?	細川定伴→太田兼久	片山志摩俊久	

る。先述のとおり「地名+人名」の原則によれば、「坂田」は地名で、「庄官」や「河野」は人物名である。このうち河野氏については『南海通記』等によると、伊予の河野氏一族で、坂田室山の麓に住み泉光寺という寺を建てていることが記載されている。一方、「庄官」は「玉藻集」でも記載されており、その実在の可能性は十分考えられる。しかし、「庄官」は荘園を管理する「荘官」の意味とも考えられ、その実態は不明である。いずれにせよ、坂田に「河野」や「庄官」の存在があり、これらの人物が城主であった可能性も考えられる。なお、建武2年(1335)に細川定徳が鷲田庄で挙兵した場所を坂田城としているものもあるが、実態は不明である。城の所在地については記載されているものは無く、不明である。坂田郷内ということでは、現在の西ハゼ・東ハゼ・松並・勅使・西春日・田村町付近に比定される。なお、坂田郷は近世には馬場・沖・勅使・万歳・坂田村にわかれており、坂田村を土居村に改めていることから、字名「土居」のある西ハゼ町付近が坂田郷坂田村であり、比定地として最も有力と考えられる。

以上から、今回の調査地付近の西ハゼ町土居付近が坂田城の候補地として最も可能性が高く、今回検出した屋敷地が坂田城跡である可能性が考えられる。最大規模の屋敷地Aは推定4km四方で、居館とするには小規模である。しかしながら、県内には半町四方程度を居館として推定される例は多々あり、中には檜紙城跡のように40m四方を推定地としている(香川県教育委員会2003)ことから考えれば、屋敷地Aを居館としても差し支えは無い。なお、屋敷地群が調査区外に延び、さらに大きい屋敷地の所在を想定すれば、今回検出の屋敷地群は坂田城の付属屋敷地群となることも考えられる。なお、坂田城は別の場所に存在し、坂田城とは全く関係なく記録にも残っていない屋敷跡の可能性も否定はできないが、現在のところ、坂田城を他の場所に比定する根拠が無い。

では、屋敷地の居住者について考えてみたい。坂田城の城主については先述のとおり、太田氏、小比賀氏、河野氏、「庄官」の4者が考えられる。現在、屋敷地Aとして想定した範囲内には小比賀氏の家が所在し、周辺部を含めると、4軒が小比賀姓である。「小比賀」は高松においてそれほど多い姓ではなく、むしろ珍しい姓であり、小比賀姓の家がこれほど集中することは、屋敷地と小比賀氏の間を暗示するものと考えられる。

小比賀氏の出自については不明な点が多々ある。『三代物語』や『香西記』においては小比賀五郎四郎という人物が香西氏の大塚(=王佐城)攻めにおいて戦死したと記載された感状が記載されている。香西氏が王佐山城を攻めた記録は永正5年(1508)であり、これからすると、16世紀前半には既に小比賀氏が太田氏配下として存在していたことになる。先述のとおり香西氏の王佐山城攻めは8月のことであり、感状の日付と異なることから、感状の真偽が疑われる。なお、この感状が本物とするならば、『南海通記』において王佐山城攻めに参加している中には、「坂田庄官」が見られ、小比賀氏が「庄官」の実態である可能性

も考えられる。一方、『由緒書』では初代七郎右衛門以前のこととして甚助信氏とその子甚兵衛信之についての記載がある。武田信玄の弟武田信連（＝武田信廉）の子である小比賀野基助を祖としている。天正10年（1582）甲府没落（＝天目山の戦いの敗戦）により甲州の小比賀野村に隠れ住んでいたが、その後伊予河野氏を頼り、さらに坂田村室山に来て城を築いてそこに住み、天正13年（1585）には豊臣秀吉から朱印状を得ている。「室山二城ヲ築キ」と記されているが、先述のとおり『南海通記』には天正2年（1574）の香西氏と三好氏との戦いにも室山城は記されており、既に室山城が所在したことがうかがえる。また、その出自を示す史料については「御朱印并添状外二信玄公より千石之證文系図等近来迄致所持伝居申候へ共紛失仕候」とあり、やはり信憑性がない。しかしながら、『由佐家文書』の「前田清八方江之返答」において、天正5年（1577）以後、野原・坂田・多肥・木太の4郷に雑賀氏や宮脇氏など諸浪人が集まってきたという記載が見られる（野中2003）ことから、小比賀氏が浪人であった可能性も否定できない。

いずれにせよ、小比賀家については『由緒書』では小比賀氏が御殿町に移住した小比賀七郎右衛門（円念坊）を初代としている。第2代以降の当主については、過去帳等で実在の人物と判明しており（財）文化財建造物保存技術協会1977、御殿移住後の記録についてはほぼ正確なものであることがうかがえる。小比賀家第2代当主金太夫の没年は過去帳によると明暦元年（1655）であり、初代七郎右衛門の御殿移住が17世紀前半頃であったことを示唆するものである。なお、現在重要文化財に指定されている小比賀家住宅は家伝では慶長年間の創建とされており、解体修理時の報告においても慶長～元和頃の創建が推定されている（財）文化財建造物保存技術協会1977）。これは西ハゼ土居遺跡における屋敷跡の廃絶時期とほぼ同時期であり、屋敷地が小比賀氏のものであることを示す状況証拠として挙げられる。

以上、現在屋敷地上に小比賀氏の家が所在することと屋敷地廃絶年代が、現在御殿町に所在する小比賀家の創建年代と符合する点から、屋敷地は小比賀氏のものと考えた。今回の屋敷地は「城館」として小規模なものであることから坂田城の可能性は極めて高いが、断定はできない。しかしながら、坂田城のように後世の編纂物によって城として認識されたものについては、その規模の大小についてはそれほど問題にならないと考える。いずれにせよ、周辺の調査において新たな知見が得られることを望むものである。

《主要参考文献》

- 秋山 忠 1982『古城跡を訪ねて』高松市歴史民俗協会ほか
- 松本和彦 2000『都市計画道路踏切町区分寺綾南線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 松並・中所遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センターほか
- 野中寛文 2003「天正10・11年長宗我部氏讃岐国香川郡侵攻の記録史料」『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』香川県教育委員会（財）文化財建造物保存技術協会 1977『重要文化財小比賀家住宅修理工事報告書』重要文化財小比賀家住宅修理委員会
- 香川県教育委員会 2003『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』

『南滿通記』享保四年（二七一九）香西成實

：水正五年八月香西豐前守元定、香東、香西、南條、北條四郡ノ兵二千五百人ヲ率シテ、山田郡ニ發向ス、相從ノ人々ハ香西備前守津成、樺川四郎資茂、北條香川民部少輔、瀧宮豐後守、瀧宮弥彌十郎福家七郎、羽住伊豆守、同大林氏、山田彌七、中間ノ久利三郎四郎、國野ノ源盛喜太郎、櫻紙ノ樺松四郎、河邊三兵衛、飯間、飯田二右衛門督、中飯田備中、下飯田筑城總助、安原二國廣右衛門佐府若菜、井原二清原、油佐河津等ノ宮、大宮寺、木野名主、太田大藏、松繩手ノ宮藤氏、立石、伏石二佐藤孫七郎、木太藏部、上ノ村廣部、楠川、坂田庄官、野原ノ雜賀、岡本藤井等各々土居構ノ小城持也、。

：河野家祖二息方ト云人此人二階子眞傳アリ、往昔河野家二右衛門三郎ト門戸ヲ守ル者アリ、其氣象強盛ニシテ哀感ノ情スナク、乞食人ヲ鎌子門戸ニ入レテ、四圍邊階階富シテ鎌拂ヲ禮禮シテ提ヲ折ル、此院當人ヲモ門内ニ入レテ、右衛門三郎應子鐵終ノ時節三人來テ曰ク汝等強盛ニシテ鎌受ナシ、然レトモ素白ニシテ正直也。何ニテモ未來ノ願アラハ叶テ取ラセント云フ、右衛門三郎力曰ク我何ヲ力願ヒ何ヲ力憂ノ我願コトナシ、若願フテラハ我君河野殿ノ子ニ生レシ力體曰ク其願ヲ合ヘント云、白玉ヲ出シテ左ノ手ニ握ラセ死ニ赴シム、果シテ河野子白玉ヲ標子出生ス是ヲ息方ト云也。息方成長ノ後河野ノ家ヲ繼キ、不動ノ像ヲ造テ其白玉ヲ玉眼トシコレヲ崇信シテ氏ノ證トス。其後裔今度内亂シテ郷里ヲ去ルトキ、其不動ノ像ヲ背ニシテ、**關州佐田庄**ノ下ニ來リ一字ヲ安置シテ、**泉光寺**ト號ス。泉清來リ北故也。天正年中ニ大地震シテ天下擾亂シ、木地剝テ白水ヲ出シ、大山崩テ郷里ヲ埋メ、平陸破テ海底ニ沈ムコトアリ、此時堂山崩テ泉光寺地ノ底ニ埋ム、河野氏族深ク歎テ擲出サントスレトモ、力足マシ止ス。是ニ於テ新ニ堂ヲ立テ不動ノ像ヲ造リ、舊ノ所ニ安置シテ、河野氏族ノ氏寺トシテ、其二字今ニ在リ、其部類頗多シ。

：香河、香西、阿野、南北四郡主香西氏居城ハ笠居郷佐料也。要城ハ勝賀ノ山也。其下ノ城々ハ坂田ノ**堂山**、飯田三ヶ所、中間ニ久利、福家同氏、新居二回氏、羽衣二回氏、瀧ノ宮二回氏、榎木二瀬宮氏、野ノ峯二新名氏、北條、西庄三香川氏部、松繩二宮殿氏、大熊二大熊備前、仲ノ村藤其、上ノ村廣部、其外遺考ハシ、。

：矢野親河守八引田ノ城ヨリ秦川郡ニ打入り、晝襲ノ城ニ取回フ、阿波ノ撫葉ニテ大船ヲ用意シ、糧米種子來リ、森飛彈守引田ノ浦ニカノリ居ル、香西家ニ其間ハ有ケレハ**香東郡ノ土民**子女ハ、坂田**堂山ノ城**ニ入レ、資財雜物ハ地中ニ埋テ兵卒ハ佐料ノ城ニ集ム、配分ノ小城將ハ各我居城ヲ守テ來サレユヘニ佐料ノ兵卒八百ニ過キテ敵兵士レハ里城ヲ守ルコトヲ得ベカラストテ城中ノ子女ヲハ垂水、乃生、木澤ノ奥六トシテ籠メヲキ、兵卒ノ手分シテツ越ニ阿波ノ兵卒、三谷彌ヨリ打テ出テ本道ヲ百程、一ノ名、成合、小山ヲ經テ佐料城ニ押寄スル、城中ノ兵五段二分テ、押出シ陣ノ木ノ本マテ矢合アリ、。

：西光寺前先後ハ佐藤孫七郎居石五郎兵衛方一男也後ノ佐藤掃部頭吉兒也立石伏石流石ヲ我方色ニ奪ク故ニ居石トモ云松繩手ノ宮藤正氏、其弟宮殿兵衛、中之村ノ藤井、同所ノ雜賀、西濱ノ岡田丹後、坂田ノ河野、坂田ノ庄官、高井ノ真部、楠川太田ノ木養、一ノ宮ノ大宮司、飯沼成相、河邊氏部五百餘人ヲ以テ先陣トス、。

：坂田ノ堂山毛國中ナドトモ要城也。我方城下ノ者トモハ垂水、乃生、木澤、青海ノ奥ニ入ベシ。軍役自人運シテ者ハ二十人ヲ以テ軍ニ從フベシト定マレ、然シテ中飯田備中守ハ伊賀守ニ告テ曰ク、我方居城ハ平地ニテ用心堅ケレバ子女ノ堂山城ニ攻ベシ、。

『玉藻集』享保五年（二七〇八）小西可春

膳備 安原 井ノ原 大野 多肥 木藏 本庄 藤井 楠川 庄官 雜賀

太田大藏 香川郡坂田の堂山の城に居

香川郡西御殿村政所金太夫由緒書

御朱印之写

堅紙二字

禁制 讀岐内聖山

一 軍勢甲乙人等乱防親藩之事

一 妻子并牛馬欲執之事

一 对百姓等相觸非分儀事付放火事

右朱々堅合停止之状若違犯兼任之者速可処置科者也仍

天正十三年六月日秀吉

御朱印

右者新羅二郎義光十九代孫申州武田信玄公舍弟二武田保六郎入道源義經信連卜申者信玄公より騎馬八十騎ヲ預り居申候所二天正十三年三月甲府遊寇之奇襲田信長公之ために討死仕其子嘉助信氏卜申者同國之内小比賀野村二密二致書居氏ヲモ改テ小比賀野基助卜申居カネテ豫州河野ヲ頼り子伊豫へ渡り候へ共其節土佐之長曾我部豫州へ乱入二付住居難成それより又当國香川郡西坂田村へ參り聖山二城ヲ築キ暫致住居候其節太閤秀吉公より右之御朱印厚キ紙二書懸下置候を竹二はごミ村出二立候其時録須賀彦右衛門尉殿よりも添状をくださる候に小比賀野基助殿崎須登右衛門尉卜有候田右之御朱印并添状外二信玄公より子石之段文承國近芝念遠所持伝候申候へ共紛執在候天正十二年仙石輝兵衛秀久公當國入部之時香山之城遊寇仕基助儀小比賀野老人公与七民間二病死候其時重持之者

一 占キ小具足 志願

一 鑪 意采

一 矢ノ根 同

一 刀 開者光 志願

一 駒馬佛前明光 志願

右之由は以上迄所持伝候右基助子小比賀野善兵衛信之と申者坂田之郷五十石之庄屋を久々相勤メ病死仕候朱右之近月は相知不候善兵衛子小比賀野七郎右衛門法名巴奈坊卜申者坂田村より当村へ罷越候只今迄八代に罷成申候

小比賀野善兵衛勤子 七郎右衛門 法名巴奈坊

七郎右衛門子 金太夫

金太夫子 甚左衛門

甚左衛門子 久右衛門

久右衛門子 六左衛門

六左衛門子 七郎右衛門

七郎右衛門子 藤七郎

藤七郎子 金太夫

覺

金太夫子 七郎右衛門

七郎右衛門子 六吹七郎右衛門

右者天明五年己巳十一月五日二大將様御玄關取次御役候仰付候依而其節より六吹と改名罷申候尤右小比賀を改正六吹改名罷候様は故有テ六吹改名罷申候

一 天明七年丁未二月十五日御醫馬殿に被仰付候

一 同年三月十九日御門方様七郎右衛門宅御成被遊候而其夜七ノ時分二御機嫌支御候罷被遊候其節銀貳百

文頂戴仕候

一 寛政元己酉年七月十日御門方様御遊去被遊候同年九月鶴田平院様騎馬役無障相勤候間一代帯刀被仰付候元代官池田角右衛門宅ニ被遊候

室山 左坂田 玉葉集口 朱奈常丞平申 勳覽寛平法皇發於室山 与親覽嘉和後同 七年十九日 寛平法皇第七
年忌辰 六月十一日 親覽十七年忌故兼有勳使 旧地名曰御室
警軍錄云 室山 崩數十丈 奸賊米能前民陟此山 投大石以擊之 賊不敢進 天正十二年 豊公廟未印刷
書於此邑

講殿内室山

禁制

一 軍勢申之人等乱妨狼藉之事

一 妻子并牛馬負負之事

一 妨百姓等相懸非分儀事付致火事

右之条々 聖令停止之迄 若違犯者在左 各選可廻厥科者也 仍下知如件

天正十三年六月日

秀吉御朱印

御朱印御所望之由に付 今度被下置也 宜可被致直候

蜂須賀左衛門

小比賀甚助殿

去年十二月六日 至三谷弥五郎 聖宮大麻 香西其五郎 取懸合戦時 父五郎 四郎 討死 尤神妙也

謹言

三月七日

六郎 花押

小比賀桃千代殿

小比賀桃千代 為御称正賢 寛文二年 建寺於坂田 曰西光寺 至其孫遷吉光 後又移由佐田 佐西光寺
桃千代九世孫也 故此寺有豐公制札 六郎 感状

室山城 太田大義屋之

片山城跡 片山玄葉 豊武 其子玄孫 俊秀 居之 鎮守府將軍 藤原秀 第九世孫 貫藤左衛門 尉親 清長子 山内
首藤 利朝 委委 迎十一里之隔 日山内 貫藤 弥六左衛門 貞通 世々住 勢州 長島 元弘 建武 之後 列國
兵争 海内 騷乱 其孫 或 戰没 或 流移 又 明中 貞通 性 將 軍 義 政 食 邑 紀 州 義 政 卒 後 任 將 軍 義 材
明心二年 片山 彈正 少輔 義 豐 攝 河 州 芥 山 邑 以 叛 將 軍 義 材 義 材 自 將 兵 討 之 以 正 覺 寺 (河内)
為 齋 使 齋 師 島 山 守 長 爲 齋 田 跡 細 川 政 元 帥 歸 義 豐 登
於是 与 敵 代 將 軍 於 北 克 守 宮 而 破 之 弥 六 左 衛 門 貞 通 力 戰 斃 敵 數 級 而 後 死 時 年 四 十 六 有
一 男 長 曰 綱 正 正 慶 春 仕 將 軍 義 材 同 父 戰 没 次 子 帶 刀 俊 武 父 兄 死 而 後 居 無 對 是 歲 八 月 品
山 政 長 之 孫 綱 十 五 城 (綱 祖) 以 叛 將 軍 義 登 管 領 細 川 右 兵 衛 門 政 元 使 登 聖 廟 後 守 元 定 伐 之 首
藤 帶 刀 義 然 於 其 把 利 因 請 為 之 禱 事 政 元 許 之 乃 命 歸 香 西 氏 帶 刀 有 余 勇 勇 進 先 登 擊 品 山
政 長 勇 十 餘 夫 子 兵 奮 獲 其 首 於是 羽 林 伊 呂 吉 勳 察 忌 攻 之 城 遂 陷 香 西 正 定 齋 帶 刀 武 功 厚 賞
細 川 氏 賜 之 感 状 (在家) 乃 從 元 定 平 讃 州 國 香 西 氏 食 邑 於 坂 田 郡 品 中 右 山 馬 日 片 山 構 一 城 居
之 因 改 其 號 帶 刀 片 山 云 誓 其 子 玄 孫 俊 秀 襲 其 封 邑 世 々 屬 香 西 氏 四 傳 人 彈 正 貫 綱 弥 元 々
有 戰 功 及 豐 公 征 伐 據 嵩 松 左 馬 助 与 城 主 左 馬 助 唐 人 學 正 船 難 死 (墓 在 豐 國 守 郎 嵩 松 城 邊)
俊 秀 有 二 子 長 口 九 郎 右 衛 門 勝 水 仕 生 駒 家 澤 經 百 五 十 石 次 子 六 衛 門 武 治 樓 運 (龜 樓) 坂
田 橋 詰 聖 豐 百 石 二 兵 衛 門 勝 秀 招 長 兄 勝 水 之 後 生 駒 家 群 臣 離 散 之後 之 傾 州 日 川 仕 本 多 能 登 守
秩 三 百 石 為 用 事 臣 有 故 而 去 歸 講 仕 我 兄 君 英 公 賜 祿 百 石 其 子 五 左 衛 門 以 後 世 祿 (糸 國 甚 長
今 略 之)

坂田城 太田六兵衛兼久 其子加兵衛兼氏 居之

寛田莊之古跡 今坂田之云 建武年間 細川頼朝 御定種 委に立運る 許間 香西是に屬が故 高松三郎
台職に及び大に敗北すと云

『翁姫夜話』十八世紀後半 菊池武賢

- 香川西部 室山城 太田大義居之、後小比賀甚助居ス。
 同 坂田口横話 片山城 眞藤玄善ト其子片山志摩居ス。
 同 坂田城 太田大兵衛兼久、其子加兵衛兼氏居之。

『香西記』寛政四年（一七九二）新屋直矩（読み下し文を掲載）

一、坂田郡の室山には、寛平法皇の御殿がある。（盆打山につながっている山である。別殿ともいう）朱雀天皇の承平年間、天竺の命によって寛平法皇の第七年忌と、観賢の十七回忌を兼ねて勅使が立立、坂田村家の無量壽院に來たのである。勅使の館は村というので、のちに勅使村といふ。また勅使の用に備ふる群馬を集めた村を後に御厩村といふた。ある書に、室山を御山ともいふぞうだ。思ふに天正十二年六月、豊臣六の御書が、この里に届き、藤須賀彦右衛門が逐書をし、この里を小比賀甚助に賜つた。小比賀の息子千代が持っていたが、のち他となつて正賢といひ、西光寺といふ寺を建てた。今の吉沢村の西光寺がこれである。姓千代の子孫である。今にこの御書があるといふことだ。（それには鹿越内の室山には軍勢が乱暴集積をばたいたことが、人の妻子や牛馬をかすめ取つたり、百姓らが身分を越えた賤事をすとか、放火などを禁止するといふ御朱印状である）

坂田郡

- 一、片山城（また小山といふ）片山志摩俊秀。
- 一、室山城（太田大義、これは一入たろうか）
- 一、小比賀甚助。
- 一、沖村佐藤庄兵衛行長。

『全譜誌』文政十一年（一八二八）中山城山

室山城 坂田村に在り。眞藤權之頭某、之に居りき。或は云ふ太田大義、之に居りきと。今之を考ふるに、蓋し大義の後、此に移れるか。

太田城 太田村に在り。太田大義（六郎と稱す）之に居りき。其の子兼久あり、其の子に兼氏ありき。

齋藤城 沖村に在り。齋藤庄兵衛行長、之に居りき。

片山城 坂田村に在り。今は小山と曰ふ。片山玄蕃俊武、及び其の子志摩俊秀、之に居りき。鎮守府將祝秀郷の後なり。文明中、潮六左衛門貞通と云ふ者あり。邑を河州に長みき。明應の時、島山源正の弼義登は河州桑田城に據りて以て叛せり。將軍義材自ら之を征し、潮六左衛門力戰して死せり。潮六左衛門に二男ありき。長を織部正俊春と曰ひ、父と回しく死せり。次を誓刀俊武と曰ひ、熊野に居りき。是の歳八月、島山政長の黨士丸城に據りて叛せり。管領細河右京大夫政元、香西備後守元定をして之を征せしめき。首誦誓刀が地理に熟せるを向導と爲せり。誓刀は意して功あり。遂に香西氏に依りて此の地に來り。邑を坂田に爲み、名を玄蕃と改めたり。其の子俊秀は、唐人彈正と、回しく高松城に戰死せり。實に天正十三年なりき。

室山城 太田大兵衛兼久の臣小比加五郎四郎、之に居りき。

『讀鴟古城記』弘化三年（一八四六） 片山駒次郎

一、同（香川郡）坂田畷山城跡 太田大兼居

一、山田郡三好眞前守長綱 永正三年二月築之。此時香西氏 太田貞新築ヲ築 此處乃生繼庵助住入、三好本城 阿州縣町二有。

『讀岐國名勝圖會』嘉永七年（一八五四） 梶原漢美

畷山城跡 同所（坂田村）にあり。太田大兼これに居たり。

坂田城跡 同所（坂田村）にあり。往古鷲田の城と云ふ。太田六兵衛兼久およびその子加茂兵衛兼武これに居たり。この地は建武二年十一月二十六日、足利氏派細川律師定綱、諺問來・香西某に与して旗を差けし所なり。委しくは山田郡畷岡城の所に出せり

片山城跡 同所山にあり。片山忠孝復久ここに居たり。畷岡城にて討死せり。墓は畷岡寺にあり

『新撰讀岐國風土記』明治中期 松岡眞

細川定輝陣所 坂田城跡と云ふは旧地ならむ

坂田城 細川定輝ノ太田兼久 今此地きたかならず

片山城 片山忠孝復久 小山にあり

太田城 今此地きたかならず。全讀史に太田大兼（前六郎）居之其子兼久其子兼武と見えたり。此太田氏は中臣太田連の遺族ならむか。廢城考に畷山城太田大兼之有は誤れるか。調査ふべし

『田佐家文書』『前田清八方江之邊書』一七〇〇年頃

私云 当国知行割御存なき故 此御不審書与見へ申候。東西之權書候へハ事なかく候間、香川兩郡之權許可申候。野原庄・坂田郷・多配郷・木太郷此四郷八往古より国司領二而候故、外之者之領地いた口所二而ハ無之候。天神も当国之國司二御下之節、野原の庄へ御着香川元茂与申者罷出御候移申候由、無量壽院の邊處二見へ申候。此四郷ハ指尔て押候親も見領候無之候。当国二不取國々二国司領并公文与申所二有之候。此公文之事二八入判有之候へとも事長候故不申候。尊氏將軍以來、細川頼之四国官領以後、頼之領分申候。当国二不取其所之領事之知行二而候。細川家之時分官代ハ安芸次郎左衛門与申候。細川没落以後、三好家二成而連野五郎兵衛与申候。何茂野原庄二臣申候而國中之任置をも取次申候。是も事長候へハ委尋不取申候。鹿角・一宮・三名・行司・寺井・大所、此分ハ一宮之神領二而候。大野・百合より上ハ我等先祖之領分二て頼之四国官領以後、取次候。細川右京大夫備元、三好實前守義賢、長曾我部宮内少輔元親爲求建文所持いたし候。西部ハ香西伊賀主頼分二て候。其内川辺大（邊）より西ハ諏訪明神神領二て候。鹽下二（田井）民部か夫、今ハ中井与申候。上曰誠地有之。中間ハ久利又四郎、畷田ハ唐戸彈正下、畷田ハ京都半右衛門（登）居二佐藤与兵衛此五人ハ頼下与申者二て（香）西か家來二てハなく候とそれ、この居し所を領地いたし候。此頼下之時事長候故不申候。（天正五年以後）三好没落後ハ緒方之浪人とも頼領へ候もの右四郡内ハ參候与見申候。今の頼親なども其時分、当国へ參候親与存候。頼主有之地へハ不入申候故。此四郷領主女し二て候故、諸浪人集候与見申候。宮脇氏も其時分二參候間、松尾居申候与見申候、...

觀 察 表

土器観察表

番号	土器種類	図例	通称名	直径(cm)	高さ(cm)	外 観	内 面	底 面	土質	出土	備 考
1	弥生土器 土師	4	第4層	36.0	3.8	細いクセハケ 滑り気味	ナデ	5YR6/4 に近い黄褐色 2.5YR6/4 褐色	やや粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
2	弥生土器 土師	4	第4層	6.6	3.3	高台磨盤		7.5YR/1 灰白 7.5YR/1 灰白 7.5YR/1 灰白	粗 100以下の石炭・黒石を含む		良好
3	弥生土器 土師	4	第4層	7.0	2.5	回転ナデ	回転ナデ	10Y7/6 灰白 10Y7/6 灰白	やや粗 100以下の石炭・黒石を含む		良好
4	弥生土器 土師	4	第4層		1.3	回転ナデ	回転ナデ	10Y7/6 灰白 10Y7/6 灰白	粗 100以下の石炭・黒石を含む		良好
5	弥生土器 土師	4	第4層	12.6	0.9	回転ナデ	回転ナデ	10Y7/6 灰白 10Y7/6 灰白	粗 100以下の石炭・黒石を含む		良好
6	弥生土器 土師	4	第4層	9.4	0.5	マツ	マツ	10Y7/6 灰白 10Y7/6 灰白	粗 100以下の石炭・黒石を含む		良好
7	弥生土器 土師	4	第4層		0.5	回転ナデ	回転ナデ	10Y7/6 灰白 10Y7/6 灰白	粗 100以下の石炭・黒石を含む		良好
8	弥生土器 土師	4	第4層	13.2	1.4	回転ナデ	回転ナデ	10Y7/6 灰白 10Y7/6 灰白	粗 100以下の石炭・黒石を含む		良好
9	弥生土器 土師	4	第4層	11.2	2.4	回転ナデ	回転ナデ	10Y7/6 灰白 10Y7/6 灰白	粗 100以下の石炭・黒石を含む		良好
10	弥生土器 土師	4	第5層			布目	布目	10Y7/6 灰白 10Y7/6 灰白	粗 100以下の石炭・黒石を含む		良好
11	弥生土器 土師	4	第5層	24.6	22.4	ナデ 加粒2条、縁状浮文	ナデ 波状文	10YR7/4 に近い黄褐色 5YR6/8 褐色	粗 100以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
12	弥生土器 土師	4	第4層	15.4	13.4	クセハケ	指環庄	7.5YR5/4 に近い黄褐色 7.5YR5/4 に近い黄褐色	やや粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
13	弥生土器 土師	4	第4層	9.0	0.2	マツ 加粒2条、縁状文	マツ	7.5YR5/4 に近い黄褐色 2.5Y3/1 黒褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
14	弥生土器 土師	4	第10層	マツ	マツ	10YR8/3 黒褐色 10YR8/3 黒褐色	マツ	10YR8/3 黒褐色 2.5Y2/1 黒	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
15	弥生土器 土師	4	第10層	8.8	0.3	ナデ	ナデ、指環庄	10YR8/1 褐色 2.5Y2/1 黒	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
16	弥生土器 土師	4	第10層	14.0	4.1	指環庄	ナデ	10YR8/1 褐色 10YR8/1 褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
17	弥生土器 土師	8	N902	20.0	3.0	マツ	マツ	7.5YR6/8 褐色 10YR7/3 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
18	弥生土器 土師	8	N902	7.6	0.2	ナデ、指環庄	マツ	10YR7/3 に近い黄褐色 10YR7/3 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
19	弥生土器 土師	8	N902	7.2	4.7	クセハケ3方キ	指環庄	10YR7/3 に近い黄褐色 10YR5/2 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
20	弥生土器 土師	8	N900	15.8	0.5	ナデ 縁状浮文	ナデ	10YR7/3 に近い黄褐色 10YR7/3 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
21	弥生土器 土師	8	N902	12.4	0.5	クセハケ3方キ後指環庄	クセハケ3方キ後指環庄	10YR7/3 に近い黄褐色 10YR6/4 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
22	弥生土器 土師	8	N902	10.0	0.5	マツ	マツ	5YR4/4 に近い黄褐色 5YR5/4 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
23	弥生土器 土師	8	N902	22.4	3.5	マツ	マツ	7.5YR6/8 褐色 7.5YR6/8 褐色	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
24	弥生土器 土師	8	N900	13.6	4.1	マツ	マツ	2.5YR4/6 黒褐色 10YR5/1 褐色	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
25	弥生土器 土師	8	N902	13.5	4.0	マツ	マツ	10YR5/1 褐色 10YR5/1 褐色	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
26	弥生土器 土師	8	N902	5.4	2.3	マツ	マツ	2.5YR4/6 黒褐色 10YR5/1 褐色	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
27	弥生土器 土師	8	N902	6.8	14.5	マツ	マツ	7.5YR5/4 に近い黄褐色 10YR5/2 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
28	弥生土器 土師	8	N902	4.8	14.2	マツ	指環庄	10YR6/2 灰黄褐色 10YR5/4 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
29	弥生土器 土師	8	N902	7.4	2.3	マツ	指環庄	10YR5/4 に近い黄褐色 10YR7/4 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
30	弥生土器 土師	8	N902	5.4	1.9	マツ	マツ	10YR5/4 に近い黄褐色 7.5YR4/2 褐色	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
31	弥生土器 土師	8	N902	11.9	3.8	マツ	マツ	2.5Y1/1 黒 10YR6/4 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
32	弥生土器 土師	8	N902	9.0	2.4	クセハケ3方キ	指環庄	2.5Y1/1 黒 10YR5/2 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
33	弥生土器 土師	8	N902	45.2	0.6	ナデ	ナデ	10YR5/4 に近い黄褐色 7.5YR5/4 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
34	弥生土器 土師	8	N902	31.8	0.5	ナデ	ナデ	7.5YR5/4 に近い黄褐色 7.5YR5/4 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
35	弥生土器 土師	8	N902	27.8	4.6	クセハケ3方キ	ナデ	7.5YR5/4 に近い黄褐色 7.5YR5/4 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
36	弥生土器 土師	8	N902	29.2	3.8	マツ	マツ	5YR6/8 褐色 5YR7/8 褐色	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
37	弥生土器 土師	8	N902	23.5	3.8	マツ	マツ	5YR6/8 褐色 7.5YR6/4 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
38	弥生土器 土師	8	N902	20.0	1.7	マツ	マツ	7.5YR6/4 に近い黄褐色 7.5YR5/4 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
39	弥生土器 土師	8	N902	33.0	3.8	ナデ 加粒2条	ナデ	7.5YR5/4 に近い黄褐色 10YR2/1 黒	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
40	弥生土器 土師	8	N900	38.0	4.1	マツ	マツ	10YR7/2 に近い黄褐色 10YR8/4 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
41	弥生土器 土師	8	N902	10.8	3.4	ナデ 加粒2条	ナデ	10YR8/4 に近い黄褐色 10YR7/4 に近い黄褐色	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
42	弥生土器 土師	8	N900	13.4	2.8	ナデ	ナデ	7.5YR4/4 褐色 7.5YR4/4 褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
43	弥生土器 土師	16	第4層			縁輪	縁輪	5YR7/1 褐色 5YR7/1 褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
44	弥生土器 土師	16	第4層	14.4	3.7	ナデ	指環庄	7.5YR5/4 に近い黄褐色 7.5YR6/4 褐色	粗 200以下の石炭・黒石・角閃石を含む		良好
45	弥生土器 土師	16	第4層		8.8	指環庄	指環庄	7.5YR6/8 褐色 5YR6/8 褐色	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
46	弥生土器 土師	17	N904		1.8	回転ナデ	回転ナデ	10Y7/6 灰白 10Y7/6 灰白	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
47	弥生土器 土師	17	N904		1.8	回転ナデ	回転ナデ	10Y7/6 灰白 10Y7/6 灰白	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
48	弥生土器 土師	17	N904		8.4	回転ナデ	回転ナデ	10Y7/6 灰白 10Y7/6 灰白	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好
49	弥生土器 土師	17	N904		14.0	回転ナデ	回転ナデ	10Y7/6 灰白 10Y7/6 灰白	粗 200以下の石炭・黒石を含む		良好

40	国産酒類	17	NRD4	14.9	(1.7)	回転ナデ	回転ナデ	N7.0 灰白 N6.0 灰白	灰 灰	100以下の石英・長石含む	良好
56	国産酒類	17	NRD4	18.2	(1.7)	回転ナデ	回転ナデ	N7.0 灰白 N7.0 灰白	灰 灰	100以下の石英・長石含む	良好
51	土師器	17	NRD4	16.4	13.6	マツ	マツ	5.9Y7.4 に近い 5.9Y8.4 黄赤	や中赤 や中赤	100以下の石英・長石含む	良
55	弥生土器 素土	17	NRD3	25.2	(5.2)	コホラケズリ	ナデ	5.9Y8.4 赤褐 5.9Y8.6 暗赤褐	や中赤 200以下の石英・長石含む	良好	
53	弥生土器 灰土	17	NRD3	25.8	(4.8)	マツ	マツ	10.9Y8.4 に近い 12.9Y8.2 に近い	や中赤 や中赤	100以下の石英・長石・角閃石含む	良好
54	弥生土器 灰土	17	NRD3	10.0	(4.0)	角頭庄	角頭庄	10.9Y8.4 に近い 5.9Y8.3 に近い	や中赤 100以下の石英・長石・角閃石含む	良好	
58	弥生土器 灰土	17	NRD3	10.2	(3.9)	角頭庄	角頭庄	7.0 黄 6.0 黄	や中赤 や中赤	100以下の石英・長石含む	良好
59	弥生土器 灰土	17	NRD3	8.4	(2.0)	マツ	マツ	10.9Y7.3 に近い 7.5Y7.1 灰白	や中赤 100以下の石英・長石含む	良好	
51	弥生土器 灰土	17	NRD3	9.3	(4.1)	マツ	角頭庄	5.9Y8.6 黄 5.9Y8.6 黄	や中赤 や中赤	100以下の石英・長石含む	良好
53	弥生土器 灰土	17	NRD3	6.0	(1.3)	マツ	タテハラケズリ	7.5Y8.4 黄 7.5Y8.4 に近い	や中赤 100以下の石英・長石・角閃石含む	良好	
59	弥生土器 灰土	17	NRD3	12.3	(8.8)	タテハラケ	角頭庄	7.5Y8.4 に近い 12.9Y8.2 に近い	や中赤 200以下の石英・長石・角閃石含む	良好	
60	弥生土器 灰土	17	NRD3	15.8	(2.8)	マツ	マツ	5.9Y8.6 黄 7.5Y8.4 に近い	や中赤 100以下の石英・長石含む	良	
61	土師器 土師器	18	包含層	30.6	(2.7)	ナデ	ナデ	10.9Y7.4 に近い 10.9Y7.3 に近い	や中赤 200以下の石英・長石含む	良好	
62	土師器 土師器	18	包含層	8.8	6.7	マツ	マツ	10.9Y8.6 黄赤 10.9Y7.3 に近い	や中赤 200以下の石英・長石含む	良	
63	土師器 土師器	18	包含層	9.0	7.7	ナデ	ナデ	7.5Y8.6 黄 5.9Y8.5 黄赤	灰 100以下の石英・長石含む	良好	
64	土師器 土師器	18	包含層	13.8	(1.6)	マツ	マツ	5.9Y.1 灰白 7.5Y8.7 黄	灰 100以下の石英・長石含む	良好	
65	赤土器 赤土器	18	包含層	7.2	(1.5)	マツ	マツ	7.5Y8.7.3 に近い 7.5Y8.7.3 に近い	や中赤 100以下の石英・長石含む	良	
66	赤土器 赤土器	18	包含層	7.4	(1.4)	マツ	マツ	7.5Y8.7.4 に近い 7.5Y8.7.1 黄赤	や中赤 100以下の石英・長石含む	良	
67	赤土器 赤土器	18	包含層	8.4	(3.7)	マツ	マツ	7.5Y8.7.4 に近い 7.5Y8.7.3 黄赤	や中赤 100以下の石英・長石含む	良好	
68	赤土器 赤土器	18	包含層	16.6	7.2	5.1	回転ナデ	N7.0 灰白 N7.0 灰白	灰 灰	200以下の石英・長石含む	良好
69	赤土器 赤土器	18	包含層	(3.1)	(3.1)	ナデ	ナデ	10.9Y7.3 に近い 2.5Y7.1 灰白	や中赤 100以下の石英・長石含む	良	
70	赤土器 赤土器	18	包含層	18.9	(8.2)	回転ナデ	回転ナデ	N7.0 灰白 N8.0 灰白	灰 灰	100以下の石英・長石含む	良好
71	土師器 土師器	18	包含層	30.2	(2.2)	ナデ	ナデ	10.9Y8.3 に近い 10.9Y8.1 黄赤	や中赤 100以下の石英・長石含む	良好	
72	赤土器 赤土器	18	包含層	9.4	(2.1)	回転ナデ	回転ナデ	N7.0 灰白 灰	灰 100以下の石英・長石含む	良好	
73	赤土器 赤土器	18	包含層	5.7	(3.1)	回転ナデ	回転ナデ	N6.0 灰 N6.0 灰	灰 灰	100以下の石英・長石含む	良好
74	赤土器 赤土器	18	包含層	16.6	4.0	回転ナデ	回転ナデ	N7.0 灰白 N7.0 灰白	灰 灰	100以下の石英・長石含む	良好
75	赤土器 赤土器	18	包含層	19.6	(4.1)	マツ	マツ	5.9Y8.4 に近い 7.5Y8.4 に近い	や中赤 200以下の石英・長石含む	良	
76	赤土器 赤土器	18	包含層	16.4	(1.8)	マツ	マツ	7.5Y8.4 に近い 7.5Y8.4 に近い	や中赤 200以下の石英・長石・角閃石含む	良	
77	赤土器 赤土器	18	包含層	9.4	(2.8)	マツ	マツ	7.5Y8.6.4 に近い 10.9Y8.4 に近い	や中赤 100以下の石英・長石含む	良	
78	赤土器 赤土器	18	包含層	19.2	(5.6)	ナデ	ナデ	7.5Y8.4.6 黄 7.5Y8.4.6 黄	や中赤 100以下の石英・長石・角閃石含む	良好	
79	赤土器 赤土器	18	包含層	12.1	(5.6)	マツ	角頭庄	7.5Y8.7.3 に近い 10.9Y7.3 に近い	灰 100以下の石英・長石含む	良好	
80	赤土器 赤土器	28	NRD6	4.0	(5.5)	角頭庄 角頭庄	角頭庄 角頭庄	7.5Y8.6.4 に近い 7.5Y8.3.1 黄褐	や中赤 200以下の石英・長石・角閃石含む	良好	
81	赤土器 赤土器	28	NRD6	5.3	(4.5)	マツ	角頭庄	7.5Y8.7.2 黄褐 5.9Y.1 灰	や中赤 200以下の石英・長石含む	良好	
82	赤土器 赤土器	28	NRD6	5.4	(2.2)	タテハラケズリ	角頭庄	2.5Y8.4.2 黄赤 2.5Y8.4.2 に近い	や中赤 100以下の石英・長石含む	良好	
83	赤土器 赤土器	28	NRD6	8.9	(1.8)	ナデ	ナデ	2.5Y8.6.6 暗赤褐 10.9Y8.2 黄赤	や中赤 100以下の石英・長石含む	良	
84	赤土器 赤土器	28	NRD6	18.0	(1.6)	ナデ	ナデ	10.9Y8.3 に近い 7.5Y8.3.2 に近い	や中赤 100以下の石英・長石・角閃石含む	良好	
85	赤土器 赤土器	28	NRD6	18.2	(5.9)	マツ	角頭庄	7.5Y8.3.2 に近い 10.9Y8.3 に近い	や中赤 200以下の石英・長石・角閃石含む	良好	
86	赤土器 赤土器	29	SK32001	17.3	(3.1)	マツ	マツ	5.9Y8.4 に近い 7.5Y8.4 に近い	や中赤 200以下の石英・長石・角閃石含む	良	
87	赤土器 赤土器	29	SK32001	20.4	(3.7)	角頭庄	角頭庄	7.5Y8.4 に近い 7.5Y8.4 に近い	や中赤 200以下の石英・長石・角閃石含む	良好	
88	赤土器 赤土器	29	SK32001	36.0	(32.2)	コホラケズリ コホラケズリ	コホラケズリ コホラケズリ	7.5Y8.4 に近い 10.9Y8.4 に近い	や中赤 100以下の石英・長石・角閃石含む	良好	
89	赤土器 赤土器	29	SK32001	4.2	(1.3)	ナデ	ナデ	10.9Y8.2 黄赤 7.5Y8.4 に近い	や中赤 100以下の石英・長石・角閃石含む	良好	
90	赤土器 赤土器	30	SK32002	15.3	(13.5)	タテハラケ 角頭庄	コホラケズリ 角頭庄	7.5Y8.4 に近い 7.5Y8.5.6 暗褐	や中赤 200以下の石英・長石・角閃石含む	良好	
91	赤土器 赤土器	30	SK32002	17.0	(4.0)	マツ	タテハラケズリ	7.5Y8.4.6 黄 7.5Y8.4.4 に近い	や中赤 100以下の石英・長石・角閃石含む	良好	
92	赤土器 赤土器	30	SK32002	16.0	(3.1)	マツ	コホラケズリ	7.5Y8.4.6 黄 7.5Y8.6.6 黄	や中赤 200以下の石英・長石・角閃石含む	良好	
93	赤土器 赤土器	30	SK32002	8.1	(4.1)	コホラケズリ	ナデ	5.9Y8.4 に近い 5.9Y8.4 に近い	や中赤 200以下の石英・長石・角閃石含む	良好	
94	赤土器 赤土器	32	NRD4	16.7	(4.1)	マツ	マツ	7.5Y8.4 に近い 5.9Y8.4 に近い	や中赤 100以下の石英・長石含む	良	
95	赤土器 赤土器	32	NRD4	16.6	(2.8)	マツ	マツ	7.5Y8.4 に近い 7.5Y8.4 に近い	や中赤 100以下の石英・長石含む	良	
96	赤土器 赤土器	32	NRD4	19.2	(2.8)	マツ	マツ	7.5Y8.3.2 に近い 7.5Y8.3.2 に近い	や中赤 100以下の石英・長石含む	良	
97	赤土器 赤土器	32	NRD4	17.2	(2.2)	マツ	マツ	7.5Y8.3.4 に近い 7.5Y8.4.6 黄	や中赤 100以下の石英・長石・角閃石含む	良	
98	赤土器 赤土器	32	NRD4	16.8	(4.8)	マツ	角頭庄	7.5Y8.4.6 黄 7.5Y8.4.6 黄	や中赤 100以下の石英・長石・角閃石含む	良好	

99	養生工事 養生	32	NR04	18.0	(4.2)	マフ	ホコハラズリ後指置	10YR5/3 に近い黄緑 10YR6/3 に近い黄緑	やや暗 10m以下の石炭・長石・角閃石を含む	良好	
100	養生工事 養生	32	NR04	15.0	(8.0)	マフ	指置	7.5YR5/4 に近い暗 2.5YR5/6 濃緑	やや暗 20m以下の石炭・長石・角閃石・雲母を含む	良好	
101	養生工事 広口壁	32	NR04	23.0	(9.0)	粗いタテハク	ナデ 接合面	7.5YR5/4 に近い暗 7.5YR5/4 に近い暗	やや暗 20m以下の石炭・長石・角閃石を含む	良好	
102	養生工事 長巻	32	NR04	20.0	(3.2)	マフ	マフ	10YR5/4 に近い黄緑 2.5YR5/6 濃緑	やや暗 20m以下の石炭・長石・角閃石を含む	良好	
103	養生工事 長巻	31	NR04	16.3	(3.0)	マフ	マフ	5YR5/4 に近い赤褐 5YR5/6 濃赤褐	やや暗 20m以下の石炭・長石・角閃石を含む	良好	
104	養生工事 新線車	32	NR04		2.3	マフ	マフ	10YR5/4 に近い赤褐 10YR6/4 に近い赤褐	やや暗 20m以下の石炭・長石を含む	良好	
105	養生工事 養生	32	NR04		(5.0)	マフ	ヘラ指置	5YR5/4 暗 2.5Y/1 濃緑	やや暗 20m以下の石炭・長石を含む	良好	
106	養生工事 養生	32	NR04	7.0	(4.4)	タテハラヒキ	指置	5YR5/6 に近い赤褐 10YR5/3 に近い黄緑	やや暗 20m以下の石炭・長石・角閃石を含む	良好	
107	養生工事 養生	32	NR04	0.5	(3.0)	タテハラヒキ	タテハラズリ	7.5YR5/4 に近い暗 7.5YR5/4 に近い暗	やや暗 20m以下の石炭・長石・角閃石・雲母を含む	良好	
108	養生工事 養生	32	NR04	5.6	(4.2)	タテハラヒキ	ナデ	7.5YR5/4 に近い暗 7.5YR5/4 に近い暗	やや暗 20m以下の石炭・長石を含む	良好	
109	養生工事 養生	32	NR04	7.4	(5.0)	マフ	指置	7.5YR5/4 暗 5YR5/6 に近い赤褐	やや暗 20m以下の石炭・長石・角閃石を含む	良好	
110	養生工事 養生	32	NR04	7.4	(3.0)	マフ	ナデ	5YR5/6 に近い暗 5YR6/4 に近い黄緑	やや暗 20m以下の石炭・長石を含む	良好	
111	養生工事 養生	32	NR04	5.9	(2.0)	マフ	マフ	7.5YR5/4 暗 7.5YR5/4 に近い暗	やや暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
112	養生工事 養生	32	NR04	2.0	(5.0)	ナデ	粗ナデ	7.5YR5/4 に近い暗 7.5YR5/4 に近い暗	やや暗 20m以下の石炭・長石・角閃石・雲母を含む	良好	
113	養生工事 養生	32	NR04	0.6	(7.7)	ナデ	ナデ	10YR5/2 灰黄 10YR5/3 に近い黄緑	やや暗 20m以下の石炭・長石・角閃石を含む	良好	
114	養生工事 養生	32	NR04	5.0	(2.1)	マフ	マフ	10YR5/3 に近い黄緑 5YR5/6 濃赤褐	粗 20m以下の石炭・長石を含む	良好	
115	養生工事 養生	32	NR04	6.0	(2.2)	マフ	マフ	7.5YR5/4 に近い暗 7.5YR5/4 に近い暗	粗 20m以下の石炭・長石・角閃石を含む	良好	
116	養生工事 養生	32	NR04	5.6	(3.3)	ナデ	ナデ	10YR5/4 濃赤褐 10YR5/3 濃赤褐	やや暗 20m以下の石炭・長石を含む	良好	
117	養生工事 養生	29	NR04	2.5	(2.0)	指置	ナデ	7.5YR5/4 に近い暗 10YR5/2 灰黄	やや暗 20m以下の石炭・長石・角閃石・雲母を含む	良好	
118	養生工事 養生	32	NR04	29.0	(8.1)	コナラズリ後タテハラヒキ後指置	ナデ	2.5YR5/3 明赤褐 2.5YR5/2 濃赤	やや暗 20m以下の石炭・長石・角閃石を含む	良好	
119	養生工事 養生	33	NR07	0.9	(2.4)	接合面 斜形カシ	ナデ	7.5YR5/3 に近い暗 7.5YR5/3 に近い暗	やや暗 20m以下の石炭・長石・角閃石を含む	良好	
120	養生工事 養生	33	NR07	18.4	(1.3)	ナデ	ナデ	10YR5/4 に近い黄緑 10YR5/4 に近い暗	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
121	土工部 土留	34	SK1001	34.9	(10.4)	粗いタテハラヒキ後指置	粗ナデ	7.5YR5/3 に近い暗 10YR5/4 に近い黄緑	やや暗 20m以下の石炭・長石を含む	良好	
122	土工部 土留	34	SK1001	25.0	(8.2)	指置	ナデ	7.5YR5/2 濃赤 7.5YR5/1 暗赤	やや暗 20m以下の石炭・長石を含む	良好	
123	土工部 土留	40	SD31005	6.0	(3.3)	接合面 マフ	マフ	2.5YR/1 暗赤 2.5YR/1 灰白	暗 20m以下の石炭・長石を含む	良好	
124	土工部 土留	40	SD31005	5.0	(2.6)	マフ	マフ	2.5YR/1 灰白 2.5YR/1 灰白	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
125	土工部 土留	40	SD31005	7.4	(3.3)	指置	ナデ	2.5YR/3 濃黄 2.5YR/2 濃黄	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
126	土工部 土留	40	SD31005	8.2	(1.4)	マフ	マフ	10YR5/2 灰白 10YR5/1 暗灰	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
127	土工部 養生	50	NR08			ナデ	粗ナデ	5YR5/3 濃黄 5YR5/4 濃黄	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
128	土工部 養生	50	NR09			ナデ	粗ナデ	5YR/1 灰 5YR/1 灰	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
129	土工部 養生	50	NR09	18.0	(7.9)	ナデ	粗ナデ	5YR5/2 灰 7.5YR5/1 暗赤	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
130	土工部 養生	50	NR09	37.0	(8.0)	指置	ナデ	10YR5/1 暗赤 2.5Y/2 濃黄	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
131	土工部 養生	50	NR09	35.0	(6.3)	指置	ナデ	5YR5/4 に近い暗 5YR5/4 に近い暗	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
132	土工部 養生	50	NR09	29.6	(5.0)	指置	ナデ	10YR5/3 濃黄褐 10YR5/3 濃黄褐	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
133	土工部 養生	50	NR09	16.6	(9.9)	ナデ	ナデ	2.5YR5/2 に近い赤褐 2.5YR/3 濃黄	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
134	土工部 養生	50	NR09	27.2	(9.3)	指置	粗ナデ	5YR5/2 灰 5YR5/2 灰	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
135	土工部 養生	50	NR09	9.4	(9.3)	ナデ、ケズリ	指置	10R5/2 灰 10R5/4 赤褐	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
136	土工部 養生	50	NR09	4.4	(2.1)	指置	指置	2.5YR/3 濃黄 2.5YR/3 濃黄	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
137	土工部 養生	50	NR09	4.0	(3.5)	指置	指置	5YR5/1 灰白 5YR5/1 灰白	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
138	土工部 養生	50	NR09		(3.0)	指置	指置	10Y5/2 オリーブ灰 10Y5/2 オリーブ灰	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
139	土工部 養生	50	NR09		(3.3)	粗ナデ	粗ナデ	5YR5/4 暗 5YR5/4 暗	やや暗 20m以下の石炭・長石を含む	良好	
140	土工部 養生	51	SE31001	26.2	(7.6)	指置	粗いコナラ	5YR5/2 灰 7.5YR5/3 に近い暗	やや暗 20m以下の石炭・長石・雲母を含む	良好	
141	土工部 養生	51	SE31001	29.0	(4.7)	ナデ	ナデ	5YR5/2 灰 5YR5/1 暗赤	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
142	土工部 養生	51	SE31001	4.1	(1.9)	接合面 高純灰土	高純	5YR/1 灰 5YR/1 灰	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
143	土工部 養生	51	SE31001	10.7	3.6	2.7	高台無筋	高純	5YR/1 灰 5YR/1 灰	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好
144	土工部 養生	51	SE31001	4.2	(2.3)	高台無筋	高純	5YR5/2 灰 5YR5/2 灰	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
145	土工部 養生	51	SE31001	17.4	7.4	10.2	高台無筋	高純	5YR/1 灰 5YR/1 灰	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好
146	土工部 養生	51	SE31001	10.0	(0.6)	マフ	マフ	10YR5/2 灰白 10YR5/2 灰白	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
147	土工部 養生	51	SE31001	8.0	(2.8)	粗ナデ	ナデ	10YR5/2 灰白 10YR5/2 灰白	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	
148	土工部 養生	51	SD31004	13.0	8.0	2.0	指置	7.5YR5/4 濃黄褐 7.5YR5/4 濃黄褐	暗 10m以下の石炭・長石を含む	良好	

141	土師器 土師器 土師器	53	SDS1001	10.0	(0.8)	回転ナデ	回転ナデ	10Y97/2 に近い黄褐色 10Y97/2 に近い黄褐色	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
142	土師器 土師器	53	SDS1001	8.6	(1.0)	回転ナデ	回転ナデ	10Y98/2 灰白 10Y98/2 灰白	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
143	土師器 土師器	53	SDS1001		(9.1)	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y9/2 に近い黄褐色	や中砂	100以下の石炭・長石を含む	良好
144	土師器 土師器	53	SDS1001	14.0	(4.1)	高台輪軸 砂目	高輪 砂目 高輪 砂目	5Y6/3 オリーブ黄 5Y6/3 オリーブ黄	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
145	土師器 土師器	54	SDS1006	4.5	(1.3)	高台輪軸 砂目	高輪 砂目 高輪 砂目	10Y6/1 灰 10Y6/1 灰	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
146	土師器 土師器	55	SDS1018	5.6	(2.1)	高台輪軸	高輪 高台目	5Y7/1 灰白 5Y7/1 灰白	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
147	土師器 土師器	55	SDS1019	5.0	(1.1)	高輪	高輪 高輪	7.5Y6/1 暗緑灰 7.5Y6/1 暗緑灰	暗緑 暗緑		良好
148	土師器 土師器	55	SDS1019	3.6	(2.3)	高台輪軸	高輪 高輪	5Y4/1 灰 5Y4/1 灰	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
149	土師器 土師器	55	SDS1019	5.6	(2.3)	高輪	高輪 高輪	10Y6/1 暗緑灰 2.5Y9/2 黄	暗緑 暗緑		良好
150	土師器 土師器	55	SDS1019	6.8	2.8	高輪	高輪	10Y6/1 暗緑灰 10Y6/1 暗緑灰	暗緑 暗緑		良好
151	土師器 土師器	55	SDS1019	11.6	(4.4)	ナデ	コホナラズリ 高台目	7.5Y6/4 に近い黄褐色 7.5Y6/2 に近い黄褐色	や中砂	100以下の石炭・長石を含む	良好
152	土師器 土師器	55	SDS1019	22.0	(8.9)	高台輪軸 混合黄	高台目 高台目	10Y9/3 灰黄緑 10Y9/3 に近い黄褐色	や中砂 や中砂	100以下の石炭・長石を含む	良
153	土師器 土師器	55	SDS1019	24.0	(15.5)	ナデ	高台目	10Y9/3 に近い黄褐色	や中砂	100以下の石炭・長石を含む	良好
154	土師器 土師器	55	SDS1019	32.3	(11.1)	ナデ	ナデ 高台目	10Y9/3 に近い黄褐色 10Y9/4 黄緑	や中砂 や中砂	100以下の石炭・長石を含む	良好
155	土師器 土師器	55	SDS1019	39.1	(3.8)	ナデ	ナデ 高台目	2.5Y9/6 暗 2.5Y9/7 暗	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
156	土師器 土師器	55	SDS1019	15.8	(4.7)	ナデ	ナデ 高台目	2.5Y9/3 に近い黄褐色 2.5Y9/3 に近い黄褐色	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
157	土師器 土師器	56	SKS1001	7.6	(8.9)	ナデ 高台輪軸	ナデ 高台目	10Y4/2 灰赤 10Y4/2 灰赤	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
158	土師器 土師器	56	SKS1001	27.8	(8.4)	ナデ	ナデ 高台目	7.5Y5/2 灰赤 7.5Y5/3 灰赤	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
159	土師器 土師器	56	SKS1001	11.6	(1.7)	高台輪軸	高台目 高台目	10Y4/4 黄緑 10Y4/4 黄緑	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
160	土師器 土師器	56	SKS1001	34.4	(2.3)	高台輪軸	高台目	10Y4/1 黄緑 2.5Y3/2 暗黄緑	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良
161	土師器 土師器	56	SKS1001	31.8	(2.6)	高台輪軸	ナデ	10Y9/3 黄緑 10Y9/3 黄緑	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良
162	土師器 土師器	56	SKS1001	36.0	(3.2)	高台輪軸	ナデ	10Y9/2 黄緑 5Y9/1 灰白	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
163	土師器 土師器	56	SKS1001	40.0	(3.3)	高台輪軸	ナデ	10Y9/1 黄緑 10Y9/2 灰黄緑	灰 灰	100以下の石炭・長石・燧石を含む	良
164	土師器 土師器	56	SKS1001	42.0	(2.3)	高台輪軸	ナデ	10Y9/3 灰黄緑 2.5Y7/1 灰白	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
165	土師器 土師器	56	SKS1001	38.0	(2.8)	高台輪軸	コホナラズリ	2.5Y4/2 暗黄緑 5Y5/1 灰	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
166	土師器 土師器	56	SKS1001	38.0	(4.2)	高台輪軸	高台目 高台目	10Y9/3 黄緑 10Y9/2 灰黄緑	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良
167	土師器 土師器	56	SKS1001	38.0	(1.3)	高台輪軸	ナデ	2.5Y3/2 暗黄緑 7.5Y7/2 黄赤	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良
168	土師器 土師器	56	SKS1001	35.5	(2.9)	高台輪軸	ナデ	2.5Y2/1 黄 10Y9/3 黄緑	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
169	土師器 土師器	57	SKS1010	3.2	(2.5)	高輪 高台輪軸	高輪 高台目	10Y9/1 黄緑 10Y9/1 黄緑	暗緑 暗緑		良好
170	土師器 土師器	57	SKS1010	3.6	(2.1)	高輪 高台輪軸	高輪 高台目	7.5Y9/1 暗緑灰 7.5Y9/1 暗緑灰	暗緑 暗緑		良好
171	土師器 土師器	57	SKS1010	9.6	(1.7)	高輪	高輪	10Y9/2 灰赤 10Y9/2 灰赤	暗緑 暗緑		良好
172	土師器 土師器	57	SKS1010	9.6	(2.4)	ナデ	ナデ	10Y9/3 黄緑 10Y9/3 黄緑	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
173	土師器 土師器	58	SKS1017	18.6	(3.2)	ナデ	ナデ	10Y9/4 に近い黄褐色 7.5Y9/6/4 に近い黄褐色	や中砂 や中砂	100以下の石炭・長石を含む	良
174	土師器 土師器	58	SKS1017	32.8	(30.1)	ナデ	ナデ	10Y9/4 に近い黄褐色 10Y9/4 に近い黄褐色	や中砂 や中砂	100以下の石炭・長石を含む	良
175	土師器 土師器	58	SKS1026	16.0	(2.2)	高台輪軸	高輪	10Y6/1 灰 10Y6/1 灰	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
176	土師器 土師器	58	SKS1026	13.5	(1.7)	高台輪軸	高輪	5Y6/3 オリーブ黄 5Y6/3 オリーブ黄	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
177	土師器 土師器	58	SKS1026	11.6	(3.2)	高輪	高輪	7.5Y6/1 暗緑灰 7.5Y6/1 暗緑灰	暗緑 暗緑		良好
178	土師器 土師器	59	SKS1020	3.6	(1.7)	高輪 高台輪軸	高輪 高台目	2.5Y9/1 灰白 2.5Y9/1 灰白	暗緑 暗緑		良
179	土師器 土師器	59	SKS1020	12.6	(3.2)	高輪	高輪	2.5Y9/2 黄赤 2.5Y9/2 黄赤	暗緑 暗緑		良好
180	土師器 土師器	59	SKS1020	11.0	(3.0)	ナデ	ナデ	7.5Y6/1 黄赤 7.5Y6/2 灰赤	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
181	土師器 土師器	58	SKS1020	14.6	(3.0)	ナデ	ナデ 高台目	2.5Y9/2 黄赤 2.5Y9/6/4 に近い黄褐色	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
182	土師器 土師器	60	SKS1025	9.0	(1.2)	高輪 高台輪軸	高輪 高台目	5Y9/1 灰白 5Y9/1 灰白	暗緑 暗緑		良好
183	土師器 土師器	61	SKS1020	24.6	(3.4)	ナデ 高台輪軸	ナデ 高台目	2.5Y9/6/4 に近い黄褐色 2.5Y9/6/4 に近い黄褐色	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
184	土師器 土師器	61	SKS1030	26.4	(4.4)	ナデ 高台輪軸	ナデ 高台目	5Y9/1 黄赤 5Y9/1 黄赤	灰 灰	100以下の石炭・長石・燧石を含む	良好
185	土師器 土師器	61	SKS1030	37.0	(5.3)	高台輪軸	高台目	10Y9/3 黄緑 10Y9/3 黄緑	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
186	土師器 土師器	61	SKS1030	13.5	(34.8)	高台輪軸 高輪	高台目 高輪	10Y9/1 黄赤 10Y9/1 黄赤	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好
187	土師器 土師器	61	SKS1030	5.0	(2.2)	高輪	高輪	10Y9/2 灰黄 10Y9/2 灰黄	暗緑 暗緑		良好
188	土師器 土師器	62	SKS1031	12.2	(2.0)	高台輪軸	高台目	5Y9/2 灰赤 5Y9/2 灰赤	灰 灰	100以下の石炭・長石を含む	良好

199	肥後県高田郡	22	SK51001	12.0	5.3	3.1	高合無輪 特石	無輪 特石	1070/2 長輪 1076/4 に近い無輪	積立	良好	良好
200	福岡県柳井郡	88	SD61012	29.0	(4.6)		ナデ	ナデ	N3/0 灰 M5/0 灰	やや密		良好
201	福岡県高橋郡	86	SD61012	8.0	(1.7)		田舎ナデ	田舎ナデ	7370/2 灰輪 7378/2 灰輪	やや密 10m以下の石炭・長石含む		良好
202	熊本県相模郡	68	SD61012	3.0	(2.6)		瓦輪	瓦輪	M5/0 灰白 1070/2 灰白	積立		良好
203	熊本県高田郡	86	SD61012	3.8	(25.1)		無輪	無輪	2377/3 流黄粉 2377/3 流黄粉	積立		良好
204	熊本県高田郡	86	SD61012	16.2	10.0	7.8	無輪 新輪、新ノ目送無輪	無輪 新輪、新ノ目送無輪	1007/1 新輪 1007/1 新輪	積立		良好
205	熊本県高田郡	87	SD61012	21.4	(7.8)		コバク	コバク	1070/1 積立 M4/0 積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
206	熊本県高田郡	87	SD61012	24.0	(4.9)		コバク	コバク	N4/0 灰 M4/0 灰	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
207	熊本県高田郡	87	SD61012	13.0	(7.1)		指願庄	板ナデ無輪積立	2377/1 黄灰 1070/1 積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
208	熊本県高田郡	87	SD61012	5.0	(4.7)		ナデ	ナデ	1070/4 に近い黄粉 1070/4 に近い黄粉	やや密 10m以下の石炭・長石含む		良好
209	熊本県高田郡	87	SD61012	40.0	(8.7)		指願庄	ナデ	2377/1 黄灰 2377/1 黄灰	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
210	熊本県高田郡	87	SD61012	41.4	12.4	(7.2)	指願庄、コバク	ナデ	1070/1 積立 2377/1 黄灰	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
211	熊本県高田郡	87	SD61012	28.0	(7.8)		コバク無輪積立 高合・灰	コバク	1070/2 流黄粉 1070/2 流黄粉	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
212	熊本県高田郡	87	SD61012	40.0	(4.7)		指願庄	コバク	7370/1 積立 1070/1 積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
213	熊本県高田郡	87	SD61012	31.0	20.0	20.5	ナデ、指願庄	ナデ、指願庄	1070/1 積立 1070/4 に近い黄粉	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
214	熊本県高田郡	87	SD61012	22.0	(8.8)		指願庄 赤土	指願庄 赤土	1070/4 積立 1070/4 積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
215	熊本県高田郡	88	SD61012				ナデ	指願庄	M5/0 灰 M5/0 灰	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
216	熊本県高田郡	89	SD61020	6.0	4.2	0.9	ナデ	ナデ	7370/3 流黄粉 7370/3 流黄粉	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
217	熊本県高田郡	89	SD61020	3.0	5.0	1.0	ナデ	ナデ	1070/2 灰白 1070/2 灰白	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
218	熊本県高田郡	89	SD61020	8.4	5.0	1.2	ナデ	ナデ	7370/2 に近い積立 7370/2 に近い積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
219	熊本県高田郡	89	SD61020	7.4	5.0	1.5	ナデ	ナデ	1070/2 灰白 1070/2 灰白	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
220	熊本県高田郡	89	SD61020	11.0	(1.8)		ナデ	ナデ	1070/2 灰白 1070/2 灰白	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
221	熊本県高田郡	89	SD61020	9.0	(3.0)		青無輪	青無輪	H05/2 オリーブ灰 1070/2 オリーブ灰	積立		良好
222	熊本県高田郡	89	SD61020	40.0	(8.0)		指願庄	ナデ	1070/1 積立 1070/2 流黄粉	やや密 10m以下の石炭・長石含む		良好
223	熊本県高田郡	89	SD61020	40.0	(3.0)		ナデ	ナデ	H07/2 に近い無輪 H07/2 に近い無輪	密 10m以下の石炭・長石・黄粉含む		良好
224	熊本県高田郡	89	SD61020	40.0	(4.0)		ナデ	ナデ	7370/3 流黄粉 7370/3 流黄粉	やや密 10m以下の石炭・長石含む		良好
225	熊本県高田郡	89	SD61020	24.0	(5.4)		指願庄	ナデ	7370/3 流黄粉 9707/3 積立	やや密 10m以下の石炭・長石含む		良好
226	熊本県高田郡	89	SD61020	22.0	(4.9)		ナデ	ナデ	1070/2 灰白 1070/2 灰白	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
227	熊本県高田郡	89	SD61020	24.0	(4.5)		指願庄	ナデ	7370/4 に近い積立 7370/4 に近い積立	密 10m以下の石炭・長石・黄粉含む		良好
228	熊本県高田郡	89	SD61020	20.0	(7.3)		指願庄	ナデ	H07/2 流黄粉 1070/3 流黄粉	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
229	熊本県高田郡	89	SD61020	25.0	(4.0)		指願庄	ナデ	H07/4 に近い積立 7370/4 に近い積立	密 10m以下の石炭・長石・黄粉含む		良好
230	熊本県高田郡	89	SD61020	16.7	(8.3)		板ナデ	コバク	7370/4 に近い積立 7370/4 に近い積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
231	熊本県高田郡	89	SD61020	16.7	(8.7)		板ナデ	コバク	570/8 積立 7370/4 に近い積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
232	熊本県高田郡	89	SD61020		(8.5)		板ナデ	ナデ	570/8 赤輪 570/8 赤輪	やや密 10m以下の石炭・長石含む		良好
233	熊本県高田郡	89	SD61020		(8.8)		板ナデ	ナデ	1070/4 に近い黄粉 1070/4 に近い黄粉	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
234	熊本県高田郡	89	SD61020		(7.8)		指願庄	ナデ	2370/2 流黄粉 2370/2 流黄粉	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
235	熊本県高田郡	89	SD61020		(1.7)		ナデ	ナデ	7370/3 に近い積立 7370/3 に近い積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
236	熊本県高田郡	89	SD61020	20.0	(4.5)		指願庄	板ナデ	570/8 積立 570/8 積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
237	熊本県高田郡	89	SD61020	17.8	(2.9)		ハバ指願庄	コバク	1070/3 流黄粉 1070/3 流黄粉	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
238	熊本県高田郡	89	SD61020	23.0	(4.6)		ナデ、指願庄	コバク	7370/2 に近い積立 7370/2 に近い積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
239	熊本県高田郡	89	SD61020	24.0	(4.3)		ナデ	ナデ	9707/3 積立 1070/3 に近い黄粉	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
240	熊本県高田郡	70	SD61020	22.0	(9.8)		ナデ	ナデ	1070/3 に近い黄粉 7370/4 に近い積立	密 10m以下の石炭・長石・黄粉含む		良好
241	熊本県高田郡	70	SD61020	34.2	(8.5)		指願庄後ナデ	コバク	H07/4 に近い積立 9707/4 に近い積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
242	熊本県高田郡	70	SD61020	37.0	(6.7)		指願庄後ナデ	板ナデ	7370/4 に近い積立 7370/4 に近い積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
243	熊本県高田郡	70	SD61020	16.0	(5.1)		指願庄	板ナデ	1070/3 流黄粉 7370/4 に近い積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
244	熊本県高田郡	70	SD61020	15.0	(6.0)		指願庄	ナデ	7370/3 に近い積立 1070/3 に近い積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
245	熊本県高田郡	70	SD61020	12.0	(4.8)		ナデ	ナデ	2370/1 黄灰 1070/3 に近い黄粉	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
246	熊本県高田郡	70	SD61020	15.0	(5.8)		ナデ	ナデ	570/8/3 に近い積立 7370/3 に近い積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
247	熊本県高田郡	70	SD61020	17.0	(5.0)		ナデ	ナデ	2370/6 積立 2370/6 積立	密 10m以下の石炭・長石含む		良好
248	熊本県高田郡	70	SD61020				積立	積立	M5/0 灰 M5/0 灰	密 10m以下の石炭・長石含む		良好

246	丸瓦	70	SD41020			ナデ	布目	N4.0 灰 N6.0 灰	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
247	丸瓦	70	SD41020			ナデ	布目	N4.0 灰 N4.0 灰	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
251	土師瓦	70	SD41020			横溝	縦溝	2.5YR7/4 に近い 2.5YR7/4 に近い	やや密	3m以下の石炭・長石含む	良好
252	丸瓦	70	SD41020			横溝	布目、コビキA	N4.0 灰 N4.0 灰	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
254	丸瓦	70	SD41020			布目	ナデ	N6.0 灰 N6.0 灰	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
255	丸瓦	70	SD41020			ナデ	ナデ	N6.0 灰 N6.0 灰	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
256	丸瓦	71	SD41020			布アデ	布目、コビキA、横溝	N6.0 灰 N6.0 灰	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
259	肥前系陶器 鉢	72	SD61021	34.0	(3.5)	横溝	横溝	2.5YR4/2 灰黄 2.5YR1/1 灰白	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
260	土師瓦土器 出物	73	SD41021	43.0	(4.7)	横溝	ヨコハケ	10YR4/1 黄灰 10YR5/2 黄黄緑	密	1m以下の石炭・長石含む	良
261	肥前系陶器 土師瓦	73	SD41022	29.0	(3.1)	ナデ	ナデ	10YR4/1 黄灰 10YR6/2 灰黄緑	やや密	3m以下の石炭・長石含む	良好
262	土師瓦土器	73	SD41022		(9.0)	横溝ナデ		5YR5/3 に近い赤褐	やや密	3m以下の石炭・長石含む	良好
263	肥前系陶器 土師瓦	73	SD41022	4.4	(2.4)	高台無飾 砂目	横溝 砂目	5YR1/2 灰白 5YR1/1 灰白	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
264	肥前系陶器 土師瓦	73	SD41022	4.4	(1.8)	高台無飾 砂目	横溝 砂目	2.5YR1/2 灰白 2.5YR1/1 灰白	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
265	肥前系陶器 土師瓦	73	SD41022	4.0	(2.0)	高台無飾 砂目	横溝 砂目	2.5YR6/2 に近い黄 5Y7/1 灰白	横溝		良好
266	肥前系陶器 土師瓦	73	SD41022	4.8	(1.4)	高台無飾 砂目	横溝 砂目	2.5YR6/2 に近い黄 2.5Y7/1 灰白	やや密	3m以下の石炭・長石含む	良好
267	肥前系陶器 土師瓦	73	SD41022	5.4	(2.3)	高台無飾 砂目	横溝 砂目	2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	横溝		良好
268	肥前系陶器 土師瓦	73	SD41022	4.0	(1.6)	高台無飾 砂目	横溝 砂目	2.5Y7/2 灰黄 5Y7/1 灰白	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
269	土師瓦土器	73	SD41023	26.0	(7.5)	横子目タナキ	ヨコハケ	5YR1/1 灰 5YR1/1 灰	密	1m以下の石炭・長石含む	良
270	土師瓦土器	73	SD41023	28.4	(4.5)	横子目タナキ	ヨコハケ	5YR1/1 灰 5YR1/1 灰	密	1m以下の石炭・長石含む	良
271	土師瓦土器	73	SD41023	26.6	(6.3)	横溝	横溝	2.5YR6/2 に近い黄 5YR6/4 に近い黄	やや密	3m以下の石炭・長石含む	良好
272	肥前系陶器 土師瓦	73	SD41023	34.0	(3.7)	ナデ	ナデ	5YR6/2 灰黄 2.5YR6/2 灰黄	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
273	肥前系陶器 土師瓦	73	SD41023	32.4	4.5	高台無飾 砂目	横溝 砂目	2.5Y7/1 灰白 5Y6/2 灰白	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
274	肥前系陶器 土師瓦	73	SD41023	14.0	4.1	高台無飾 砂目	横溝 砂目	2.5Y7/2 黄褐 2.5Y7/2 黄褐	横溝		良好
275	肥前系陶器 土師瓦	73	SD41023	3.8	(1.0)	高台無飾 砂目	横溝 砂目	10YR6/2 に近い黄褐 2.5YR4/2 黄褐	横溝		良好
276	肥前系陶器 土師瓦	73	SD41023	7.4	(2.4)	高台無飾 砂目	横溝 砂目	5YR6/4 に近い黄 10YR7/4 に近い黄	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
277	土師瓦土器	73	SD41023		(4.3)	マツ	マツ	10YR7/4 に近い黄褐 10YR7/4 に近い黄褐	やや密	3m以下の石炭・長石含む	良好
278	土師瓦土器	73	SD41023			マツ	マツ	2.5Y4/1 黄灰 2.5Y4/1 黄灰	密	1m以下の石炭・長石含む	良
279	土師瓦土器	73	SD41023			横溝	横溝	5YR5/6 黄赤褐 5YR5/6 黄赤褐	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
280	土師瓦土器	73	SD41023	24.0	(3.6)	ナデ	粗いヨコハケ	2.5YR7/4 に近い黄 2.5YR7/4 に近い黄	やや密	3m以下の石炭・長石・炭屑含む	良好
281	土師瓦土器	74	SD41021		(10.1)	ナデ	ナデ	2.5YR6/4 に近い黄 2.5YR6/4 に近い黄	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
282	肥前系陶器 土師瓦	74	SD41021		(10.1)	高台無飾	横溝	2.5YR1/1 灰白 10YR3/2 黄褐	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
283	肥前系陶器 土師瓦	77	SD41022	27.0	(4.3)	横溝	ナデ	10YR6/2 黄灰 10YR6/1 黄灰	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
284	肥前系陶器 土師瓦	77	SD41022	27.2	(5.8)	ナデ	ナデ	2.5Y1/1 灰白 2.5Y1/1 灰白	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
285	土師瓦土器	77	SD41022		(7.8)	ナデ	ナデ	5YR5/4 に近い赤褐	やや密	3m以下の石炭・長石含む	良好
286	土師瓦土器	77	SD41022	5.0	4.3	ナデ	ナデ	10YR6/2 灰白 10YR6/2 灰白	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
287	土師瓦土器	77	SD41022	9.0	(1.3)	マツ	マツ	2.5YR6/3 黄黄緑 2.5YR6/3 黄黄緑	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
288	土師瓦土器	77	SD41022	19.0	4.6	マツ	マツ	2.5YR6/4 黄黄緑 2.5YR6/4 黄黄緑	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
289	土師瓦土器	77	SD41022	11.6	7.6	ナデ	ナデ	2.5YR7/4 に近い黄 2.5YR7/4 に近い黄	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
290	土師瓦土器	77	SD41022	10.8	8.7	ナデ	ナデ	10YR6/2 灰白 10YR7/4 に近い黄	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
291	土師瓦土器	78	SD41025	44.0	(6.5)	横溝	ヨコハケ横溝	10YR3/2 灰白 10YR4/2 黄黄緑	やや密	2m以下の石炭・長石・炭屑含む	良好
292	土師瓦土器	79	SD41011	32.0	(11.0)	横子目タナキ	ヨコハケ	10YR7/2 に近い黄褐 10YR7/2 に近い黄褐	密	1m以下の石炭・長石・炭屑含む	良
293	土師瓦土器	82	SD41020		(7.8)	ナデ	ナデ	2.5YR2/1 灰白	やや密	3m以下の石炭・長石含む	良好
294	土師瓦土器	82	SD41020	10.0	4.3	ナデ	ナデ	10YR3/3 黄黄緑 10YR3/3 黄黄緑	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
295	肥前系陶器 土師瓦	83	SD41021	13.2	2.2	高台無飾	横溝	2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	やや密	3m以下の石炭・長石含む	良好
296	肥前系陶器 土師瓦	83	SD41021	9.8	(2.5)	高台無飾	横溝	2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	密	2m以下の石炭・長石含む	良好
297	肥前系陶器 土師瓦	83	SD41021	3.0	(2.0)	高台無飾	横溝	2.5YR6/4 に近い黄 2.5YR6/4 に近い黄	横溝		良好
298	肥前系陶器 土師瓦	83	SD41021	2.6	(2.0)	高台無飾	横溝	10YR7/3 に近い黄褐 2.5Y7/1 灰白	やや密	1m以下の石炭・長石含む	良好
299	肥前系陶器 土師瓦	83	SD41021	12.6	4.6	3.3	横溝	5YR1/1 灰白 5YR1/1 灰白	密	1m以下の石炭・長石含む	良好
299	土師瓦土器	83	SD41021	28.8	(6.9)	マツ	マツ	10YR7/3 に近い黄褐 10YR7/3 に近い黄褐	密	1m以下の石炭・長石含む	良

299	土師窯 軒式瓦	05	SK61033			舟目 唐草文(片山巻1号葉巻)	板子ナ	7.9YR6/3 に近い 7.5YR6/3 に近い	焼	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
300	瀬戸産瓦西陣 瓦	84	SK61033	11.0	14.4	唐草 唐文透付	唐摺 唐摺透付	2.5YR7/2 灰白 2.5YR7/2 灰白	積瓦		良好
301	土師瓦土師 唐摺	05	SK61035		14.1	舟目透付 透付	ナデ	10YR7/4 に近い 5YR7/2 に近い	積瓦	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
302	土師瓦土師 唐摺	05	SK61035	27.4	20.2	ナデ	ナデ	7.5YR6.4 に近い 7.5YR6.4 に近い	中や粗	10cm以下の石瓦・長石・肉灰石・燐母含む	良好
303	土師瓦土師 唐摺	05	SK61035	28.6	19.9	透付 透付	ヨコハケ	5YR4/2 灰黄 5YR4/2 灰黄	中や粗	10cm以下の石瓦・長石・燐母含む	良好
304	土師瓦土師 唐摺	05	SK61035	27.6	15.8	透付 透付	ナデ	7.5YR6.4 に近い 2.5YR7/4 に近い	中や粗	10cm以下の石瓦・長石・燐母含む	良好
305	特級海部 唐摺	01	SK61035	28.0	17.0	透付 透付	ナデ	2.5YR7/4 濃黄 2.5YR7/4 濃黄	中や粗	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
306	特級海部 唐摺	05	SK61035	32.0	14.1	唐摺ヘラウズリ	ナデ	10YR7/1 黄灰 2.5YR5/1 黄灰	中や粗	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
307	土師瓦土師 唐摺	05	SK61035	42.0	13.2	唐摺瓦	ナデ	7.5YR6.1 黄灰 7.5YR6.1 黄灰	中や粗	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
308	土師瓦土師 唐摺	05	SK61035	40.0	12.8	唐摺瓦	ヨコハケ	7.5YR6.1 黄灰 10YR6/3 に近い	中や粗	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
309	土師瓦土師 唐摺	05	SK61035	60.4	18.2	唐摺瓦	ナデ	5YR5/6 赤 2.5YR6/3 に近い	中や粗	10cm以下の石瓦・長石・燐母含む	良好
310	土師瓦土師 唐摺	06	SK61070	32.0	13.4	マツ	マツ	2.5YR6/3 赤 5YR5/6 赤	中や粗	10cm以下の石瓦・長石・燐母含む	良好
311	土師瓦土師 唐摺	06	SK61070	25.6	14.3	ヨコハケ	ヨコハケ	2.5YR6/3 赤 2.5YR6/3 赤	中や粗	10cm以下の石瓦・長石・燐母含む	良好
312	土師瓦 丸瓦	06	SK61070			マツ	マツ	5Y6/7 灰 2.5Y6/2 黄	粗	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
313	土師瓦 丸瓦	06	SK61070			唐ナデ	唐ナデ	2.5Y7/1 灰白 7.5Y6/1 灰	粗	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
314	土師瓦海部 唐摺	07	SK61061	16.0	12.0	唐摺	唐摺	5Y6/2 灰 5Y6/2 灰	積瓦		良好
315	土師瓦海部 唐摺	07	SK61061	0.8	3.8	唐摺唐摺	唐摺 唐摺	5Y6/2 灰 5Y6/2 灰	積瓦	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
316	土師瓦海部 唐摺	05	SK61061	34.8	15.4	13.1	ナデ	10Y6/6 赤 10Y6/6 赤	粗	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
317	土師瓦海部 唐摺	09	SK61061	32.0	13.4	10.5	唐摺 唐摺	7.5YR6/3 に近い 2.5Y7/2 灰白	粗	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
318	土師瓦海部 唐摺	08	SK61061	13.0	14.3	10.3	唐摺 唐摺	5YR3/1 黄 2.5Y7/1 灰白	積瓦		良好
319	土師瓦土師 唐摺	08	SK61060	40.0	13.4	唐摺瓦	唐摺瓦	2.5Y7/1 灰白 10YR6/3 黄	中や粗	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
320	土師瓦土師 唐摺	09	SK61060	12.4	14.2	13.2	唐摺唐摺	10YR6/3 黄 10YR6/3 黄	中や粗	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
321	瀬戸産瓦西陣 瓦	09	SK61060		12.5	唐摺	唐摺	2.5Y7/1 灰白 2.5Y7/1 灰白	積瓦		良好
322	土師瓦土師 唐摺	03	SK61060		16.5	唐摺ナデ	唐摺ナデ	7.5YR6/4 に近い 10Y7/1 灰白	中や粗	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
323	土師瓦土師 唐摺	09	SK61060			唐摺	唐摺	10Y6/1 灰 10Y6/1 灰	粗	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
324	土師瓦土師 唐摺	06	SK61060	8.8	4.0	11.8	ナデ	7.5YR7/6 黄 7.5YR7/6 黄	粗	10cm以下の石瓦・長石含む	良好
325	輸入磁器	01	SK61122		11.9	唐摺 唐草文	唐摺 唐草文	10YR7/1 灰白 10YR7/1 灰白	積瓦		良好

木器観察表

番号	器種	図版	透視名	法量 (cm)			特 徴
				長	幅	深	
W1	漆器厨鉢	26	NR06	13.1	13.1	3.6	先端部に突起あり。
W2	漆器	26	NR06	48.5	23.6	2.2	突起部および突起あり。表面に漆状の蝕工痕あり。突起部のみ蝕化。

鉄器観察表

番号	器種	図版	透視名	法量 (cm)			特 徴
				長	幅	深	
K1	釘	75	NR06	8.5	1.3	1.3	先端部に切痕あり。

石器観察表

番号	器種	図版	透視名	法量 (cm)			重量 (g)	石材	特 徴
				長	幅	深			
S1	石斧丁	4	第9巻	2.2	2.6	0.3	4.1	サヌカイト	刃部から剝離部にかけて磨き、縁あり。
S2	石斧丁	4	第9巻	2.6	3.5	0.9	12.9	サヌカイト	半分磨き。縁あり。刃部は断面より磨き。
S3	石斧丁	17	NR03	6.4	2.5	0.3	16.3	サヌカイト	縁あり。刃部は断面より磨き。
S4	輪磨	29	SK21022	7.1	4.2	1.6	51.8	サヌカイト	断面より磨き。剝離部は刃部が縁あり。刃部は断面より磨き。
S5	石鏃	31	NR04	12.6	6.7	1.2	186.1	サヌカイト	両側、剝離部は断面を磨き。
S6	石斧丁	31	NR04	4.1	10.3	0.7	56.1	サヌカイト	尖利。縁あり。刃部は断面より磨き。
S7	製片	31	NR04	6.6	11.6	1.6	241.9	サヌカイト	両側と剝離部に自然磨きを磨き。
S8	製片	31	NR04	8.4	10.4	1.2	163.3	サヌカイト	断面より磨き。刃部をつくる。剝離部は自然磨きを磨き。
S9	製片	33	NR07	4.5	3.6	1.1	19.5	サヌカイト	剝離部は断面を磨き。刃部は断面より磨き。
S10	石臼	32	SK31061	27.5	12.2	2.5	-	凝灰岩	半分のみ磨き。刃部は断面より磨き。円孔あり。
S11	石臼	32	SK31031	16.2	2.9	0.6	72.6	凝灰岩	刃部を磨き。断面は断面より磨き。
S12	石臼	67	SD61017	30.1	16.9	10.2	-	凝灰岩	半分のみ磨き。円孔あり。
S13	石臼	71	SD61020	29.0	29.9	6.7	-	凝灰岩	尖利。中心凹状の剝離部あり。円孔あり。
S14	石臼	73	SD61022	8.9	8.8	6.4	387.7	凝灰岩	一部のみ磨き。円孔あり。
S15	柱状片石片石	80	SK61012	5.6	2.8	2.1	60.3	凝灰岩片	先端部のみ磨き。
S16	石臼	80	SK61012	30.0	20.0	10.2	-	凝灰岩	半分のみ磨き。円孔あり。
S17	石臼	81	SK61012	42.9	32.4	4.5	-	凝灰岩	内面に工具痕あり。内面は断面より磨き。厚度あり。
S18	石臼	84	SK61033	14.3	19.0	10.9	-	凝灰岩	一部のみ磨き。円孔あり。
S19	石臼	88	SK61085	25.8	14.3	7.2	-	凝灰岩	半分のみ磨き。円孔あり。
S20	石臼	88	SK61085	31.0	17.9	9.7	-	凝灰岩	半分のみ磨き。円孔あり。

写 真 图 版



写真1 I・II区全景（南から）



写真2 I～III区全景（南から）



写真3 IV・V区全景(南から)



写真4 VI・VII区全景(南から)



写真5 作業風景 (Ⅲ区東から)



写真6 I区南壁土層 (東から)

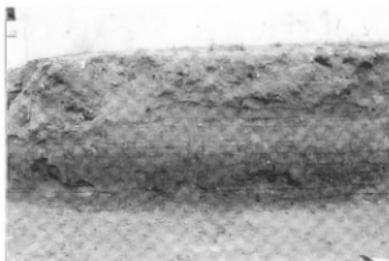


写真7 I区南壁土層 (北から)

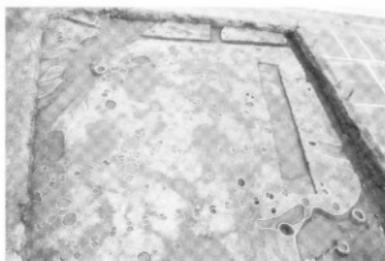


写真8 I区 第2遺構面完掘状況 (西から)



写真9 I区小区画水田 (南から)



写真10 I区検出噴砂 (西から)



写真11 I区 検出噴砂 (北から)



写真12 I区検出噴砂 (西から)



写真 13 II区第1遺構面完掘状況（東から）



写真 14 II区第2遺構面完掘状況（南から）

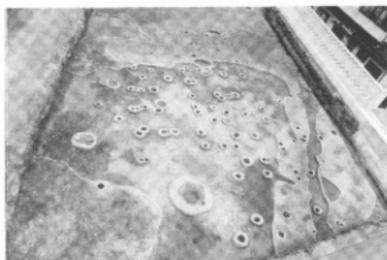


写真 15 III区 NR04 及び掘立柱建物群（西から）



写真 16 III区 NR06 西肩（北から）



写真 17 III区 NR05 西肩（南から）

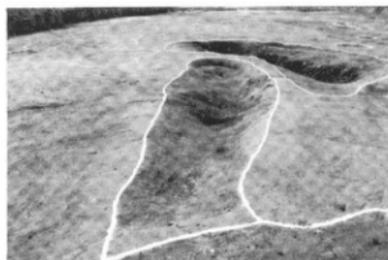


写真 18 III区 SK32004（東から）



写真 19 III区 SK32002（東から）

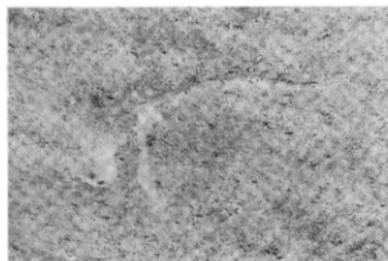


写真 20 III区検出噴砂（西から）



写真 21 Ⅲ区 NR06 (南から)

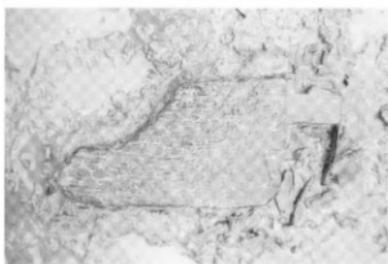


写真 22 Ⅲ区 NR06 木器出土状況 (北から)



写真 23 Ⅲ区 NR06 木器出土状況 (北から)



写真 24 実測風景 (南から)



写真 25 V区完掘状況 (南から)



写真 26 V区 SE51001 上面 (東から)



写真 27 V区 SE51001 断面 (西から)



写真 28 V区 SE51001 完掘状況 (南から)



写真 29 VI区完掘状況 (西から)



写真 30 VI区 SD61020 (西から)

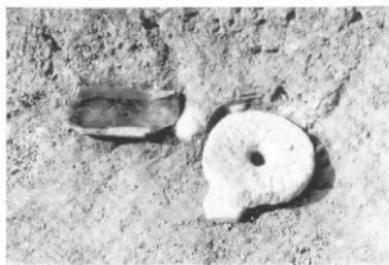


写真 31 VI区 SD61020 遺物出土状況 (北から)

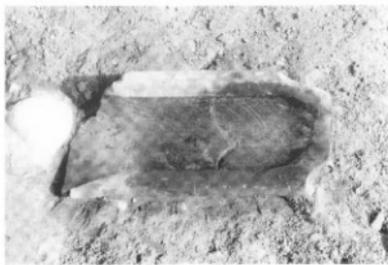


写真 32 VI区 SD61020 遺物出土状況 (南から)



写真 33 VI区 SD61020 (西から)



写真 34 VI区 SD61023 (西から)

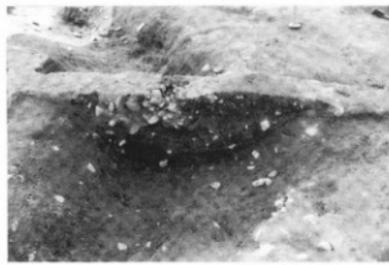


写真 35 VI区 SD61023 断面 (北から)

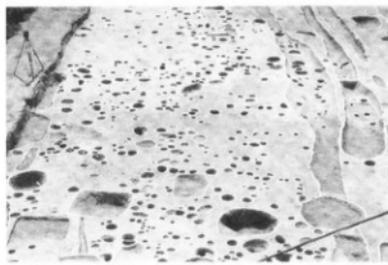


写真 36 VI区 SD61023 内ビット群 (西から)